
緋弾のアリア - 黒の疾風・紅い閃光

阿良々木 雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア - 黒の疾風・紅い閃光

【Nコード】

N2316W

【作者名】

阿良々木 雅

【あらすじ】

『黒の疾風・紅い閃光』都市伝説のような存在の武偵。東京武偵高校強襲科二年の紅坂黒霧。彼の正体は『黒の疾風・紅い閃光』だ。そう、彼こそが都市伝説のような武偵。桁外れな身体能力と剣技・銃技さまざまな業を持っている。しかし、彼の、紅坂の正体を知っている者は数えられるくらいしかない。そんな彼は、自身の特異体質で悩まされることにもなる。もう一人の主人公、東京武偵高校探偵科二年の遠山キンジ。彼はとある朝に『武偵殺し』によってチャリジャックをされる。武偵殺しから逃げよう必死にチャリを

こいでいたら空からピンク髪のツインテール少女が降ってきたのだ。この出会いによって遠山キンジの物語の歯車は動き出す。この物語は出会いと想いが交差した時、大きな歯車が動き出す。【現在：武偵殺し&戦姉妹／戦兄弟／戦兄妹／戦姉弟&一年生物語&出会い編】これは物語の始まりを告げるための最初の章。東京武偵高校……そこは武偵を育成する学園。そんな学園で勃発する事件に登場人物たちが関わっていく。【企画】緋弾のアリア―運命を射す漆黒の魔弾―や、様々な作品とのコラボあり。 注意事項：作者は銃に詳しくない。作者の妄想などがあります。感想に荒らしはやめてください m(＿)＿m【現在：書き直し中／改良中】原作：赤松中学先生／緋弾のアリア A r i a t h e S c a r l e t A m m o【二次創作作者／絵師：阿良々木 雅】現在書き直し完了話／装填弾のみ

装填弾 動き出す歯車の前兆（前書き）

朝に出会った皆様には、おはようございます。
昼に出会った皆様には、こんにちは。
夜に出会った皆様には、こんばんは。

新しく出会えた皆様には、はじめましてm（　　）m

『緋弾のアリア』タグを利用している皆様。作者／読者の皆様。どうも。お久しぶりです。この作品「緋弾のアリア - 黒の疾風・紅い閃光」の改良＆書き直しを決意し現在執筆奮闘中です。今回から挿絵が加わっています。絵師は僕こと阿良々木 雅です。もちろん本編も、です。では、前書きはこの辺りにします。
誤字／脱字／漢字変換ミスなど、あるかもしれませんが、どうぞその辺りを御了承の上で【装填弾】をご覧ください。

【装填弾／CAST】

遠山キンジ

星伽白雪

紅坂黒霧

銀錠空牙

刺々森鋭時

中空知美咲

綴 梅子

【用語／読み方etc】

黒錠之無崩壁
こくじょうのむほうへき

BASS（まだ紹介無し）
アサルト

強襲科
スナイプ

狙撃科

謀^{レザ}報^ド科
タギョラ
尋問科
インクスタ
探偵科
レヒア
鑑識科
アムド
装備科
ロジ
車輛科
コネクト
通信科
インフォルマ
情報科
メディアカ
衛生科
アンビュラス
救護科
超能力捜査研究科（SSR）
特殊捜査研究科（CVR）
マスターズ
教務科
この物語はフィクションです。

装填弾 動き出す齒車の前兆

……… 青々とした空から女の子が降ってくると思うか？

昨晚見た映画では、降ってきてたんだ。

まあ映画とか漫画とか小説とかアニメならいい導入かもしれないよな。

だけど、ここは二次元の世界じゃない。そう、それは不思議で非日常なことが起きるプロローグ。

物語の主人公は正義の味方になって、降ってきた人間との大冒険が始まる。

ああ、空から癒し系女子が降ってきて欲しい！

……… なんて言うのは猿知恵並みに『浅はか』ってモンだ。

だってそんな女の子、普通な娘こなワケがないんだから。 普通じゃない非日常の世界に連れ込まれ、正義の味方に仕立てられる。

そう二次元ならまだしも、ここは現実世界なんだから。

現実世界でのそれは危険で、面倒なことに決まっている。

だから少なくとも俺、遠山キンジは……。

空から女の子なんて、降ってこなくていい。

俺はとにかく普通に、平凡な人生を送りたい。

だからまずは、“転校”したい。その一言だけ言いたかったんだ。
このトチ狂った東京武偵高校から……。

……… ピン、ポーン………。

慎ましいドアチャイムの音で目が覚める（覚醒）。

……… ん？ あっ。

……いけね。

どうやら俺は、トランクス一丁で寝ていたらしい。

枕元に置いてある携帯を見ると……現在時刻は、朝の6時5分。

（こんな朝っぱらから、誰だよ……ったく）

まだ時間あるし寝るか……。いや、居留守を使ってやろうか。

だが、あのチャイムの“慎ましさ”にイヤな予感がする。

イヤな予感ほどの中率が高い人生を送っているからなあ。

遅くもなく早くもなく、もそもそとワイシャツを羽織り制服のズボンを穿くと、俺は1人で住むには広すぎるこのマンションの部屋を渡り歩き……^{ドア}扉の覗き穴から、外を見た。

「……………」

するとそこには……予想通りの人物……

白雪が立っていた。

純白のブラウス。臙脂色の襟とスカート。

シミ一つ無い武偵高のセーラー服を着ている片手には手鏡があり、その手鏡で何やらせつせと前髪を直している。

白雪。おまえは何がしたいんだ？こんな所（扉前）で。

そう思ってたら今度はすうーっはぁーと深呼吸を始めた。

深呼吸を終えた白雪は「よしっ！」と呟くと自身の頬を叩いて気合い？をいれている。

相変わらずだな。

行動の全てがワケ分からんヤツだ。

- - ガチャ。

「白雪」

ドアを開けると、白雪は慌ててしまったのか片手に持っていた手鏡を落としてしまったのだ。

「大丈夫か？白雪」

「キンちゃん！」

拾い上げた手鏡をサッと臙脂色のスカートのポケットに隠す。
落ちていた白雪は、ぱあっと顔を明るくし、昔のあだ名で俺を呼んできた。

「その呼び方、やめろって言っただろ。俺はキンちゃんじゃない。キンジだぞ」

「あつ……ごっ、ごめんね。でもでも私……キンちゃんのこと考えてたから、キンちゃんを見たらつい、あつ、私またキンちゃんって……でもね、キンちゃんはキンちゃんだし……あつ、また……ごっ、ごめんね、ごめんねキンちゃん……あつ」

白雪はあわあわと口を手で押さえる。その顔は見る間に蒼白になりかけていた。

……文句を言う気も失せてしまったよ。まったく。

彼、遠山キンジの目の前にいる彼女……名を星伽白雪。

『キンちゃん』という呼び方で分かるように、遠山と星伽は幼なじみなのだ。

彼女の外見は名前の通り雪肌で、さつき直していた艶々の黒髪は子供の頃からずっと前髪ぱっつん。目つきはおつとりと優しげで、睫毛はけぶるように長く綺麗で落ち着かせてくれる瞳と言っても過言ではないだろう。

さすがは代々続く星伽神社の巫女さんだ。相変わらず、絵に描いたような大和撫子って感じた。いや感じではなく大和撫子だな。

「ていうか、ここは仮にも男子寮だぞ。よくないぞ、軽々しく来るのは」

「あ、あの。でも私、昨日まで伊勢神宮に合宿で行って……キンちゃんのお世話、なんにもできなかったから……その、私」

「しなくていいって」

「……でも……ぐ、すん……ぐす」

……う

泣かないでくれよ白雪。

…はあー。

「あー分かった分かった！」

目を潤ませた白雪を、俺は仕方なく部屋に上げてやることにする。
ホント男は女の涙に弱いつていうのは事実かもな。

「お……おじゃましますっ」

白雪は90度ぐらいの深あぁーいお辞儀をしてから玄関に上がり、脱いだ黒いストラップシューズを丁寧に揃えた。

「で、どうした。何しにきたんだよ」

きちんとテーブルにつくのも面倒だったので、俺は座卓の脇にどっかりと腰を下ろす。

「キンちゃん。こ、これ」

白雪は自分もふわりと正座すると、持っていた和布の包みを解い

た。

そして解いた和布から出てきたのは漆塗りの重箱を俺の前に差し出すと、蒔絵つきの綺麗なフタを開ける。

その重箱にはふんわり柔らかそうな玉子焼き、ちゃんと向きを揃えて並べた海老の甘辛煮、銀鮭、西条柿といった豪華食材と、白く光るごはんが並んでいた。

「これ……作るの大変だったんじゃないか？」

塗り箸を渡されながら言うと、白雪は、

「う、ううん、ちょっと早起きしただけ。それにキンちゃん、春休みの間またコンビニのお弁当ばかり食べてるんじゃないかな……って思ったら、心配になっちゃって……」

「そんなこと、お前（白雪）に関係ないだろ」

と言いつつ、実際のところ春休みはコンビニ弁当ばかり食べていた俺はそのうまそうなお重を有り難くいただくことにした。いつも思ふことなんだが、白雪の料理、特に和食は本当に美味い。うん、美味だ。

白雪は正座したまま頬を少し赤らめて俯き、ミカンを剥きはじめた。白い筋を丁寧に丁寧に取って小皿に乗せているところを見るに、それも俺にくれるつもりらしい。

まあ……お礼ぐらい言っておくか。

腹いっぱいになった俺はミカンを頬張りながら、白雪に対して真

剣な目つきで向き直った。

「……えっと、いつもありがとな白雪」

「えっ。あ、キンちゃんもありがと……ありがとございますっ」

「なんでお前がありがとなんだよ。ていうか三つ指つくな。土下座してるみたいだぞ」

「だ、だって、キンちゃんが食べてくれて、お礼を言ってくれたから……」

白雪は嬉しそうな顔を上げ、なんでか目を潤ませて蚊の鳴くような声を出す。

……白雪。お前……

なんで何時もそんなにオドオドするんだ。もっと胸を張って生きてくれ。

そんなに立派……言ってて恥ずかしくなってきた。続きだったな……そんなに立派で大きな胸をしてるんだから。

そう思った俺は……つい、本当についなんだ。

白雪の、その立派で大きな……もう言いたくない。大きな胸を見てしまった。

こっちに三つ指をつく白雪のセーラー服の胸元は、ちょっと弛んで開いている。

そこには深あーい胸の谷間が覗いており、黒い、レースの下着が

- - -

（く……黒はないだろ！高校生で黒レースは！）

高校生らしからぬけしからん下着から、遠山は慌てて目を逸らすのだった。が……

……じわっ。

“体の芯”に血が集まるような、あの、危ない感覚がしてきた。

――ダメだ。

禁止しているんだ、俺は。

“こういうのを”。自分に。

「――こちそうさまっ」

白雪から逃げるように、俺は勢いよく立ち上がる。

ふう。どうやら“セーフ”だったみたいだな。白雪はテキパキと重箱を片付けると、今度はソファアに放られていた武偵高の学ランを取ってきた。

「キンちゃん。今日から一緒に二年生だね。はい、“防弾制服”」

彼、遠山が防弾制服を羽織ると、テレビの脇に放り投げてあった“拳銃”も持ってくる。

「……始業式ぐらい、銃は持たなくてもいいだろ」

「ダメだよキンちゃん、校則なんだから」

と、白雪はその場に両膝をついてこっちのベルトにホルスターごと帯銃させてしまう。

校則……『武偵高の生徒は、学内での拳銃と刀剣の携帯を義務づける』、か。

ああ、“普通じゃない”。

ウンザリするほど普通じゃないんだよ。武偵高は。

「それに、また『武偵殺し』みたいなのが出るかもしれないし……
……」

白雪は膝立ちのまま、心配そうな上目遣いで俺を見上げてきた。

「……『武偵殺し』？」

「ほら、あの、年明けに周知メールが出た連続殺人事件のこと」

ああ、そういえば、そんなもいたな。

確か……武偵の車やなんか爆弾を仕掛けて自由を奪った拳げ句、短機関銃のついたラジコンヘリで追い回して……海に突き落とす。そんな手口のヤツだったっけか。

「でも、アレは逮捕されたんだろ？」

「で、でも、模倣犯とかが出るかもしれないし。今朝の占いで、キンちゃん、女難の相が出たし。キンちゃんの身に何かあったら、私……私……ぐす……」

女難の相か。ある意味当たってるな。朝からコイツだからな。

白雪はまた涙目だし、校則違反でまた内申点が下がったら……今の俺の目標、『普通の高校への転校』が、やりにくくなる。まあ、武装ぐらいはしてやるか。

「分かった分かった。ほら、これで安心だろ。だから泣くなって」

俺は溜息をつき、ナイフも……兄の形見の、バタフライ・ナイフだ……棚から出して、ポケットに収める。

白雪は何でかそんな俺をうつとりと眺め、頬ほっぺに両手をあてていた。

「……キンちゃん。かつこいい。やっぱり先祖代々の『正義の味方』って感じだよ」

「やめてくれよ……ガキじゃあるまいし」

軽く吐き捨てるように言う遠山の胸に、白雪はるんと、どこから取り出した黒い名札をつけてきた。

『遠山キンジ』

武偵高では、4月には生徒全員が名札を付けるルールがある。俺はスルーするつもりだったが、白雪はそれを先読みして用意していたらしい。

さすがは生徒会長で園芸部長で手芸部長で女子バレー部長で偏差値75の超人的な、しっかり者だな。もしかしたら超人的の代名詞は星伽白雪なのかも……。

「……俺はメールをチェックしてから出る。白雪は先に行ってるよ」

「あつ、じゃあ、その間にお洗濯とかお皿洗いとか……」

「そんなことしないで、いいからっ」

「……は、はい。じゃあ……その。後でメールとか……くれると、嬉しいですよっ」

白雪はもじもじとそんなことを言い、ぺこり。

深あーくお辞儀をしてから、従順に部屋を出て行った。

……ふう。

やっと面倒くさいのが出ていつてくれたか。

PCの前に座り、ダラダラ……と、メールやWebを見る。

ダラダラ、ダラダラ……としていたら、時刻はいつの間にか7時55になっていた。

しまった。ちよつとダラダラしすぎたかな。

- - - 58分のバスには乗り遅れたな。

【視点：紅坂黒霧】

【AM：7時30分】

その頃、何もかも黒くしてしまうほど綺麗な漆黒の髪色に青く透き通っている瞳、整った顔つきと合わせるように防弾制服を着こなしている。

そんな彼の名前は紅坂黒霧。入学当初からのSランク武偵。学年は新二年生。

現在、紅坂は始業式が行われる体育館に向かって歩いていた。両隣にいる二人と共に - -

「なあ、黒霧。今日さ、『爆乳！メガネを取ったら美人！』っていうエロ本の発売日なんだけど、代わりに買ってきてくれない？」

「空牙。お前は……エロ本くらい黒霧に頼まず自分で買えよ」

と、紅坂を挟んで言い合っている二人。

紅坂の右隣で歩いている彼の名は、銀錠空牙。

黒髪の中に美しく輝く銀色のメッシュが所々に染って（はいって）いて、175・9センチという微妙な身長を気にしている。整髪料で整った髪型とは裏腹に防弾制服こと武偵高の制服は乱していた。それが一番わかるのが彼のズボンに装着^{ついて}いる銀色と黒色の手錠だった。歩きたびにジャラジャラという金属音をたてるくらい目立っている手錠。そんな彼と紅坂は中学時代からの腐れ縁兼親友なのだ。

「……煙草、煙草っ」と

と、言いつつ辺りを気にしながらも煙草を口に咥えライターを取り出そうと懷に手をつ突っ込んでいる彼の名は刺々森鋭時。172センチの身長を包み込むように武偵高制服を着ている。彼の瞳は髪色と同化させるような茶色で、特に目立つのは刺々森の耳だ。その両耳にはピアスがついており片耳だけ数えても8個もついているという外見をしている。

二人に挟まれながら歩いている紅坂は呆れたように頭を掻いていた。

そんな彼の肩に手を置き、空いた手で「ごめん」としながら、

「……黒霧。なっ、頼む！今月エロゲーが発売^{でる}から金あんま使えないんだよ。だから頼むってー」

「……なんで俺が買わないといけないんだよ空牙」

「そう言うなって！ほら眼鏡取ったら美人とか中空知っばいじゃん

♪だから――」

「だからとはなんだ、だからとは。まったく。お前は二年になっても成長しない奴だな」

「成長はしてるぜ！俺の煩惱がな！」

歩みを止め腰に手を当てながら威張っているが、威張るほどのことではないと思うのは俺だけか？

「威張るほどのことじゃねえだろ」

と、煙草の煙を吐きながら鋭時は突っ込んだ。
安心した。どうやら鋭時も同じこと思ってたんだな。

「うーむ。じゃあ、どうすればいいんだよ。ああー誰か転ばないかな？特に“女子”だな。パンツが（笑）」

駄目だ。コイツ（空牙）春休みの間、何にも成長してないぞ。

……飯に転んで、その、なんだパ、パンツが見えたとしても俺は……。

「――黒霧！前！前！」

「……………ん？あつ……」

少し妄想世界に行っていた俺の意識を現実世界へと戻してくれたのは鋭時の声だった、が……。

遅かった。

鋭時の警告（声）も間に合わず。

どしんっ。

「はわあっ！」

俺にぶつかって……どたっ。体育館の入り口付近の通路の床に尻餅をついてしまった。

びょん、と銀縁メガネが宙を舞う。紅坂がそれに視線を移動している下で、わしゃわしゃ。尻餅をついた人物は先程まで抱えていたであろう書類を撒き散らしてしまったのか必死にかき集めている。

「はわわわあ」

書類を集めていた人物は臙脂色の襟とスカートを着ていた。それは武偵高のセーラー服だ。その女子は後ろ髪だけではなく……前髪も長い娘で、瞳がほとんど隠れてしまっている。ん？待てよ。この声。まさか、な……

まだ、がさ、わしゃ、と書類を集めている音がしていたため、紅

坂はしゃがみ込み書類を集めようと手を伸ばした時――

「ふえ！」

と、声を出した少女の手を握りしめてしまったのだ。

俺は咄嗟に握りしめていた手を離し「わ、わりい」と相手の顔を見ながら謝ろうと顔を上げると……目の前には四つん這い状態の中空知がいた。

「……ど……どちらさま……ですか……？」

んうーっ？と眉を寄せ、目を細めて紅坂の顔を覗き込んできた。
ずい、ずい。

それでも見えないらしく、どんどん顔を近づける。吐息がかかるほどの至近距離まで。

長い前髪のせいで視界が悪いのか、目が悪いのか、その両方なのか。それは彼女にしか判らない。

ようやく彼女の目の前にしゃがみ込んでいる紅坂黒霧の顔が認識できたらしい彼女は、

「ッ！！」

ワシャーッ！

認識でき慌てたのか、かき集めていた書類を手放したため再度、

床に撒き散らしてしまったのだ。

「……大丈夫か？中空知」

書類を撒き散らしてしまった彼女を心配した紅坂が声を掛けると、
びくうつ！

彼女は、近くにあった書類を抱きしめるかのようにして身震いしていた。

「あ、わわ、そ、そその、その声と、か、顔は……こ、こう、こうさか君！」

あ……この残念過ぎる喋り方……直ってないな。やっぱり、中空知だ。

中空知 美咲。

通信科の新二年生。彼女、中空知 美咲は強襲作戦時のオペレーターをよくやってくれる生徒の一人なのだ。

武偵……正式名称『武装探偵』特に強襲科や攻撃型の武偵は、作戦中に無線つきのインカムで連絡を取り合う。

大規模な作戦の際や任務の時には、お互いの連絡が錯綜したり混乱したりしないようにオペレーターがつくのだ。

オペレーターは通信科に陣取り、チームやペアの状況を的確に説明してくれる。時には増援の到着時刻や天候の変化など、戦闘中の武偵たちからは見えない事象も教えてくれる頼りがいがある存在だ。
“昔の話”だが俺が作った“黒錠之無崩壁”がロシア系凶悪犯罪集団『スヴェントヴィト』の構成員を逮捕へと導いた隠れた功労者

の一人が中空知である。

中空知美咲のオペレーションは、いつも完璧だった。常に冷静に、何人もの武偵が矢継ぎ早に伝える不明瞭な声を全て聞き分け、状況を的確に伝えてくれる。

何より、言葉の発音がNHKのアナウンサーみたいに綺麗な声で、こちらが聞き間違えることがないくらいだ。そんな優秀で素晴らしいオペレーターだが、何故か武偵ランクはBなんだよな。

「…落ち着け中空知」

「は、はい……」

俺のせいで書類を撒き散らしてしまったっぽい。

「……これは、新一年生の人数などを表した書類か」

紅坂は一枚の書類を手に取り目を通した。

「は、はい、ま、ま教務科から、しよ、書類を体育館にいる先生へ届けてほしいと、頼まれちゃったので」

わしゃ、わしゃ、がさ、がさ。未だ四つん這いで書類を集める中空知……そんな彼女を見てあることに気がつく紅坂。

中空知の長い前髪の奥にメガネが無い事に気付いたのだ。

だが、俺はもう一つのこととも気が付いたのだ。そう、それは中空知とぶつかった時のことだった。

（……確か、メガネが宙に舞って……と、いうことは床に落下したのか）

思い出した俺は辺りを見回しメガネを探す。
すると、メガネは中空知の足付近に、ちょこん、とあった。しかし、今は書類を集めることに専念しよう。

（今、メガネのことを話したら絶対パニックってしまっただろうな。珍しくメガネのことを気にしてないみたいだし……）

にしても、この書類の量を中空知一人に頼むとか、教科科は何を考えているんだか。

「書類、集めるの手伝っよ」

と、言いながら書類集めを手伝ってあげることにした。
それを見た中空知は、

「あ、あ！いいんです、別にいいんで……」
「うっ、うっ、紅坂君が、手伝わなくても」

わたわたわたた。

手話みたいな状態で、彼女は両手を上下左右にジタバタさせてる。が……両手をジタバタさせた結果、集めていた書類がまた床に散らばってしまった。

「いや、そんな状態じゃ集め終わる頃には始業式終わっていると思うよ？中空知」

「で、でも……」

「気にするなよ。武偵憲章1条だ」

「はひっ……あ、ありがと、うございます！こ、紅坂君」

ぺこり！

四つん這い状態のまま、中空知は真っ黒な長い髪を揺らして深々と頭を下げる。

なんか照れるな。お礼を言われると。

ちよつと頬を指で搔いている俺の前で中空知は書類を、わしゃわしゃわしゃわしゃ、と勢いよく集めている。

中空知もやればできる子なんだな。さっきまで緩慢だった動作が、急に俊敏になった。

と、俺も書類を集めるか……

「…………っ！」

無防備な四つん這い状態の中空知のむっちりした太ももから目を逸らすため少し視線を上の方に逸らした、が……

(……………うっ……………ななな、中空知……………)

四つん這いのためか、四つん這いのせいか、どちらかはわからないが、そのせいで武偵高のセーラー服の首元が少しだらしくなっている。

……………って、制服姿で這っているから再認識させられたが……………で、デカイよな……………“胸”。雰囲気的には大人しいのにな……………。

前髪の上にチラチラと見える瞳も、綺麗だし。

……………はっ！何考えているんだ！書類を集めないと。

上を見ながら首を左右に軽く振った紅坂は書類を集めようと視線を本来の場所に移動しようと下へと顔を向けた時……………

(うっ……………これはヤバイ……………！)

これは神の悪戯か？悪戯ならタチが悪いぜ。

現在の中空知の胸元が見えてしまっているんだ……………

む、胸の下着……………ブラジャーというヤツか……………それが白木綿で、無地で、地味だけど、今の俺には刺激が強い部類に入る……………くらい、いやらしく見える。

『<http://m.photouzou.jp/photoshow/2071553/116133716>』

→挿絵です。見たい方はどうぞ。絵下手ですがm(´`´´)m『

ドクン……

高鳴る鼓動と身体の中に血が集まるような、あのモードに入る感覚がしてきたのだ。

- - - ヤバイヤバイ。

あのモード、“BASS”には。

少し中空知の胸から視線を逸らそうと空牙や鋭時の方を向くと空牙は自身の目を押さえていた。

すると- - -

「コンタクト落としてしまったー！中空知さん探してくれ」

「ふえっ！こ、こん、コンタクトですか！ち、ちちょっと待ってくだ、ささい！」

急に名前（名字）を呼ばれた中空知は少し身体を、びくっ！とさせたが、なんとか持ちこたえていた。

集めた書類を横に置きコンタクトを探している中空知。ん？空牙のヤツ、コンタクトしてたっけ？そんなことを思っていたら鋭時が空牙の頭を叩いた。

「痛っ！何すんだよ！鋭時。今いいとこなんだよ！」

銀錠は叩かれたところを押さえながら立ち上がった。

「鋭時。さっきのは叩き過ぎだ！もうちょっと加減してくれ」

「知らん。それはお前が中空知さんの胸を見てただろ」

「……う。そ、それは……」

刺々森に鋭いところをつかれて言葉を詰まらせる銀錠。そんな二人を余所に俺は、必死にコンタクトレンズを探している中空知にか聞こえない声で、

「……中空知。もう探さなくていいよ」

「え、で、でも、ぎ、銀錠君が、こ、ここ、困りませんか？」

「困らないよ。そんなに心配してくれて優しいんだな中空知は」

と、言った紅坂。

その言葉を聞いた中空知は顔を一気に赤らめた。

「や、や、や、やさ、やさ、やしく、優しくないです。こ、こう
こう、紅坂君のほ、ほうが……や、優しいですよ」

と、言いながら……ようやく、あるモノが無いことがわかったの
か小さな声で「め、メガネっ」と、漫画みたい到手探りでメガネを
探して始めた。うーん、どうして書類を集める時に気が付かなかっ
たんだろうと思いつつも紅坂は中空知のメガネを拾い上げると……
紅坂は「ほら、これだろ？中空知」と声を出し、銀縁メガネを差
し出した。

「あ、め、メガネ、あ、あり、ありがと、ございます……」

「ああ、どういたしまして中空知」

滑舌が悪い彼女を安心させるかのようにお礼を返しながら微笑む
紅坂。

「こ、紅坂君。そ、そろそろ、わ、私、こ、この、い、印刷ミスの
書類を、教務科に持って、い、行かないと、いけないので、だ、だ
から……」

わたわた。

何を伝えたいのかよく分からないぞ。まあ、いつものことが。

「まあ、とりあえず立とうぜ」

四つん這い状態からしゃがんでいる中空知に手を差し出した時だった……

ドゥッン!!

身体の芯を揺らすかのような銃声（轟音）が響いた。

「ひっ！」

中空知はその音（銃声）にビビって飛び上がり、しがみつくように俺の腕を掴んでくる。

「な、ななな、中空知さんッ!？」

裏返る声を出してしまった紅坂の身体に、バレーボールのような大きさのだらしないカンジの柔らかさをした胸が押しつけられた。俺にとっては鋭利な刃物を突きつけられたのと同じくらい危険性が高いんだ。こういうことは。

冷や汗が滲み出ている俺の目と、前髪で隠れていた目が合った中空知は――

「あ、あ、ひいっ！」

と、中空は耳まで真っ赤に染め上げながら俺を突き飛ばした。

ゴツッ。突き飛ばされた俺は床に後頭部をぶつけてしまう。

（痛い……………）

けど、“アレ”にならなかったようだからいいけど、さ。

にしても、あの銃声は44マグナム弾だったな。ということは、撃つたのは空牙か？と思いながら首だけを動かし確認すると案の定空牙は胸に装備ホルスターから44デザートイーグル（44DE）^{つけている}を抜いている。その銃口には微かに火薬の煙が残っていた。

まあ、ほったらかしにしてもコイツ等（鋭時と空牙）すぐ仲直りするから大丈夫だろう。

「こ、こ、紅坂君！た、だい、大丈夫で、ですか！」

……………相当テンパってるな。顔真っ赤じゃないか中空知。あ、たぶん俺も真っ赤なんだろうな。鼓動が早いし。

「だ、大丈夫だ。その書類代わりに教務科に持って行ってやるから、中空知は早く体育館に入っていていいぞ」

深呼吸をし、高鳴る鼓動を落ち着かせた俺は中空知が運んでいた書類を手に持ち立ち上がる。

すると、中空知は、

「で、でも、任されたのは、わ、わ私なので、わ、私が――」

彼女は「ふえっ！」と声を出し、額おでこを両手で押さえていた。
わたわた、としている中空知の額にデコピンをした紅坂。そのデコピンは強くはなく「ぺちっ」という可愛い音をたてたのだ。

「たまには、頼ってくれよ中空知」

「たたた、たよ、たたよ、頼りっ、つきり、です！こ、紅坂君には！」

「なら、ここは俺に任せてくれよ」

「は、はい！お、お願い、しし、します」

ぺこり！

中空知は真つ黒な長い髪を揺らして本日二度目の深あく頭を下げる。深あく下げた頭を上げた彼女は紅坂に、わたわたと手話みたいなようなモノで両手を上下左右にジタバタさせ、何か伝えようとしている。

「こゝ、こゝ、紅坂君！」

「ん？どうした？」

「よ、よければ、お、お礼を……し、ししたくて、でっ、でもでも、こ、紅坂君が迷惑でなければ、き、きよ今日、わ、私と一緒に帰って下さい！」

……………な、なんだと。

一緒に……………だと。

頭がフリーズしかけている俺を余所に「中空知が黒霧を下校に誘った……………」と鋭時と空牙が二人揃って驚いたような声を出した。

……………。

……………。

……………。

ばしっ！

リセットスイッチを押すかのように、フリーズしかけている紅坂の頭を叩いた銀錠。

「おい！黒霧。早く教務科行くんだろ？なら、とつとつ行こうぜ」

「……………え、ああ。あれ？中空知は？」

リセットが完了した俺の脳内はしつかりと、もとに戻っていた。

「中空知なら、体育館の中へ逃げるように走って行っただけ……」

と、言葉を詰まらせる刺々森。「どうした？」と言いつつ紅坂は刺々森が哀れそうなに見ている視線の先を見つめる。

そこには、先ほどまで書類を撒き散らし集めていた中空知 美咲の姿があった。

ていうか、大丈夫か？体育館入口でテンパっているぞ。

「まあ、中空知なら大丈夫だろ。うん、たぶん」

ちょっと、心配そうに言う空牙に「そ、そうだな」と返しつつ俺たちは教務科（職員室）へと向かうことにした。

【視点：紅坂黒霧】

職員室に到着した紅坂 黒霧と銀錠 空牙と刺々森 鋭時。黒錠之無崩壁の四人の内三人がこの場に揃っている。

現在来ている教務科は東京武偵高校の『3大危険地域』と呼ばれる物騒な所の一つである。

その『3大危険地域』を挙げよう。

強襲科。

地下倉庫。

そして、教務科だ。

教務科……教師の職員室（詰め所）にすぎない教務科が、何故『3大危険地域』に入っているのか。

答えは簡単なんだ。

武偵……武装している探偵、つまり銃、刀剣などを携帯している生徒がいる学校なのだから教師が普通なワケがないんだ。そう武偵高の教師が、危険人物ばかりなのだ。

先ほども説明したが、こんな特殊な学校を志願する生徒も生徒だが、先生も先生だ。普通じゃない学校に普通じゃない先生が来るのは必然かもしれない……。

（まあ……俺も他人事のように言えない立場だけど、さ）

………っと、話を戻そうか。普通じゃない学校の教師なんて、普通じゃない大人に決まっている？と俺は思う。

俺が知っているだけでも、前職が各国の特殊部隊、傭兵、マフィア、殺し屋……etcといった経歴の持ち主が集まっているのだ。

「聞かなければ良かった」と、この前キンジが溜息混じりに言っていたような気がする。

まあ、勿論探偵科や通信科などの教師には普通な方もいるのだが、それは悲しくも少数に過ぎないのだ。

「……ふう。失礼します」

と、口唇を動かし有声音を出した紅坂は扉を開け、『3大危険地域』の一つ教務科内（職員室）へと入室する。

「……通信科の中空知さんの代わりに、刷りミスの書類を教務科へ届けに来ました」

……ああ。

ヤバいッ。

緊張してきた。違う意味で鼓動が高くなっているぜ。

紅坂の声と扉が開く音に気付いた先生（教務科）は聞こえたきた音の方向に顔を向けた。

すると、扉付近でパソコンを弄っていた一人の教師が、

「んー？――紅坂かぁー……………」

と、女性にしては低めの声で、紅坂を呼ぶ。

その人物は、プフウィツ、との煙を吐き、煙草を灰皿に押しつけると、

「あふぁ…………どうしたア？教務科に来てえー」

俺の方を見つめながら机の上に置いてある四角いケースを手に取り妙に黒い草が巻いてある煙草を口に咥え、火を点けた女性の名は綴 梅子先生――尋問科の教諭をしており、黒いコートをだらしなく着ている腰には黒革のホルスターとそこに入った真つ黒な拳銃、グロック GLOCK 18 が丸見えになっていた。

綴先生は――生徒たちの中ではアブない部類の筆頭みたいな女性らしい。

だが彼、紅坂は綴のことをそうは思っていない様子である。何故？それは緊張によって固まっていた顔が解れていたからだ。

「……えっ！と、書類を教務科に渡しに来まして……」

「あー、書類ね。……えーっと……あれ……あ、刷りミス。刷りミスの書類ならその辺にあるゴミ箱に捨てといてくれたらいいからー」

ぶは、と煙草の煙を輪っか型に吹いた綴は、ゴミ箱の位置を人差し指で指し示すと再び煙草を口に咥えた。

俺は指し示されたゴミ箱に印刷ミスの書類を捨てるとゴミつきの椅子で足を組んで座っていた綴先生は立ち上がると、

「アンタたちいー。新二年生なんだから早く体育館に行けよあー」

「わかりました。では失礼しました綴先生」

紅坂は、そう言うってから綴に深く頭を下げ銀錠、刺々森と一緒に教務科を退室し体育館へと向かうのだった。

【AM：8時00分】

【場所：第三男子寮駐輪場】

【視点：遠山キンジ】

駐輪場で自転車の鍵を解除していた俺は白雪にメールだけはしておこうと思いメールを送信しといた。

（……メールしとかないと白雪のヤツ……大量にメールくるからなー）

「……さて、行くか」

あんなことが起きるなんて俺はまだ知る由もなかった。

……生涯。

生涯、彼、遠山キンジは、このAM7時58分のバスに乗り遅れたことを悔やむだろう。

なぜならこの後、空から女の子が降ってきてしまったのだから。

そう……

これは予期せぬ出会い……

俺の人生を大きく変える物語が始まるのだ……

一人のピンク髪の少女によって……

装填弾 動き出す歯車の前兆（後書き）

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を一弾ずつ読んでくださった皆様には、いつもありがとうございます。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を二十九弾まとめて読んでくださった皆様には初めまして。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】の書き直し&改良話装填弾を読んでくださった皆様、ありがとうございます。

お久しぶりですね。皆様。書き直し中に目の疲労感があった、阿良々木 雅です。

いえ、たぶん目は大丈夫です。僕は失明しません（笑）目見えなの方々にはすみませんm（――）m。

今回、いや今年から書き直し&改良&新たな話を執筆したいと思っています。そして、ついに明日1月10日……学校です。うーんメンドクサイな……。なんて思っています。まあ、頑張って行きますが。

さて、そんな状態で書いた『黒の疾風・紅い閃光』ですが、読者の皆様。挿絵はどうでしたか？やはり下手でしたでしょうか？それが気になっています。いきなり中空知登場に驚いている読者の皆様。中空知が好きな読者の皆様如何でしたでしょうか？

こんな感じで、書き直しを頑張っしていきます。

『緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光』の更新を待ちに待っていた皆様には本当に申し訳なかったです。ただ、1からやり直しので、かなり大変ですが緋弾のアリアAAネタや妄想ネタを加えて頑張っしていきますので期待してください……あまり大きな期待は……しないくださいね。この『黒の疾風・紅い閃光』の書き直し投稿ができたのも、本当に読者の皆様のおかげです。心より深く深くお礼申し上げます。

最後に、この作品を読んでくださった読者の皆様に、この場では

とても伝えきれない深い深い感謝を。

それでは、また皆様とお会いできることを願いつつ、執筆のアクセルを踏み込んでいきます。なので、これから、また阿良々木雅を、どうぞ、よろしく願います。なんか選挙みたいだ（笑）

次話も読んでいただけることを願いつつ。

今回は、ここで終わりにさせていただきます。

阿良々木 雅

第二弾 謎の武偵くLa bambina da I・ARIA（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます

昼に出会った 皆さんには
こんにちは

夜に出会った 皆さんには
こんばんは

『緋弾のアリア』 タグを利用している作者の方々。読者の方々。
どうも

阿良々木 雅です。

今回はアリアとキンジの出会いです。
最後に出てくる謎の人物は！？

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

第二弾 謎の武偵 La bambina da I・ARIA

乗り損ねた俺、遠山キンジは仕方なく通学路の光景を眺めながらチャリで登校することにした。

近所のコンビニとビデオ屋の脇を通り過ぎ、台場に行くモノレールの駅をくぐる。

その向こうに見えるのは、東京のビル群。

そうそう、言い忘れてたんだが現在俺が通っている学園、武偵高こと東京武偵高校は、レインボーブリッジの南に浮かぶ南北およそ2キロ・東西500メートルの長方形をした人工浮島（メガフロート）の上にある。学園島とあだ名されたこの人工浮島は、『武偵』を育成する総合教育機関だ。

武偵とは何か、それを説明しよう。

『武偵』とは事件や犯罪に抵抗して新設された国際的資格で、武偵免許を持つことができる。『武偵免許』を持つ者は武装を国から許可され逮捕権などを有するなど、警察と似た活動ができる。

ただし警察とは違うところがある。違うところとは金さえもらえば、『武偵法』が許可する範囲内であれば、どんな荒っぽい仕事でも下らない仕事でもどんなに悲惨な仕事でもこなす。つまりは……『便利屋』ってことだ。
で、だ。

この『東京武偵高校』では、通常の一般科目に加えて、専門科目の履修ができる。

『専門科目』とは学園の名の通り武偵の活動に関わる科目である。専門科目にも様々な科目がある。たとえば今さっき横を通り過ぎたのが探偵科（インケスタの専門棟）。

ちなみに俺は探偵科である。高1の3学期から俺が転科して入った所で、古式ゆかしい推理学や諸々の探偵術を学ぶ、まあこの学校の中では一番マトモな専門学科といえるだろう。

その先にあるのが通信科（コネクト）さらに向こうに見えるのは鑑識科（レビア）この辺りはまだ穏便だ。穏便なんだが、もう少し行くと去年の2学期まで俺が在籍していた……世間から悪名高き、強襲科（アサルト）がある。

……俺は体育館へ向けて、チャリのハンドルをきった。よし、なんとか始業式には間に合いそうだな。

そんなことを考えながら腕時計を見る。こんなトチ狂った学園とはいえ、1学期の始業式から遅刻するのは嫌だからな……。すると……

「そのチャリには爆弾が仕掛けてありヤガリマス」

……！！

……は！？

爆弾だ！！

何のイタズラだ……

「チャリを降り ヤガツタリ 減速 させヤガルと 爆発
しヤガリマス」

……… 妙な声。

それは耳に残りやすい声。
そんなことを分析していた俺は聞こえてきた言葉（（セリフ））
の一部………

……… 爆弾……… 爆発。 いきなり何なんだ！どこの馬鹿だよ！
どという冗談だよ！

汗だくな顔で周囲を見回すと……… 驚くことに……… 自転車のサドル
に爆弾いや……… ダイナマイト系に近い爆薬だった。
車輪を2つ平行に並べただけで走る、タイヤつきの十字架みたいな
な乗り物。

こいつは………。
たしか………。
『セグウェイ』………。
そんな名前だったはず………。

「助けを求めてはいけません。 ケータイを使用
した場合も 爆発 しヤガリマス」

セグウェイは無人で、人1人が乗るべき部分にはスピーカーと…
…1基の自動銃座が載っていた。

「……」

その銃座から俺を狙い撃とうとしている、銃口。

UZI（ウージー）

秒間10発の9ミリパラベラム弾を撃ち放つ。イスラエルIMI社の傑作短機関銃（サブマシンガン）だ。

「なっ……何なんだよ！ 何のイタズラだっ！」

そう大きな声で叫ぶが、セグウェイは何も答えない。

俺には銃口を向けながら併走してくるだけの短機関銃型セグウェイだ。

いったい何なんだ！？

いきなり何なんだよ！？

混乱する頭でサドルの裏にある爆弾を触る……。

（爆弾の線はだいたい五本だったかな？……何色があるかわからない。予測できる色は赤・青・黄・緑・白の五色）

線が何本あるかは、わからなかった。

だが、プラスチック爆弾型というのはわかった。それもこの大きさなら、自転車どころか自動車でも跡形なく消しとばせるサイズだぞ。

……マジかよ

全身の毛穴が開くような冷や汗が滲む。

こいつはたぶんイタズラじゃない。

ハメられた。チャリを乗っ取られた。

チャリジャック……。

くそつ。

なんで俺が。

なんでこんなことになったんだ。俺は万ーのことを考えて、とにかく人けのない場所を探して走り、走り、走り、第2グラウンドへと向かった。

金網越しに見た朝の第2グラウンドには、いつも通り誰もいない。

俺は仕方なしに、その入口めがけて自転車をこぐ。

セグウェイは相変わらず、銃口を向けながら併走してくる。この手口……。白雪が言っていた『武偵殺し』の模倣犯じゃないか？ そうだったとしても、どうすればいいんだよ！？

もちろん、ここへ（第2グラウンド前）に来るまでに死ぬほど考えたが、俺は結局何も手を考えられていなかった。

俺は……。

死ぬのか……。

こんな所ですか……。

「……………！？」

その時だった。こんなありえない非日常的な状況の中、さらにありえないものを見た。

今日はありえないことがおこる日なのですか？

グラウンドの近くにある7階建てのマンション……………たしか、あれは……女子寮の屋上の縁に、女の子が立っていたのだ。純白のブラウス。臙脂色の襟。臙脂色のスカート。

武偵高のセーラー服。

遠目にも分かる、長い、ピンクのツインテール。

ツインテールの彼女は屋上から飛び降りた。

（……………なっ！なにやってやがる！7階だぞ！）

一瞬……。

ほんの一瞬ペダルを踏み外しかけた俺は、慌てて足に意識をむける。

ウサギみたいにツインテールをなびかせて、虚空に身を踊らせたその女の子は……。

ふぁーっと。事前に屋上で滑空準備させてあったらしいパラグライダーを広々い虚空に広げていった。

チャリをこぎつつその光景を見ると、あるうことが、女の子はこっちめがけて降下してくるっ！

（馬鹿ヤロー！）

「ばっ、バカ！ 来るな！ この自転車には爆弾が」

残念だが俺の叫びは間に合わない。なぜなら彼女の速度が意外なまでに速かったからである。

すると少女はブランコみたいに身体を揺らしてし字に方向転換したかと思っただが！？ 右、左。少女は左右のふとももに着けたホルスターから、大型拳銃を2丁抜いた。

そして……。

「ほらそのバカ！ さつさと頭下げないさいよ！ 風穴あけるわよ！」

俺が頭を下げるよりも早く、問答無用でセグウェイを銃撃した。

拳銃……。

そもそも拳銃の平均交戦距離ってのがあって、その距離が7mと言われている。驚くことに少女と敵つまりセグウェイの距離はその倍以上ある。しかも不安定なパラグライダーから、おまけに二丁拳銃の水平撃ち。

これだけ不利な条件が揃ってしまっているにもかかわらず、彼女の弾は次々とセグウェイに命中していく。セグウェイは反撃するヒマを与えてもらえず、銃座と車輪がバラバラになった。

……。なんて射撃の腕をしているんだ。

あんな子（ピンクのツインテール少女）が、うちの学校にいたのか？

二丁拳銃回してホルスターに収めた少女は……。

ひらり……

オシリを振り子みたいにして、険しい表情のまま俺の頭上に飛んできた。

まだ安心するのはまだ早い。なぜなら俺のチャリのサドルには自動車をもつ端微塵にできる爆弾が貼り付いてるんだからな！

あの女の子を巻き込みたくない！ そう思った俺は、第二グラウンドへ入る。

「く、来るなって言っただろ！ この自転車には爆薬が仕掛けられてる！ 減速すると爆発するんだ！ お、お前も巻き込まれるぞ！ ってか 巻き込みたくないんだよ！ 逃げろ！」

「……………バカっ！ 見捨てないわよ！ 武偵憲章一条にあるでしょ！ 『仲間を信じ、仲間を助けよ』……………いくわよ！」

ツインテールの女の子が、気流をとらえてフワツと上昇する。

華麗なパラグライダー捌きに、俺はチャリに爆弾があることを忘れてその光景を見上げてしまう。

すげー運動神経だ。

ってか……………さっきの言葉……………。

『いくわよ！』って、何をする気だ。

俺を助けるつもりか？

……………どうやって？

少女はグラウンドの対角線上めがけて再び急降下し、こちらへ向かって鋭くUターンする。そして……………。

さっきまで手で引いていたブレークコードのハンドルにつま先を突っ込み、逆さ吊りの姿勢になった。

そのまま、物凄いスピードでまっすぐ飛んてくる。

減速しないようにチャリをこぐ、結果、俺はアイツに向かって走る形になった。

「……マジかよ！……くそっ」

相手の意図が分かって、俺は青くなる。

「ほらバカっ！ 全力でこぐっ！」

大声で命令された……。

逆さ吊りのまま両手を十字架みたいに広げていた。

バカはおまえのほうだ！

そんなふざけた助け方あるか！

仕方ない……他に助かる方法もねえし……やるしかないな。

俺はやケクソで、チャリをこぐ。

全力全開、全速力でこぐ！

俺はアイツに、アイツは俺に近づいていく。

2人の距離はみるみる縮まっていく。

……上下違う状態のまま、俺はツインテールの少女と抱き合った。

そして……

そのまま、空へ……

息苦しいくらいに顔が押しつけられた少女の下っ腹。

その下っ腹からは、梔の花のような、甘酸っぱい香りが……

そんなことを考えていると……………

ドガアアアンツ

閃光……

轟音……

爆風…… 立て続けにおこる出来事。

そして……

俺が乗り捨てたチャリが、木っ端微塵に爆発したんだ。
あのプラスチック爆弾は、やっぱり本物だった。

熱風によって俺たちの身体は放物線を描くように吹き飛ばされ、
グラウンドの片隅にある体育倉庫内に突っ込んでいった。

何かにぶつかったのだが……………ぶつかった物すら分からず……………

俺の…………意識は、一瞬、闇に落ちる……………

その頃……

第二グラウンドの周辺で

スガガガガンッ！

ＵＺＩが第二グラウンドの片隅にある体育倉庫に銃弾を浴びせていた。

すると……

シャキンッ！

体育倉庫を狙い撃っていたセグウェイたちは全て、その銃座のＵＺＩが金属音と共に、斬り裂かれた。

そこに立っていたのは――

黒ワイシャツに黒ズボンに黒マスク、紅の刀。ベルトにホルスタ
ーを装束に身を固めていた。

「……詮詮機会か……弱過ぎる」

そう呟いた彼は一体っ！！

第二弾 謎の武偵 La bambina da I・ARIA（後書き）

お久しぶりです！ 最近『S W O T』に劇ハマり中です。どうも、阿良々木 雅です。

あ、『S W O T』は週刊少年ジャンプで連載されていた漫画です。簡単に言えば主人公はがり勉野郎です。がり勉野郎が喧嘩の頂点を目指すみたいな漫画なんです。皆様も是非 お読みください。

まさかこんな早く二話目が執筆できるなんて思ってもなかったです。これもひとえに読者の皆様のおかげです。誠にありがとうございます。

ではでは、また皆様とお会いできることを願いつつ、でも少しガソリンを入れてからアクセルを踏んで走って行きたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いします。

第三弾 神崎・H・アリア（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます

昼に出会った 皆さんには
こんにちは

夜に出会った 皆さんには
こんばんは

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆さん。作者の皆様。読者の
皆様。

どうも

阿良々木 雅です。

ちなみに ^{みやび}雅です（笑）

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。
では、三話目を楽しんでください。

第三弾 神崎・H・アリア

.....

.....

.....

闇から、現実世界へ戻された俺の意識.....

「う.....っ。痛っ.....てえ.....」

.....俺は.....なんで、こんな場所にいるんだ？

.....ん？何か狭い箱のような空間に、尻餅をついた姿勢で収まっている。

体育倉庫.....

俺は現在体育倉庫にいる...

確か、プラスチック爆弾が爆発して体育倉庫に吹っ飛ばされたんだ.....なら、この狭い空間は.....ああ、なるほど。

これは、跳び箱の中だ。

どうやら一番上の段を吹っ飛ばして、中にハマってしまったらしい。

しかし、なぜか身動きが取れない。身動きが取れないのはここ（跳び箱）が狭いからであるのだが.....目の前から甘

酸っぱい香りがするのだ。

何かあるのだろうかと考えていた俺は手を動かしてみた。

なんだろう……あつたかくて……柔らかい。

脇腹を、両側から何か心地よい弾力をもったものに挟まれている。両肩には何かもたれかかっていた。今、気が付いたが、額の上には、ぶにぶにした物が乗っていた。

「ん……………」

額と頬で、そのぶにぶにした何かを押しつけるようにすると――

――

……………

俺に押しつけられていたのは……………

(…………女の子!? 可愛いな)

反射的に思ってしまうほど、可愛い女の子の顔だった。

女子寮から飛び降り、パラグライダーに乗ったままセグウェイ【
UZI】を破壊し、俺を空中にさらって助けてくれた勇敢な少女だった。

「……………」

少女。女子。女の子。ツインテール。可愛い。

それで気付く。

俺の脇腹を左右から挟んでいるのは、間違いなく女の子。つまりツインテール女子の太股だった。

両肩に乗っているのは、腕。なんでこんな体勢になっているんだ？それすら分からない。そして、俺は、勇敢な少女を抱っこみたいな状態で跳び箱にハマっているみたいなのだよ！まったくなんなのだよ！って、キャラ違うだろ！

落ち着け落ち着け……

ありえない……

ありえなさすぎだ！

女子と、密着し過ぎた。

ゾクゾク……と、血液が、体の中心に集まり始めるのがわかる。

ダ、ダメなんだ。俺は。

こういうのは、禁忌なんだ！

「…………お、おい。起きてるか？」

声を掛けてみたが、反応なし…………。

少女は気を失っているようだ。

ツンツンと長い睫毛、綺麗な口唇（くちびる）、艶やかなピンク髪。可愛い……

必死にセグウェイから逃げていたから気づかなかったが……………力ワイイ。まるで、テレビの中から飛び出してきたかのような可憐な

少女。

だが、この可愛さはどちらかというと子どもに感じられる、そうだな……愛らしさがある。にしても間近に見ると……かなりチビっ子なのだ。

この身体なら、たぶん中等部？いや、もしかしたら最近始まったインターン制度で入ってきた小学生かもしれないな。

そんな小さな女の子が、さっきの救出劇をやったのか。すごい。それはすごいのだが……

「……くっ」

この子はいま俺の腹にまたがるような姿勢になって、腹部をきつく圧迫してきているのである。

なので……うーん言い訳なのか？なんとか姿勢を変えられないかともがいていると……

ピラピラ〜と、布が揺れる……

その布が俺の鼻をくすぐる。そう思って視線を下ろしていくと

- - - - -

「……っ！」

ブラウスが首辺りまで、おもいつきりめくれ上がってしまっていたのだ。

たぶん吹っ飛んだ時の勢いで、ズレてしまったらしい。

そして、ブラウスには名札がついていた……名前は……

『神崎・H・アリア』。

すごくファンタシーな下着が、丸出しになっていた。

『65A↓B』……寄せて上げる？

いわゆるプッシュアップ・プランジ・ブラだ。

まあ、何でこんなことを知っているのかというと生前の兄が詳しく知っていたからなんだ。だから断じて俺が『ブラ好きだ！』なんて理由で知っているわけではないのだ。

にしても、神崎・H・アリア、AカップをBカップに偽装しようとしているらしいのだがホント気の毒だ。その偽装は失敗だよ神崎・H・アリア。寄せて上げる元手に乏しすぎて、寄りも上がりもしていないからだ。とはいえ……これは、俺 遠山キンジにとっては不幸中の幸いだったかもしれない。

もう少し胸が顔に近かったら、困った事になっていた。

禁忌を破ってしまうからである。そして有無を言わず、『あのモード』になってしまっていただろう。

「……………え？……………へ……………」

「……………？」

「ヘンタイ……………！！」

突然聞こえてきたのは、アニメ声というかなんというか、この声

だけでもファンクラブができそうな、その顔とその姿でその声は反則じゃないか？ってぐらい思える声だった。

「さっ、さささささっ、サイッター！！」

どうやら意識を取り戻したらしい神崎・H・アリアさんは、俺を睨みながらブラウスを下ろすと……

ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ
ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ
ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ
ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ

腕が曲がったままで力の籠もってないハンマーパンチを、俺の頭に落とし始めた……地味に痛いな。

「おっ、おい、や、やめろ！」

「このチカン！恩知らず！人でなし！強姦魔！」

ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ
ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ　ぱかぽこ……以下省略（笑）

どうやらアリアは、自分のブラウスを俺がめくり上げたとは勘違いしているらしい。まったく傍迷惑なヤツだ。
そんなことを殴られつつ考えていたとき。

ガガガガガガカンッ！！

- - - - 何だ！？

今、跳び箱にも何発か、背中側に激しい衝撃があった。
まるで……銃撃されているような……。

「うっ！まだいたのねっ！」

アリアはその紅い瞳で跳び箱の外を睨むと、ぱつ、とスカートの
中に手をいれ太股に装着していたであろうホルスターから拳銃を取
り出した。

「『いた』って、何がだよ！」

「あのヘンな二輪！セグウェイよ！ UZIを装備してある『武偵
殺し』のオモチャよ！」

『武偵殺し』？ ヘンな二輪？ セグウェイ？ UZI？ - - -
- さっきのヤツらか！

じゃあ今のは、まるで、じゃなくて本当に銃撃だったのか！ 体育の授業でも拳銃を使う武偵高では、跳び箱も防弾製だ。まあ、その防弾製がラッキーだったな。

だが……こんな狭い箱に追い詰められた状況から、どうすればいいんだ？

分らない、何もできない。そう……今の俺では。

「あんたも……ほら！ 戦いなさいよ！ 仮にも武偵高の生徒でしょ！」

「むッ、ムリだつて！ どうすりゃいいんだよ！」

「これじゃあ火力負けするのよ！ 向こう（セグウェイ）7台いるわ！」

7台……短機関銃が、7丁もこっちに向けられているっていうのかよ！？

「……！」

その時だった。本当に……本当に予想外の事が起きた。
銃を撃つため無意識に前のめりになった神崎・H・アリアが……
… その小さな胸を、俺の顔に思いっきり押しつけてきたのだ。

ババツ！ババツ！ババツ！

跳び箱の隙間から応射する神崎・H・アリアは射撃に集中しているらしく、自分の胸が俺の顔に密着してることに気付いていない。

ああ。

ああ――

これは……アウトだ。

なぜなら――

無いように見える小さな胸。いや実際問題無いのかもしれない、だが、そこには女の子の胸。

こんなに小さいのに、ちゃんと柔らかくふくらみが、あった。

いま俺の顔面には、夢のように柔らかい。知らなかった。女の子の胸って小さくても柔らかいものだったのか。もっと大きく丸くならないと柔らかくならないものかと思っていたのだが、違ったみたいだ。

――自分が、自らの心に課した禁忌を、破ってしまったことを。アリアの胸に抱かれるようになりながら、俺は……

『あの感覚』を感じていた。

ドクン、ドクン……

火傷しそうに熱くなった血液が、身体を中心に集まっていく。

なる……

なってしまう……

- - - ああ

なってしまった。

ヒステリアモード、に……！

ズガガガッ！ ガキンッ！

弾切れの音を派手に上げたアリアが身をかがめて拳銃に弾倉を差し替える。

「- - - やったか」

「射程圏外に追い払っただけよ。ヤツら、並木の向こうに隠れたけど……きつとすぐ出てくるわ」

「強い子だ。それだけでも上出来だよ」

「……………は？」

いきなり口調がクールになった俺に、アリアが眉を寄せる。 あ

あ、やつちまうのか……。また……。

その逡巡は、ほんの一瞬で。俺はアリアの細い脚と、すっぱり腕に収まってしまう小柄な背中に手を回し、すっくと立ち上がってしまっていた。

「きゃっ!？」

「ご褒美に、ちょっとの間だけ、お姫様にしてあげるよ」

いきなりお姫様抱っこされたアリアが、ネコみたいな犬歯の口を驚きに開いて、真っ赤になどていた。

俺はアリアを抱いたまま跳び箱の縁に足をかけ、バツ、と倉庫の端まで一足で跳ぶ。

そして、積み上げられたマットの上に……。アリアを、ちょこん、とお人形さんみたいに座らせてあげた。

「な、なに……。!？」

さっきまでの俺とは一変してしまった俊敏な動きに、アリアは目を丸くしている。

「お姫様はその席でごゆつくり、銃なんかを振り回すのは、俺だけでいいだろう?」

ああ、ナレータの俺よ。

俺はもう、自分を止められないらしいな。

「あ……アンタ……どうしたのよ!? おかしくなっちゃったの!」

慌てまくったアニメ声に、かぶせるようにして――

スガガガガガンッ!

再び、UZIが体育倉庫に銃弾を浴びせてきている。

体育倉庫の壁すらも防弾製だ。セグウェイの立場から見て考えると死角になっている。撃つだけ弾の無駄なのに。まったくいけないなあ。

俺は苦笑しながら……奴等（セグウェイ）の射撃線が交錯する、ドアの方へと歩いていった。

「あ、危ない! 撃たれるわ!」

「アリアが撃たれるよりずっといいさ」

「だ、だ、だから！さっきからなに急にキャラ変えてんのよ！何を
するつもりよ！」

俺は半分だけ振り返って、赤面しているお姫様にウィンクすると
- - - - -

「アリアを、守る」

マットシルバーのベレッタ・M92Fを抜いて、ドアの外へ身を
晒した。

グラウンドに並んだ7台のセグウェイが、一斉にUZIを撃つて
くる。

その弾は - - - -

全て、当たらない。

当たるわけがない。

見えるからだ。

今の俺の目には、銃弾がまるでスローモーションのように、全て
視えてしまうのだ。

いい狙いだ。

俺の頭部を狙い定めていた一斉射撃を、上体を後ろに大きく反ら
した。

そしてその姿勢のまま、左から右へ、腕を横に屈しながらフルオートで応射する。

見なくても、放った全ての銃弾の行き先が分かる。
使った弾丸は、7発。

その全てが、UZIの銃口に飛び込んでいくのも、分かる！

スガガガガガンッ！！

セグウェイたちは全て、その銃座のUZIを吹っ飛ばされた。
俺の、たった7発の銃弾に。

折り重なるようにして倒れたセグウェイたちが全て沈黙している
のを確かめると、俺は体育倉庫に戻った。

中ではアリアが、なぜだか跳び箱に入り直していた。
何だかアリアは、怒っているようだ。

それも跳び箱から上半身を出した状態で睨んでいた。

「お、恩になんか着ないわよ。あんなオモチャぐらい、あたし一人
でも何とかできた。これは本当よ。本当の本当」

強がりながらアリアは、ゴソゴソ。何やら跳び箱の中でうごめく。
どうやら服の乱れを直しているらしい。

だが……それは難しいだろうな。さっきの爆風のせい、ホックが壊れてしまっていた。アリアも壊れてしまっていることはわかっているようだが、必死になおしている。

「そ、それに今のでさっきの件をやむやにしようたって、そうはいかないから……あれは強制猥褻！ レッキとした犯罪よ」

とアリア姫は跳び箱から紅い瞳でこちらを睨んでいる。

「……アリア。それは悲しい誤解だよ。あれは不可抗力ってやつだよ」

俺は……ズボンを留めるベルトを外して、跳び箱に投げ入れてやった。

「あ、あれが不可抗力ですって!？」

アリアは跳び箱の中から、俺のベルトで留めたスカートを押さえつつヒラリと出てきた。

見るからに身軽そうな体が、俺の正面に降り立つ。

え。

立ったのか？それで？

そんなことを思っているとき……

スガガガガガンッ！

……！！

「7台だけじゃなかったみたいね」

アリアは言いながらホルスターから拳銃を出した。
俺もベレッタを出していた。アリアの背中に背中を預ける状態になり、体育倉庫のドアの外へ身を晒した。

そこには……先ほどまで銃撃していたであろう5台のセグウェイが銃口から真っ二つになっていた。

その光景を見たアリアは驚いていたが……俺には、わかる。こんなことができる人物は一人しかいない。そう……『黒の疾風・紅い閃光』ヤツしか。誰も名前を知らない武偵生徒だ。

そして……

このあと、アリアにヒドく怒られた、俺、遠山キンジ。後に『緋弾のアリア』として世界中の犯罪者や世界中の人々に知られる鬼武

偵、神崎・H・アリアの……最悪な出会いだった。

第三弾 神崎・H・アリア（後書き）

どうも！昨日ぶりの阿良々木 雅です。

まさか、こんなに早く投稿できるなんて……少し驚いています。

今回、最後強引に終わらせた感じになりました。申し訳ないです。
では、また次回お会いできることを願いつつ、アクセル全開で突っ走って行きたいです。

Profile：紅坂黒霧 part 1（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます

昼に出会った 皆さんには
こんにちは

夜に出会った 皆さんには
こんばんは

本日二回目に出会った 皆さんには またお会いしましたね。

『緋弾のアリア』タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆様。
様。

どうも×2

阿良々木 雅です

では、今回は

紅坂黒霧の紹介をします。

Profile：紅坂黒霧 part 1

名前：紅坂黒霧

読み方：こうさか　くろむ

性別：男

血液型：O型

年齢：16歳（高二）

学校：東京武偵高校

特別科目：強襲科

元特別科目：狙撃科

自由履修？：通信科・探偵科

身長：178センチ

体重：58キロ

現パートナー：特に決まっていない

元パートナー：中空知

通常服装：武偵高制服・伊達メガネ・指輪（右手：2つ。左手：2つ）耳にピアス（一つ）

戦束装（任務中）：全身真っ黒（防弾仕様）黒のかっこいいベルトに2つのホルスター。腰には刀を三本。

容姿・性格：漆黒に包まれたかのような黒髪（短髪でもなくロン毛でもない）青く透き通っている瞳。整った顔つきをしている。基本的無口だが友達や仲間には、しっかり会話をする。根は優しい。一般的科目での偏差値は白雪よりも上である。勉強が大好き……らしいが、勉強するより教えるのが大好きだという。

武器・刀編：桜紅梅（刀身すべて紅色）。黒牙（刀身すべて漆黒）。牙鳳（刀の刃だけが漆黒仕様。紅坂家代々受け継がれる刀）

武器・銃編：SIG SAUER P226R 通称……SIG銃^{シゲ}
弾は対超能力者弾仕様。^{ステルス・キラー}ベレッタPX4-storm（銃弾は漆黒9mmパラベラム弾）銃本体は紅色仕様。

能力を使用した時の武器・戦闘スタイル

武器・刀編：牙鳳

武器・銃編：SIG

^{ガン・エッジ}

スタイル・一剣一銃難易度が高いスタイルだが、黒霧は一剣一銃を使いこなす。跳弾射撃が得意。

彼のあだ名：【黒の疾風・紅い閃光】

旧あだ名：【青瞳の死神】

もう一つのあだ名：【喧嘩狂】

能力：秘密【本編にて登場紹介予定】

Profile：紅坂黒霧 part 1（後書き）

本日二回目にお会いした皆様。本日はじめて、お会いした皆様。
どうも阿良々木 雅です。

ちょっと『迷える執事と秘密の恋』を執筆しているので、後書き
はこの辺りで終わります。では、次回皆様とお会いできることを
願いつつ、アクセル全開で突っ走って行きたいです。

第四弾 最悪な再会（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます

昼に出会った 皆さんには
こんにちは

夜に出会った 皆さんには
こんばんは

新しく 出会った皆さんには
はじめまして【今回から追加】

『緋弾のアリア』タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆
様。

どうも

阿良々木 雅です。

今回は

とうとう黒霧【通常モード】が登場します！

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、第四話を楽しんでください。

第四弾 最悪な再会

(…………はあ。また、やっちまったな…………)

結局出られなかった始業式の後、俺は憂鬱な気分で教務科に事件の報告を済ませ、新しいクラスに向かっていた。

事件…………『武偵殺し』

そして…………禁忌を破ってしまった。

ヒステリア・サヴァン・シンドローム。

俺は『ヒステリアモード』と勝手に呼んでいる。

ヒステリアモードになると、目の前の女の子を助けてしまうことと。女の子に対してキザな言動を取ってしまうことだ。ああ、思い出しただけでも死にたくなるぜ。

思い返せば、中学の時なんかいろいろ『ヒステリアモード』で困ったことになったんだよね…………。

「…………はあ」

俺は溜息を吐きながら後ろ頭を掻き、新しくクラス分けされた2年A組に入ろうとしたのだが…………目の前にいた人物に声を掛ける。

「よう…………黒霧」

「キンジか……おはよう」

目の前にいる少年。

紅坂黒霧。俺とは高校からずっと同じクラスの友達だ。身長178センチの華奢な体格をしている。いつも愛用している黒縁伊達メガネをかけている。

「溜息なんか吐いて、なんか嫌なことでもあったのか？」

「……まあな」

考えただけでもズキズキと痛み始める。まったく、これだから『ヒステリアモード』は嫌なんだ。

「そうか、なら早く入ろうよキンジ」

どうやら黒霧も同じクラスのようにだ。

ふわっと武偵高制服が風に靡くと……火薬の臭いがしていた。

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

俺がクラス分けされた2年A組の最初のHR（ホームルーム）で――――

運の悪さに定評のある俺は、あろうことがあのピンクのツインテールが、いきなり俺を指してそんなことを言ったもんだから。

クラスの生徒たちは一瞬絶句して、それから一斉にこつちを見て

……

わぁーっ！ と歓声を上げた。

俺は――――

ずりっ、と椅子から転げ落ちる。

絶句。ただ、ただ、絶句するしかない。

もうヒステリアモードも切れて通常モードに戻っていたからどうすればいいのかもわからず、半分は銃撃される可能性があるので身を縮めて震えていた。そしたら……いきなり『隣に座りたい』だ。

「な、なんでなんだよ……」

ようやく出てきた声で、呟く。

『正義の味方』として利用する腹じゃないだろう。アイツ、神崎・H・アリアは、俺のヒステリア・サヴァン・シンドロームのことに気付いてないハズだし。

気に入られた……ってワケでもなさそうだ。アイツはさっきの俺に最後まで武器を突きつけて、怒っていたんだからな。

「よ……良かったなキンジ！　なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！　先生！　オレ、転入生さんと席代わりますよ！」

まるで選挙に当選した代議士の秘書さんみたいに俺の手を握ってブンブン振りながら振りながら、右隣に座っていた大男が満面の笑みで立つ。

身長190センチ近いこのツンツン頭は、武藤剛気。

俺が強襲科にいた頃よく俺たちを任務現地へ運んでくれた車輛科の優等生で、乗り物と名のつく物ならスクーターからロケットまで何でも運転できる特技がある。俺からしたら　ただの乗り物オタクの重症患者だ。

「あらあら。最近の女子高生は積極的ねえー。じゃあ武藤くん、席を代わってあげて」

先生は何だか嬉しそうにアリアと俺を交互に見てから、事情を知らない武藤の提案を即決定してしまう。教室はとうとう『ぱちぱち』と拍手喝采を始めてしまう。

――違っ！俺はアイツの事なんか何も知らない。それどころかアイツさっきまで俺に銃を向けていた凶暴女なんだからな。だから取り消してくれっ！

そう担任教師に抗議しようとした時、アリアが、

「キンジ、これ。さっきのベルト」

と、俺をいきなり呼び捨てにしつつ、体育倉庫で貸したベルトを放り投げてきた。

見れば、アリアの制服は上下共に新品になっている。

俺がベルトをキャッチすると――

「理子分かった！ 分かっちゃった！ これ、フラグばっきばきに立ってるよ！」

俺の左隣に座っていた峰理子が、ガタン！と席を立った。

「キーくん、ベルトしてない！ そしてそのベルトを転入生さんが持ってた！ これ、謎でしょ謎でしょ！？ でもでも、理子には推理できた！ できちゃった！」

アリアと同じくらい背の低い理子は、探偵科ナンバーワンのバカ女だ。

その証拠に、武偵高の制服をヒラヒラなフリルだらけの服に改造している。彼女いわく『制服は改造するものだよ』スィート・ロリータとかいうファッションだ。

ちなみにキーくんというあだ名は理子がつけたのである。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！つまり2人は――
――熱い熱い、恋愛の真っ最中なんだよ！」

ツーサイドアップに結ったゆるい天然パーマの髪をぴょんぴょんさせながら、理子はおバカ推理をぶち上げる。

恋って……。理子、お前。だがここはバカの吹きだまり、武偵高。

そんな話題でもクラスは大盛り上がりになり盛り返ってしまった。

「き、キンジがこんな可愛い子と！？」「影の薄いヤツだと思ってたのに！」「女子どころか他人に興味なさそうなくせに、裏でそんなことを！？」「キンジってロリコンなのか！？」「フケツ！」「キンジ！お前が羨ましいぜ」

武偵高の生徒はこの一般科目でのクラス分けとは別に、それぞれ

の特別専門科目で部活のように組や学年を超えて学ぶため、生徒同士の顔見知り率が高いのだが……

新学期、それも新しいクラスなのに、息が合いすぎるだろお前ら。こついうことになるよ。

「お、お前らなあ……………」

俺が頭を抱え、机に額を突っ伏したとき……………

すぎゅぎゅん!!

鳴り響いた2連発の銃声が、クラスを一気に凍り付かせた。 -

……真つ赤になったアリアが、二丁拳銃をホルスターから抜いた際に撃ったのである。

「れ、れ、恋愛だなんて……………くっ、くだらない!」

翼のように広げられた両腕の先には、左右の壁に1発ずつ穴が空いていた。

その穴が、静けさをさらに際立たせる。

……武偵高では、射撃場以外での発砲は『必要以上にしないこと』

となっている。つまり、してもいい。まあこの生徒は銃撃戦が日常茶飯事の武偵になろうというのだから、日頃から発砲に対する感覚を軍人並に麻痺させておく必要があるらしい。

まあ、新学期の自己紹介でいきなり発砲したのは、コイツが初めてだろう。

「ぜ、全員覚えておきなさい！そういうバカなことを言うヤツには……風穴あけるわよ！」

これが、神崎・H・アリアが武偵高のみんなに発した……最初のセリフだった。

第四弾 最悪な再会（後書き）

どうも！伊達メガネキャラが好きな 阿良々木 雅です。

この小説のタイトル通り『黒の疾風・紅い閃光』を出せって思われている皆様が多いかもしれませんね。はい、申し訳ないです。

では、今回はこれくらいにしておきますね。

最後に、この作品を手にとって下さったすべての読者の皆様に、この場ではとても伝えきれない深い感謝を。

それでは、また皆様とお会いできることを願いつつ、それこそ次回任務中の黒霧の姿をアクセル全開で行けるところまで突っ走って行こうと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

この作品のキャラクターたちが一人でも多くの読者の皆様と出会い、幸せな作品になってくれますように。

第五弾 新たな決意 make a fresh resolution(前)

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

新しく出会った皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 タグを利用していれ皆様。 作者の皆様。 読者の皆
様。

どうも

阿良々木 雅です。

今回は完全オリジナルです。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、第五弾をお楽しみください。

第五弾 新たな決意 make a fresh resolution

教務科から『武偵殺し』の件について話をする……今後『武偵殺し』が出現した場合、即刻駆除せよとの命令書みたいなものが渡された。

（能力が使えたらな、犯人が誰だか判るようになるんだが……）

そう『武偵殺し』の模倣犯も使用してくるのは自動短機関銃などだ。つまり、俺の能力では“透見れない（みれない）” 相手が機械だからだ。

そんなことを考えながら、昼休み 理科棟の屋上で“ある姿” に変わっている。

周りからは『黒の疾風・紅い閃光』というあだ名がつけられている。

現在の格好は、上下共に真っ黒の服を着ている。武偵高ならではの防弾製にオーダーメイドしてもらっている。

武器はSIGとベレッタPX4-stormと牙鳳しか持っていない（現在だけ）

ゆつくり屋上で、大好物のメロンパンを食べていたら（放課後）……突然……空から野球ボールのような物が降ってきた。

しかも、俺のところに目掛けてだ。

野球ボールは一球だけ……。なんだ野球部がホームランで飛んだボールか、と思っていた。

なら試しに屋上から飛び降りることにした。
すると……。またもや野球ボールが飛んでくる今度は下からだ。

（やはり、下かー!!）

しかし、下から飛んできた野球ボールが背中に当たる。

「ぐ、ぐはッ……」

どうやら……。公式の野球ボールを使っているみたいだ……。時速は170キロを容易く超えているだろう。

野球ボールを当たった反動で空中を半回転し、下にいる人物を見た。

……武偵高校の制服を着ているではないか。
おそらく一年、そしてボールの威力から考えて特別科目は【超能力捜査研究所】またの名を【S S R】に所属しているはずだ。

厄介だな。

仕方ない。空中でベレッタPX4-stormをホルスターから抜き弾倉を装填する。

「……………」

バキユン！！スギユン！

下から向かって飛んでくる野球ボールを撃ち落としながら、懷にある縄で校舎の窓枠に引つ掛かるように投げた。

シュルシュルっ！

なんとか引つ掛かった縄で体勢を立て直し、地に降りた。目の前にいる少年は野球ボールを握っていた。

「あーあ、まだ倒れないのか。脊髄にははずれちゃったみたいだね。でも俺コントロールには自信があっただけだなあ」

「……誰だ？」

野球ボールを握っている少年はお辞儀をしてから、

「俺の名前は 斬島 優人。所属は【超能力捜査研究科】だ！『黒の疾風・紅い閃光』アンタを倒して、俺が最強の武偵になる！」

「……たく、どいつもこいつも」

「勝負だ！」

近くにあった？金属バットを握りしめ振り投げてきた。

（これくらい、避けれる）

そう思っていたのが間違いだった。

ニッ と斬島は笑っていた。すると……バットの速さが急激に速度を増した！

「くっ……」

金属バットが肋に　がンッ！　鉛みたいな音がする。
防弾製のため骨は折れにくい、負担はかかる。

「所詮は防弾に喰らっただけだ」

「なら！これなら　どうだ！！破龍大砲！！！」

斬島は大きく振りかぶり野球ボールを投げた……。
避けられないくらい早いスピードだ。250キロ以上は出ている
はず……

「……ガハッ」

その場で倒れ込んだ……。

微かに聞こえてくる声……

「アンタの決意は　こんなものか！」

決意……

戦う決意……

戦う戦う戦う戦う戦う戦う戦う戦う戦う戦う……戦！

闇から落ちていた俺の意識は再び光が差し込む世界へ誘った！

「オイオイ、マジかよ！これで試合終了？　つまんねー」

黒の疾風に背を向けて去ろうとする斬島を引き止めるかのように

……

スガンッ！

ホルスターから取り出したSIGで床を狙い撃ち、ゆっくりと立ち上がる。

「守りたい人を守る為の決意は固まっている………お前を倒して俺の決意を見せてやる！」

そう言つと、片目が真つ赤な瞳に変化した。
能力発動だ。

斬島はバットを振つたが、途中で握り離し、アッパーで空中に上げた。

「決意は 俺の方が強いかな………」

大きく振りかぶった斬島は……野球ボールを放つ！

「破龍大砲全開！！！」

今まで以上の速度で向かってくる。

「碎け散れ！！！」

「ふう……データは全て集まった！おまえの球なら全球ホームランだぁ！！！」

瞬間的にベレッタPX4-stormとSIGをホルスターに収め、牙鳳の鞘で野球ボールを打ち返す。

「なっ……」

「打ち返したと……」

「くっ、俺も打ち返せばいいだけの話だな」

ギュッと金属バットを強く握りしめバットを振った！

「いくら威力がある球でも、直球は見切りやすい」

斬島はバットを振ったが……バットは空を斬るだけだった。

「しまっ……」

「変化球も覚えた方がいいぜ一年！」

ドコオンッ！！

轟音と共にコンクリートが破壊されるほどの威力だった。よく言われる例は正面衝突事故だ。あれはお互いのスピードを+した分だけ人体に負荷がかかるのだ。なら、先ほどの野球ボールも同じ原理だ、打ち返せば威力は倍増する。さすがの防弾制服でも 骨は折れているだろう。

砂塵が……風によって消えた……。

一弾ずつ読んでくださった皆様にはお久しぶりです？

五弾もまとめて読んでくださった皆様には初めまして。

どうも。阿良々木 雅です。

本編は第五弾です。これでひとまず『能力』説明を次回に、やっ
とできます。

では、せっかくなんで黒霧の能力名だけ紹介します。

能力名：心内透見^{マインド・ホーク}

まあ、どんな能力なのかは、ご想像にお任せします。

ちなみに黒霧くん『黒の疾風・紅い閃光』は人見知りではありません。
せん。しかし、基本的に無口なのです。

今回登場しました斬島 優人くん。野球ボールと金属バットが武
器なんですよ（笑）

またプロフィールで紹介します。

ではでは、また次回皆様にお会いできることを願い祈りつつ、ア
クセル全開で突っ走って行きたいです。

Profile：斬島優人 part 1（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます

昼に出会った 皆さんには
こんにちは

夜に出会った 皆さんには
こんばんは

新しく出会った 皆さんには
はじめまして

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆
様。

どうも

阿良々木 雅です。

今回は 斬島優人くんの紹介です。

斬島「よし、俺の裸体（全て）を見せてやる」

黒霧「……死ぬか？優人く〜ん」

S I G を斬島に向け

斬島「ひいー　すみませんでした。兄貴」

黒霧「なら、いいんだが」

Profile：斬島優人 part 1

名前：斬島 優人

読み方：きりしま ゆうと

性別：男

血液型：A B 型

年齢：15歳（高一）

容姿・性格：ツンツン頭で黒髪。ワックスで固めすぎている。悩みは 頭を洗うときが大変らしい。時々下ネタ発言をする。いつも元気がいい。勉強の成績は最低並。

服装：武偵高校制服

武器：ベレッタM84（たまにしか使わない）

野球ボール&金属バット

（本人いわく野球経験無し）

特別科目：超能力捜査研究科

自由履修：強襲科（黒霧との戦闘で強襲科を自由履修として選ぶ）

能力名：物体速度操作

能力内容：物体のスピードをコントロールする。まだ速いしかコントロールできない。

現パートナー：いない

学校：東京武偵高校

Profile：斬島優人 part 1（後書き）

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】をいつも読んでくださっている皆様は また会いましたね。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を一弾からまとめて読んでくださった皆様には はじめまして。

どうも阿良々木 雅です。

今回はプロフィール編でした。では次回は第六弾です。また次回お会いしましょう。

この作品が書けるのも ひとえに読者の皆様のおかげです。

第六弾 助け合いは必要だろ（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

新しく出会った皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆
様。

どうも

阿良々木 雅です。

今回は かなり短いですが
よろしく願います

誤字。 脱字。 変換ミス。 文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、うーん第六弾を楽しんでください。 楽しむほど字数ないけど

：

第六弾 助け合いは必要だろ

砂塵が消えると、一人の人影が立っているではないか。そう立ち上がった人物。無論。先ほどまで戦っていた斬島だった。彼は金属バットを支えにして、やっと立ち上がっているようだ。この場合、立ち上がっている＝戦闘可能 と結びつけるのはよくないだろう。そう、俺には判る。

（心内透見モード）

……………やはりか。

立ち上がったのもやっとみたいだな。

そんな斬島は最後の力を振り絞るかのように大声を発した。

「俺の 決意は 絶対に消えない！」

そう言った斬島は、その場で倒れ込んだ……………。

「……………決意か。その決意、たいしたもんだったぜ一年」

そう呟いた。

【斬島視点】

心地よく靡いてくれるカーテン。それは緩やかな、それもまた心地よい風が生み出しているのだろう。ん？カーテン？心地よい風？確か、俺は……『黒の疾風・紅い閃光』と戦って負けたはず……なんで……

瞳を動かすより先に声が聞こえてきた。

「大丈夫か？一年」

「ここは……保健室？それに、アンタは！」

「……そんな大声出すなよ。骨に響くぞ」

「……っ！ あ、すみませんでした。俺、アンタにいきなり攻撃して」

そう言った俺の頭を　ぐりぐり　と撫でてくれていた。それは優しくはない撫でかただったが、俺にとっては　いっぱいの優しさが詰まっていた……

「ありがとうございます……」

そうして、俺の意識は再び闇の中へと落ちていった。

第六弾 助け合いは必要だろ（後書き）

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を一弾から読んでくださった皆様には、どうも。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を六弾まとめて読んでくださった皆様には はじめまして。

どうも阿良々木 雅です。

今回は第五弾の続きとなっていました。

もう第六弾ですね。これもひとえに読者の皆様のおかげですね。ありがとうございます。

では次回、第七弾 仮タイトル バスジャック を投稿できたらなと思っています。

ではでは、次回、皆様とお会いできることを願いつつ、アクセル全開で突っ走っていきます。

第七弾 動き出した歯車の運命（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

新しく出会った 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆様。 読者の皆様。 作者の皆様。
様。

かなり心が弱い。

阿良々木 雅と申す者です。

少し間がありましたが一許してください。

あとは、プーモ様とコラボしていただきました。「お前、なにコラボしてんだよ。調子乗んな」はい。すみませんでした。そんな皆様には深くお詫びを申し上げます（土下座）

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、第七弾を楽しんでいただけたらいいと思います（汗）

第七弾 動き出した齒車の運命

【キンジ視点】

あれから、大変だった。急にアリアが俺の部屋に来るし、来たと思ったら突然『奴隷』なんて言われ、同じ探偵科の理子に頼みアリアについて調べてもらったら……アリアには二つ名があった『双銃のアリア』……そして、家柄は貴族系だ。そのことをアリアに訊いてみたら……事実だと判明。しかし、俺のHSS【通称：ヒステリア・サヴァン・シンドローム】のことを言われたが内容的にはアリアは俺の体質に気が付いてなかった。そんな話の最後に『一緒に事件を一件だけ解決する』って言われてしまったんだ。ホント最悪だよ。まあ、そんなことがあったわけなんだ。

現在はアリアが居ない。

静かな朝というわけだ。1人ぼっちの平和な寝室で、携帯のアラームによって目を覚ます。 ぎゅ と携帯電話をつかもうとしたらレオポンを掴んでいた。

「……………」

レオポンをちょっと眺めてから、俺は、ゆっくりと登校の準備をする。

コンビニ弁当の残りを食べ、昨日理子から返してもらった腕時計を見てみると……

「ん？ まだ7時38分か」

まだ少し時間がある。
けっこうだらだらとしていたと思っていたんだがな。
じゃあお茶でも飲むか。

そして腕時計で7時50分に部屋を出たのに……

おかしい。

俺はちゃんと、ちょっと早め部屋を出たのに。

暖かい日差しとほどよい眩しさが照りつけ始めたバス停には既に7時58分のバスが来ていて、生徒たちが押し合いへしあいして乗り込んでいるところだった。

ヘタをすると、満員で乗れないときもあるのだ。

そんなバスを眺めていたらタラップで車輛科の武藤が手を振っていた。それも満面の笑みでだ。

そうしてバスは無情にも発進していつてしまった。ああ、徒歩かよ。くそつ。遅刻確定じゃねーか。

ただっ広い道を、歩く。歩く。歩く。ひたすら歩く。

視界の向こうにずっと続く、学園島の真っ直ぐな道路を見つめながら溜息を吐き出す。

人工浮島【メガフロート】というものは、そもそも空港の滑走路を安価に造ることを1つの目的として開発されたものだとかなのか。

道理でこの学校【武偵高校】、無駄に細長い迷惑な形状をしているわけだな。

はあ、それだけでも疲れるのに……。

一時間目はサボるかな。

いやいやいや、一時間目は一般校区での国語だ。一般科目は、い
ずれ普通の高校に転校した時にしっかり授業についていくためにも
必要になるだろうしな。だからサボりたくないな。

強襲科の黒い体育館を横切りながら、そんなことを考えていた時
……ふと携帯電話が鳴った。

「……もしもし」

レオポンのストラップを引っ張って電話に出ると……

『キンジ。今どこ』

アリアだ。

何だ。ちなみに現在時刻は8時15分。授業が始まるか始まって
いないかといった時間だ。そんな時間に電話とは、どういうことだ。

「んー。強襲科のそばだな。ってか、授業はどうしたんだよアリ
ア」

『授業なんて場合じゃないのよ！ 事件よ！』

なんだと！

その頃の彼、紅坂黒霧は……。

漆黒の格好――

黒のワイシャツに黒のズボン。目から下まで覆い隠せそうな黒い布。黒のホルスターにはベレッタPX4-stormとSIGが収められていて、腰には刀が三本差されていた。

そう彼こそが、『黒の疾風・紅い閃光』である。

そんな二つ名がある俺は、現在インカムで通信科と連絡をとっている。俺との連絡をとる通信科の武偵は1人しかない。そう、俺が一年の時から仲が良い通信科、武偵ランクB、中空知 美咲だ。俺のパートナーだった中空知。現在までは一人つきりで任務をしていた。だけど、『武偵殺し』の模倣犯が出没したと斬島の件で、再確認させられたんだ。そう俺の心内中（なか）に存在する『守りたい決意』が……だから、もう一度中空知とパートナーを組みたいんだ。そして中空知を守ってみせる。そんな決意で今、通信科に連絡をしていた……。

『こちら、通信科の中空知』

こうして、俺はインカムで伝えるべきことを伝えた……。

【7時58分 バス車内】

【武藤視点】

俺はバスの窓からキンジの姿を見て手を振った。

発車して何分経過しただろうか、突然誰かのケータイが鳴りだす。
携帯電話の通話ボタンを押すと……………

『この バスには 爆弾が 仕掛けて アリヤガります』

奇妙で独特なボイス音。

ボイスチェンジャーか。 その言葉の一部には……………爆弾。

- - - 爆弾だと。

イヤ待てよ。

確か、始業式の日キンジが言っていた『武偵殺しにあつたんだ』

と、そしてバス。爆弾、バスジャック……………キンジはチャリジャック、
爆弾、武偵殺し。

そうか、このバスには武偵高の生徒しか乗らない。ならバスジャックをして、尚且つ爆弾を使用する。これも『武偵殺しの模倣犯』の仕業か。

そんなことを考えていると、女子生徒のケータイから“あの奇妙で独特なボイスチェンジャー”の音がスピーカーから発せられた。

『速度を 落とすと 爆発し ヤガレです』

な……速度をだと。

止まることができなくなった。くそっ！ふざけんな！
眉を寄せて周囲を見回す俺に不知火は、

「ここは、任せてくれないか」

と言ってくれた。

不知火はバス車内にいる生徒たちに呼びかけ爆弾を探していた。
俺はその間に混乱しているであろう運転手のところに駆け寄る。

「大丈夫ですか！」

「ああ、な、なんとか…」

予想通り運転手の手はパニックで震えていた。
そりゃそうだ、速度を落とすと爆発するんだからな。

「ほ、本当にバスジャックなんですか」

震えた声で訊いてきた運転手。チラッとこちらを見て訊いた質問の答を訊きたいみたいだ。

「たぶん間違いないです。俺のダチ（キンジ）の時もこんなだったって」

訊かれた質問の答を言った。それから暫しの沈黙があったが……
……沈黙を切り裂いたのはケータイから発せられる『武偵殺し』の機械音だった。

『乗客は 大人しく しやガレ です』

- - コイツ俺たちの様子を見ているのか！？
そんなことを思っていたら不知火がバスの窓を見ていた。

見てから三秒くらいだろうか……。
突如として顔色を変えた不知火が叫んだ。

「みんな伏せろおツ!!」

ズガガガガガガンツ!!

突然の轟音。

その轟音はバスに向かってきた。

- - - 何だ!?

伏せてから約0,586秒の後、轟音が鳴り出すまで約0,284秒。

轟音はバスの車体目掛けて向かってきた。その音と共に、バスの窓ガラスが破壊されていく。その破片は車内まで入って行き俺たちを襲う。今更だが、武偵高の制服が防弾製でよかった。窓ガラスの破片すらからも身を守ってくれるからだ。

轟音は鳴り止んだ……

【キンジ視点】

現在は途中で合流したアリアと一緒に車輛科の倉庫の扉前にいる。

この車輛科の倉庫には車輛科らしい名前通りの車が置いてある。
置物のように大量にだ。

そんな扉を開けるために暗証番号をうっている時、隣に居たアリアが喋り出した。

「バスジャックよ」

・・・その言葉に俺の思考は一度止まる。
しかし、止まった頭が回復してアリアに訊き直す。

「バスジャック？」

「そう。ジャックされたのは通学バス　いすゞ・エルガミオ
G3号車。東京武偵高行きで男子寮前に7時58分に停まるバスよ」

・・・！？

何だつて！？7時58分！？

“あの”バスがジャックされたのか！

確か、アレには武藤たちがスシ詰め状態で乗っているんだぞ。
思考回路を全開に解放して考えている俺は暗証番号を解き車輛科

の倉庫の扉を開けた。

中には説明した通り車が置物のようにあった。

「キンジ早くしなさいッ！」

既に車内に乗っていたアリアに言われた俺は足を動かした。

ボタンっ！

と、音が立ち車のドアを閉める。
ちなみにアリアは運転席にいる。俺は助手席だ。

ブオオオンッ！！

車のエンジンをつけたアリアはアクセルを思いっきり踏み込み車
輻科の倉庫から飛び出した。

にしても、運転が荒い……なコイツ。

漸く荒々しいアクセルワークが終わり安定した運転になる。そんな
運転になってからアリアの口唇（くちびる）が動く。

「今朝8時、犯人がいつも使う周波数をキャッチしたの。狙われたのはいすゞ・エルガミオG3号車に間違いないわ。おそらくバスには爆弾が仕掛けられてるわ」

- - - 爆弾 - - -

その単語を聞いて、俺の脳裏を数日前の出来事がよぎる。

- - - チャリジャック。

そんな俺の表情を感じ取ったのか、アリアは流し目をするようにして俺を見た。

「キンジ。犯人は『武偵殺し』よ。あんたの自転車に爆弾を搭載して“殺そう”としたヤツと同一犯の仕業だわ」

- - - 『武偵殺し』……だと。

でもヤツは数日前アリアに破壊されたはずじゃないのかよ。しかし、俺はこの間白雪が話題にしていた連続殺人犯のことを思い出した。

「『武偵殺し』？ ちょっと待てよ。ソイツは逮捕された筈だぞ」

「おそらく真犯人よ」

「何だって？　いったいどうなって……………」

アリアは、俺の言葉の間に割り込み、

「武偵憲章1条！　『仲間を信じ、仲間を助けよ』　被害者は武偵高の仲間よ！　それ以上の説明は必要無いはずよ！」

確かに、説明を聞いているヒマがあるなら事件を解決したほうがいい。それに、この『独唱曲』になっていたコイツが武偵高のヤツらを『仲間』って言ったからな。ちよつと嬉しいぜ。

「アリア、おまえ」

「事件は既に発生しているのよキンジ！　バスは今、この瞬間にも爆破するかもしれないのよ！」

俺はホルスターからマツトシルバーのベレッタ・M92Fを抜き、
ベレッタ・M92Fの弾倉を装填する。

「ああ、わかったよ。やってやる！仲間のためだ！」

「ミッションはバス車内にいる全員の救助」

「当たり前だッ！」

そうして俺たちは現在事件が行っている現場に向かった。

第七弾 動き出した歯車の運命（後書き）

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を一弾ずつ読んでくださった皆様には、いつもありがとうございます。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を七弾まとめて読んでくださった皆様には初めまして。

どうも！お久しぶりですかね？最近、病み期に入りました。阿良々木 雅です。

まあ、心が弱いので仕方ないのですが……。でも、頑張つて執筆はいたします。

では、今回はこのあたりで終わらせていただきます。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】のキャラクターたちが一人でも多くの読者の皆様と出会い、幸せな作品になってくれますように。

第八弾 漆黒と鮮血（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

新しく出会った 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆
様。

昨日ぶりです。

阿良々木 雅です。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。
では、第八弾を楽しんでください。

第八弾 漆黒と鮮血

【武藤視点】

轟音が鳴り止んだバス車内。俺は運転席近くで腕を押さえている。防弾制服に銃弾があたったのだ。

「つてえ……あのヤロー防弾制服つてもあたると痛えんだぞ」

そう呟きながら、バス車内へと視線を移動させる。

「みんな大丈夫か！」

俺の訊きに軽い返事が返ってくる。そんな中、不知火は肩に付いていた硝子の破片を振り払いながら、

「でも、これで僕たちは迂闊に動けなくなっただね」

「ああ、そうだな」

周りの生徒たちは「なめやがって」「どうして」「助けて！」など少し混乱しているヤツらもいるみたいだ。
すると、ケータイから音が鳴った。

『ホテル　月光前　を　右に　曲がり　ヤガレです　』

この奇妙な声は聞いていて嫌になるぜ。
すると……

拳銃を持った三人が今にも発砲しようとしていた。

「おいッ！　無茶はするな！」

「俺たちは武偵だぞッ！」

どうやら忠告は効果が無かったようだ。

すると不知火は慎重に相手、つまり『武偵殺し』を見ていた。

「犯人は僕たちの様子を監視しているはずだ。さらに銃は短機関銃『UZI』だ」

「わかってる！　だが、もうすぐトンネルだ。いくら監視カメラで

もトンネルに入った一瞬はタイムラグができるはずだッ！そこを狙えば、倒せる！」

三人は拳銃に弾倉を装填し、銃撃態勢になった。

しかし不知火が止めようとしていたが無駄だったようだ。
トンネルまで――

『3』

『2』

『1』

三人は立ち上がり拳銃を構えたが……

ズガガガガガガンッ！！

再び、『UZI』が轟音を鳴らしながらバスに向けて銃弾を浴びせてきた。

バス車内で吹っ飛ばされた三人は銃弾の痛みで疼くまっていた。

カランカランッ

『UZI』短機関銃から排出された空薬莖が道路に落ちて、一旦

静けさを際立たせていた。 不知火のおかげで『UZI』短機関銃
が取り付けられているのはオープンカーだと判明した。

……

轟音が止んだかと思い一瞬気を緩めていたら――

ズガガガガガガンッ！！

もう一度バスに向けて撃ってきたのだ。

どうやら、露出補正？のタイムラグは無意味に終わった。しかし、
また一つ判明した。監視カメラは熱感知だということを。 ぐらッ。

『武偵高校行き』と書かれたバスが妙な揺れ方を始めたので運
転手を見ると――

「くそっ」

運転手が、ハンドルにもたれかかるようにして倒れていた。 ハ
ンドルにもたれかかっていたためか クラクションが鳴りっぱなし
だった。

よく見れば肩に被弾している。

おそらく運転のために、体を下げられなかったんだな。
バスは左車線にはみ出していく。

幸いにも対向車が居なかった。

- - - なんとか大混乱は免れたな…… 俺はバスのハンドルを握りしめる。

.....

この時、熱感知搭載の監視カメラが俺を捉えていたことに気付かなかった。

カシャンッ

『UZI』短機関銃の銃口の向きが - - -

ズガンッズギューン！

2発の弾丸によって短機関銃『UZI』の銃座は吹っ飛ばされた。誰かも判らない、たった2発の銃弾に。あっけなく。

【キンジ視点】

ズガンッズギューン！

オープンカー。ルノー・スパイダーに取り付けられていた『UZ
I』が銃弾をブツ放す瞬間にアリアは――コルト社の名銃・ガバ
メントを元にしたカスタムガンをいつの間にかホルスターから抜い
て銃撃していた。それも片手だけでガバメントを握り、もう片手で
車のハンドルを握っていたのだ。

アリアと初めて会った日も凄かった。もう一度説明するが、拳銃
の平均交戦距離は、7mと言われているんだ。だけど、今のアリア
も初めて会ったアリアも不安定な状態と狙い撃つ距離が倍以上ある
のにもかかわらずいとも簡単に撃ち落としてしまうのである。

「すごいな。アリア」

「なっ！　すごくなんかないわよ」

つい誉めてしまった俺。しかし、誉められて嬉しかったのか少し
頬が赤くなっていた。

首を左右に振ったアリアは再度ガバメントを構えたがなにやら戸
惑っている。

「どっしたんだよ」

「キンジ。ちょっとハンドル頼める?」

「?.....ああ。そういうことか」

俺は言われた通りハンドルを握りしめる。

アリアは軽くアクセルを踏みながら窓に身体を乗り出す。
そして.....

ズガンッ!

1発の銃弾がオープンカー。ルノー・スパイダーのタイヤに穴が空いた。

プシュー

風船の中に入っている空気が抜けるような音を立てていた。空気が抜けたことによりルノー・スパイダーの車体はスピンしトンネルの壁に激突.....すると.....

ドガアアアアアンッ!!

轟音、爆風。

少し車体が揺れたが問題ない。

ブォン！ というアクセル音が響くと、バスの横に回り込む。ん？ ブォン！？ 軽四車だぞ。馬力も少ないのに……アリア、思いっ切りアクセル踏み過ぎだろ！

横に回り込んだ俺たちは車の窓を開け叫ぶ、

「おい！ 大丈夫か！」

バスの出入口が開いた。その先にいたのは、

「キンジ！」

聞き慣れた声と見慣れた人物。運転席には俺の友達武藤がいた。

「武藤！ 大丈夫か！」

「ああ！ だが気をつけろよ。このバスには減速すると爆破する爆弾が仕掛けられてる！」

「「なっ」」

俺とアリアは驚いていた。やはり、これは『武偵殺し』の仕業か。するとアリアが、

「キンジ。バスに乗り移るわよ」

「はあ？　ちよつと待て乗り移るって」

「乗り移って爆弾を解除するの」

風に靡く綺麗なピンク髪の少女アリアは真剣な顔をしていた。けれど、“今の”俺では無謀なような気がするのだ。

「負傷者を救出するには、それが手っ取り早いだよ。わかるわねキンジ」

その言葉に一瞬迷ったがアリアと武藤が　俺を見つめながら頷いた。

「よし、わかった」

車のハンドル、アクセルなどをロープで縛り付け固定した。縛り終わるとアリアは後部座席のドアを開けバスの出入口に向かって跳んだ。続いて俺の番だが一旦しっかりとロープで固定してあるか見ておいた。

（大丈夫だな）

確認し終えた俺もバスに向かって跳んだ。車内に入ると防弾制服ながらも怪我をしている生徒たちがいた。俺たちが乗っていた車は無惨にも爆破した。当たり前だが無人状態でカーブは曲がれないからな。

「キンジ。手分けして爆弾を探すわよ。私は車体下、キンジは車内。もし見つけれなくても車内には出ないこと」

「わかった」

お互いに作業に移る。
俺は車内だ。

「キンジ！ 運転席の下を見てくれ 車内にあるとしたら後は此処だけだ」

と言われた通り、俺は武藤が居る運転席の下を探した。
しかし、無い。

「ない……武藤大丈夫か」

俺は顔だけ上げて武藤の無事を再確認する。

「俺はな……だがな、“バス”はちょっとヤバいかもな。実は燃料が漏れてるんだよ」

さすが車輛科優等生だな。だが燃料漏れはヤバいな。

「しかも、このトンネルはレインボーブリッジ直結だ。間違えば都心で ドカンと爆発するぜ」

ヤケクソ気味の武藤。ここで冷静にならないといけないが、バス車内は大混乱だ。無理もない。

「くそっ！ 早く爆弾を見つけないと」

「キンジ！ 爆弾あったわよ」

この声は……アリアか！

その声のほうに向かい後方の割れた窓から背伸びをしてアリアの姿を見る。

どうやら逆さ吊りになって、バスの車体下を覗き込んでいるみたいだ。

「おそらくカジンスキーβ型のプラスチック爆弾ね。見えるだけでも、炸薬の容積は、3500立方センチはあるわ！」

「マジかよ。バスどころか戦車でも吹っ飛ばす量じゃねーか」

気が、遠くなる。

なんだそれは。過剰過ぎる炸薬量だな。

ドカンといけば、ホント都心が危ないぞ！

「でも大丈夫よ。これなら解体できるわ」

そう言っアリアは軽くウィンクをする。
生徒たちもその言葉で喜びの声が連なる。
そこへ……

「遠山くん。ちょっと」

不知火に呼ばれた俺はもう一度バスの中央に行く。

「どうした不知火」

「犯人はおそらく、今も僕たちのことを監視しているはずだ。次の手をうたれる前にセンサーかそれを監視する何かの装置を破壊しないと」

装置か。

バスの天井部分を武藤に開けてもらおうよう指示しバスの屋根に顔を乗り出す。

「あつた！ やっぱ屋根の上だったか」 俺は屋上にあつたアンテナらしき物をとった。

「キンジ！ 手が届かないの………あの馬鹿！ なにしてるのよキンジ！」

屋上に登った俺に、気が付いたアリアが顔を上げた。

「アリア、通信装置があつた。犯人のヤツこれを使ってバスの中を………」

「馬鹿！ 外に出るなって言ったでしょ。そんな初歩的な事も判らないの」

ロープを伝って上がっているアリア。どうやら俺は間違いな判断をしたらしい。

「悪かったよアリア。けどアリアが爆弾を解体している時のために
と思つて俺は」

「キンジ……。でもねキンジ！ 無防備過ぎるのよ！ 早くアంత
は車内に戻つて！」

ブォン！ というアクセル音に振り向いたアリア。俺もその視線
の先を見た……。バスの後ろにいたのは青のルノー・スパイダーだ -
- それも『UZI』短機関銃付きでだ。

その無人の座席から『UZI』を載せた銃座が、こっちに狙いを
定めようとしていた。

「伏せなさい！」

ルノー・スパイダーに搭載された『UZI』をブツ放すのが見えた。

“今の俺では”見えたが限界。
自分の顔面めがけて。

飛んでくる。

銃弾2発が……。

……死ぬのか。こんなところで、そう思った。

そんなときアリアはスローモーションのように、その小さな身体で俺めがけて突進してきて……突然ガバメントを抜き、

バチッ！ バチッ！

被弾音が、2つ。

僅かだが視界に鮮血が飛び散った。

……ただと痛くない。

「アリアっ！」

俺に抱きついてるアリア。……普通ならヒステリア・モードになっているはずだろう。だが、状況が俺をヒステリア・モードにさせない。

アリアの近くの屋根には鮮血の跡ができていた。

ブオン！ というアクセル音がバスの測面に回ってきた。

マズい！ - - - 今撃たれたら、死ぬ！

ルノー・スパイダーに搭載されている『UZI』の銃口が方こちらを向き、撃つ準備に入っている。

「アリア - - - ! !」

絶叫と共に、ピクリと動かないアリアをバスの屋根に引き上げる。その姿に俺の顔が青ざめた時 - - - -

スガガガガガガンッ！！

『UZI』がバスの屋根にいる俺たちにむかって銃弾を浴びせてきた。

くそッ！こんなところで俺は……………

ギイイインッ！

という金属音が響いた。

もう一度、ギイイインッ！

「! ?」

音に続いて、スギューン！ズガンツ！という音と共にルノー・スパイダーの銃座は破壊され、ルノーは急激にスピンを始め、ガードレールにぶつかって――ドカカカアアアンツ！バスの後ろで、爆発、炎上した。

俺は一瞬の出来事に啞然とする。

……そして視界に映り込んで来た人物は、先程使っていただろう銃に、全身漆黒な服装にすべて黒塗りのバイクで走っている人物がいた。

バス車内でも騒ぎ出していた。

そう、これが、この出会いが止まっていた運命の齒車が動き出した事件のはじまりになった。

第八弾 漆黒と鮮血（後書き）

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を一弾ずつ読んでくださった皆様には、いつもありがとうございます。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を八弾まとめて読んでくださった皆様には初めまして。

どうも！現役高校生の阿良々木 雅です。

さてさて、とうとうキンジと出会った『漆黒の男』。物語が動き出します。

次回予告をしたいとおもいます。【第九弾 前髪の下の傷跡】

一応仮タイトルになっております。

それでは、また皆様とお会いできることを願いつつ、アクセル全開で突っ走って行こうと思いますので、また、よろしく願います。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】のキャラクターたちが一人でも多くの読者の皆様と出会い、幸せな作品になってくれますように。

第九弾 銃弾と傷跡（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

新しく出会った 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆
様。

どうも10日ぶりです。

阿良々木 雅です。

アリアとキンジの仲が原作とは違います。
誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。
では、第九弾を楽しんでください。

第九弾 銃弾と傷跡

フォン！というアクセル音が鳴り響いた。黒塗りのバイク。大きな的には中型だろうか。目の下まで覆い隠せている黒マスクを着用している男が乗っていた。

バス車内は騒ぎ出している。そりやそうだろう『黒の疾風・紅い閃光』が現れたのだ。騒がないほうが無理という話だ。『黒の疾風・紅い閃光』のあだ名の理由は“事件”を解決するのが早く紅い瞳と漆黒の格好をしているため、そんなあだ名が命名されたとか。

そんなことを説明していたら、空から音が聞こえてきたような気がした。

耳を澄ますとレインボーブリッジの真横に、武偵高のヘリが併走してきている。

そのハッチは大きく開かれ、寝そべった姿勢でこっちに狙撃銃を向けているレキの姿が見えた。

おそらく今までトンネルで狙撃のチャンスがなかった。いやできなかったか。今、この大きなレインボーブリッジの上でチャンスが到来したのだ。

微かに聞こえてくるアリアのインカムから、

『――――私は一発の銃弾』

と、レキの声が聞こえてきた。見れば、バスを狙っている。レキはドラグノフ狙撃銃の銃口を、パツと光らせた。

ギギンッ！と着弾するのがわかった。

ガンッ、ガンガン、と何かの部品がバスの車体下から落ちて背後の道路に転がっていく。それはボールのように転がっていき橋

の下、海へと落ちていく。

――ドカウウウツッ！！

遠隔操作で起爆させられたのか――海中から、水柱が盛大に上がった。

アリアの鮮血の跡が海水によって流されていく。

黒塗りのバイクはそのまま走り去っていき、バスは次第に減速した…………。

屋根の上には、ぐったりと動かないアリアと結局アリアに庇われた俺が、豪雨のような海水に打たれ続けていた。

武偵病院に入院したアリアの傷は浅かったみたいだ…………。

運が良かったとしか言いようがない。

アリアに傷跡を残した『UZI』の銃弾は、2発とも額をかすめただけで重傷には至らなかった。

バスの屋根で動かなくなっていたのは脳震盪を起こしていたためである。そのためアリアはMRIを撮ってもらったが、脳内出血も無く、外傷だけで済んでいるみたいだ。

【事件後：翌日】

報告書を教務科に提出してから武偵病院に行くと…………レキと

廊下で出会った。

「レキ。おまえも来ていたのか。すまないアリアのために」

「いえ、アリアさんは私のクライアントです」

クライアント。そうか。そういうことか。
そんなことを思いついていた俺にレキが口唇を動かす。

「作戦状況、必要になるかもしれないと頼まれたので、アリアさんは言っていました。キンジさんと組めば、どんな事件でも解決できるかもしれないと……」

するとレキはアリアの病室であろう扉を名残惜しいそうに？見ている。

……………レキと別れた。

俺はアリアの病室の前で立ち止まった。

少しだけ開いていたベッドルームのドアの隙間から覗く。

覗いたら、そこでは大きなベッドに座ったアリアが……いた。

手鏡で、自分の額の傷を見ていた。

「……………」

2発の銃弾はアリアの額に2本の交差する線のような傷跡を残しているのだろう。

パッチン……パッチン。

アリアは涙目で手鏡を見ながら、いつも使っていたパッチン留めを付けては直し、付けては直ししていた。

それを覗き見していた俺の胸に、ちくり、と針で刺されたような痛みが走る。

アリアは……あんな傷をつけられて――。

きつと辛いはずだ。

「……アリア、入るぞ」

俺は今来たようなフリをしつつ、ドアをノックする。

「あ、ちょ、ちょっと待ちなさいキンジ」

部屋の中から、がさごそ、と何か慌てた感じの物音がした。

「……入っていいわよ」

と言われて俺が入ると、アリアの額には包帯が巻かれていた。ん？さっきまで額の傷見てたんじゃないのか？

「……見舞いというほど、大した物持ってきてないけど」

「……そう、お見舞い」

少し俯き暗い表情になるアリア。

「ああ。大丈夫か？傷」

「……え？ええ。大丈夫よ。こんなかすり傷で入院なんて、ちょっと大袈裟よね」

彼女は前髪を弄りながら、苦笑いをしていた。

「……武偵憲章1条。仲間を信じ、仲間を助けよ。あたしはそれに従っただけ。それで怪我したのなら仕方ないわ」

「武偵憲章だなんて……そんなキレイ事を馬鹿みたいに守るなよ」

「……そうね。こんな馬鹿を助けた　あたしは、馬鹿だったのかもね」

ぶいっ、とそっばを向いたアリアに、俺は……これ以上この話題で話すのがイヤになってしまい、脇に挟んでいた資料をアリアに

差し出した。

「悪い。言い過ぎた。その代わりっていったらいいのか判らないけど、今回の事件の報告書だ」

アリアの手が届く位置に そつと報告書を置く。

「探偵科と鑑識科が徹夜で調査してくれたんだ。結論から言つと……犯人に繋がるような痕跡は何一つ見つからなかった」

「でしょうね。『武偵殺し』はケタ外れに狡猾なヤツよ。証拠なんか残すわけがない。それで、もう要件は済んだでしょ」

「……いや、まだ、その資料は捨てるなよアリア」

「？」

資料が入っているファイルをゴミ箱に捨てようとしていたアリアの動きを止めた。

『武偵殺し』の件には手がかりを掴めなかったが……まさかの出来事が起きたんだからな。

「その資料の55Pから最後まで『黒の疾風・紅い閃光』の詳細が

ある」

「!?!」

俺が言ったことを確認するように彼女は資料のページを捲る。

「……本当に、存在していたのね」

「ああ。バスジャックの時も最後に現れたよ。手にしていた武器はおそらくベレッタP X 4 - s t o r mだ。それも特別仕様になっていた」

「……紅色のベレッタP X 4 - s t o r mとS I Gを愛用していて、漆黒の銃弾を使用している。漆黒に身を包み込み紅い瞳で事件を解決していた……東京武偵高校生……」

アリアは資料を真剣に見ながら呟いている。

「アリア。俺はそろそろ帰るよ」

腕時計で時間を確認しながらドアノブの前まで行った俺の背中に、アリアが小さな声で、

「キンジ。あ、あ、ありがとう」

「…お、おう」

まさかの感謝の言葉で少し戸惑ってしまう。
だが…微かに聞こえる彼女の、アリアの言葉。

「…あたしには、時間が無い」

………そう言っていた。その姿はか弱い一人の女の子。武偵ではなく“女の子”として。

気がついたら、俺はアリアに話し掛けていた。

「時間がないって、どういうことだよアリア」

「…っ！！………言えない。それでも知りたいなら自分で調べて………」

言えない。

その言葉は意味深で重たい一言だった。

俺は……武偵なんか辞めたかった。

けど、さっきの言葉の意味を知るまで俺は辞めない。

そう、五秒前に決めたんだ。 コイツと出会って、俺は変わった
のかもしれない。少しだけ……

「そうか。じゃあ、俺は帰るよ」

少しだけ、まだ俺は逃げているのかもしれない、アリアは立ち向
かおうとしていた。

そんなことを思いながら病室から出ていった。

第九弾 銃弾と傷跡（後書き）

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を一弾ずつ読んでくださった皆様には、いつもありがとうございます。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を九弾まとめて読んでくださった皆様には初めまして。

最近……よく溜息を吐き出す阿良々木 雅です。

いえ、何故か『ハア』と溜息を吐き出してしまうのですよ。毎日ですかね。1日二回は溜息を吐き出しています。

現在は秋休みなんです。特殊な高校なんですよ、ちょっとテンションが上がってしまいましたね。

では、後書きはこの辺りで終わらせていただきます。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】のキャラクターたちが一人でも多くの読者の皆様と出会い、幸せな作品になってくれますように。

第十弾 漆黒と手錠と煙草（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

新しく出会った 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆様。
様。

昨日ぶりですね。

2日連続投稿です。

バスジャックの“とある”部分の裏話みたいな感じです。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、第十弾を楽しんでくださいね。

第十弾 漆黒と手錠と煙草

スガンツ！！スギュン！！

この2発の銃声によってオープンカーの外車ルノー・スパイダーに搭載されていた短機関銃『UZI』の銃座とルノー・スパイダーのタイヤを狙い撃ち、物の見事にルノー・スパイダーはスピンしながら壁に激突し爆発した。

『後は、狙撃科のレキさんが爆弾を処理します』

微かに俺の特殊改造インカムから指示される中空知美咲の声を聴き、フォン！！というアクセル音を鳴り響かせバスを抜き去った。

「……任務完了だ。ありがとう中空知」

そう言っただ俺は目の下まで覆い隠せそうな黒布マスクを鎖骨あたりまで下ろした。

そう黒布マスクを下ろした瞬間だった。

銀色に輝く一筋の光がこちらに パツ と閃光（ひかった）。すると……ガシャンツ！！その奇妙な生鈍い金属音が鳴った俺の左手首へと視線を下ろした……っ！！

ジャラツ！！銀色と真っ黒、それはまるで黒さえも包み込む漆黒な色だ。特殊仕様の銀色と漆黒の手錠が俺の手首に嵌められていた。

……。

しかし、この武器には見覚えがある。

……。

「よう『黒の疾風・紅い閃光』……いや違うな。なあ紅坂 黒霧」

と、レインボーブリッジの上から突如として舞い降りてくる少年。

「フー……。久しぶりだな黒霧」

と、レインボーブリッジの下、つまり海から上がってきたであろう少年に囲まれた。いや“久しぶりの再会”をした。

「……久しぶりだな。銀錠 空牙。刺々森 鋭時」

「フー……」

彼が刺々森 鋭時。170センチぴったりの身長に武偵高校の制服を着ている。髪色は茶髪で瞳は髪色と同化させるような茶色だ。耳にはピアスがついており片耳だけでも8個あいているだろう。クールで煙草が好きな俺の親友だ。

「ホント、久しぶりだよな♪」

このテンションが高い少年の名は 銀錠 空牙。175・9センチという中途半端な身長をしている。武偵高校の制服のスボンには手錠がジャラジャラ装着されてあった。銀色の手錠と合わせるかのようには自身の黒髪の下に銀色のメッシュをいれている。俺の大事

な腐れ縁兼親友だ。 そんな説明をしといたら……

「武器を 構え ヤガレです。 構え ナクても 攻撃するで ヤガります」

奇妙で独特なボイスチェンジャー音。ボイスチェンジャーの例えを出すなら誘拐だ。誘拐犯が警察などと身代金の要求をするときによく使われる音声切替え機能がある。

まったく、久しぶりの再会中に無粋な奴らが来たようだ。

『セグウェイ』

セグウェイは乗り物だが、そのセグウェイは無人だった。本当は人、一人が立つて乗るべき部分にはスピーカーと、1基の自動銃座が搭載されていた。

その銃座から俺たちを見つめる、銃口。

『UZI』

イスラエルIMI社の傑作短機関銃で、秒間10発の9mmパラベラム弾を撃ち放つことができる厄介な代物だ。それに相手、つまり『セグウェイ』は機械だ。俺の能力は使用して無駄なだけ。あとは……対価能力なんだが……。

こんなことを考えていると『セグウェイ』が――

スガガガガガンッ!!

『UZI』短機関銃が俺たちに向かって銃弾を浴びせてきた。

俺は、その放たれた銃弾を『黒牙』で全て叩き落とそうとしたら空牙が銃弾に向かって走っていく。

……。
バキッン！！という金属が割れる音を鳴り響かせた後、こちらへ戻ってくる空牙。

「…これで、暫くは『セグウェイ』も『UZI』の9mmパラベラム弾の銃弾も届かないだろう」

と言った。

『UZI』が放った銃弾と『セグウェイ』は物の見事に時が止まったかのように動きが止まっているかのように見えるが………僅かに動いている。

「俺の今の“対価能力”では、完全には止まれねえけど、これで十分だろ」

軽く言い放つ彼はズボンに装着されている手錠を手にとる。その手錠の輪っかの中に人差指を入れ、徐に回し始めると………

手錠の金属音の数が増えた。人差指で回っていた手錠の数が一つから二つへ、もう片手の人差指に増えた手錠の輪っかに入れ回した。

また一つから二つへと増えていく。

増えた手錠をズボンに装着し直した空牙。

右太股のホルスターから44デザートイーグルを抜いた。

普通のデザートイーグルとは違い、50A・E・弾を使用するのでは無くリボルバー拳銃の代名詞と呼ばれる、強力な44マグナム

弾を撃つことができる大型オートマチック拳銃になっているのが4デザートイーグルだ。

「セグウェイさん♪ Attention please でやがります♪」

ピン という音を指パッチンで鳴らした空牙は『武偵殺し』の口調で44デザートイーグルを片手撃ちで44マグナム弾を発砲した。

ドウッン!!

身体の芯を揺さぶるかのような轟音がレインボーブリッジに鳴り響く。

使われた弾丸は、1発――。

その、たった1発44マグナム弾の弾丸が『UZI』の銃口に飛び込んでいった。

ガシャン!!ドオン!!

『セグウェイ』たちは全て、その銃座に搭載された『UZI』を吹っ飛ばされた。

空牙の、たった1発の銃弾に……。

倒れた『セグウェイ』が沈黙するのを確かめると、空牙が動きを鈍らした9mmパラベラム弾の銃弾を俺は『黒牙』で風払った。

ギンギンギンッ！！

丁寧に風払った銃弾は道路に落ちた……………

カラッソカラッソ……………

それは、まるで発砲した時に排出される空薬莢の音に近かった。
……………。

「ふう……………対価払わないといけないな」

と言った空牙は44デザートイーグルをホルスターに収め、懷から飴玉を出してきた。

「……………♪美味しい♪」

飴玉を口の中で転がしながら味わっていた彼のいう“対価”が飴玉なのだ。

「フーー。終わったか」

煙草を吸っている鋭時。飴玉を舐めている空牙。漆黒で身を包み込んでいる俺、紅坂 黒霧。

- - - ドウウカカンッ!!

レインボーブリッジの下、つまりは海中からでも聞こえるくらいの爆音が水柱と共に盛大に上がる。

どうやらバスジャックのために使用された爆弾。中空知からの情報では『カジンスキーβ型のプラスチック爆弾（Composition 4）炸薬容積は、3500立方センチあります』と断言していたっけな。

レインボーブリッジだけを包み込むくらいの豪雨のような海水に俺たちも、打たれた。

久しぶりの再会をした。俺たちは豪雨のような海水に打たれながら、何が可笑しかったのかわからなかったけど笑い合っていた。

第十弾 漆黒と手錠と煙草（後書き）

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を一弾ずつ読んでくださった皆様には、いつもありがとうございます。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を十弾まとめて読んでくださった皆様には初めまして。

どうも！寝たのが深夜3時だった阿良々木 雅です。

深夜3時……ちよつと執筆などをし過ぎました（↑汗

この作品も早、第十弾にまで投稿でき感謝感激です。

では、誤字、脱字をなくすためにも『まよチキ』の二次創作を進めていくので、後書きはこの辺りで終わらせていただきます。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】のキャラクターたちが一人でも多くの読者の皆様と出会い、幸せな作品になってくれますように。

Profile：刺々森鋭時 part 1（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会った 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆様。
様。

3日連続投稿の

阿良々木 雅です。

今回はプロフィールです。

誤字。脱字。変換ミスなどがあるかもしれませんが、どうぞ ご覧
ください。

Profile：刺々森鋭時 part 1

名前：刺々森 鋭時

読み方：ささもり えいじ

身長：170センチ

体重：50キロ

血液型：B型

年齢：16歳（高二）

高校：東京武偵高校

【武器】

銃編：デザートイーグル（カスタマイズ無し・特別仕様あり）

剣編：鋭斬刀（四本）

能力：発火

対価能力：秘密

対価：煙草

容姿：茶髪で茶色の瞳。片耳だけで8個ものピアスをつけている。
黒霧と同じくらい整った顔つき。

性格：クール。基本的に「フー」が始めてくる。 煙草を吸っている時のみ。

【現在のパートナー】

紅坂 黒霧・銀錠 空牙

【元パートナー又チーム】

黒錠之無崩壁^{チーム}

好きな物：煙草（度数1）

好きな人：仲間

異性：いない

【流派】

無技（黒霧直伝）

特別科目：強襲科

元特別科目：無し

自由履修：無し

中学時代：超能力研究科

【戦束装】

左太股にホルスター：デザートイーグルを収めている。

武偵高防弾制服。

腰に鋭斬刀四本差し。

胸ポケットに煙草一箱。 発火能力のためライター必要無し。

【通常】

武偵高防弾制服

【戦兄弟】

Profile：銀錠空牙 part 1（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会えた 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』タグを利用している皆様。作者の皆様。読者の皆様。
様。

二回目の投稿です。

どうも

阿良々木 雅です。

誤字。脱字。変換ミスなど あるかもしれませんが、どうぞ ご覧
ください。

Profile：銀錠空牙 part 1

名前：銀錠 空牙

読み方：ぎんじょう くうが

身長：175センチ

体重：57キロ

血液型：O型

年齢：16歳（高二）

高校：東京武偵高校

【武器】

銃編：44デザートイーグル（44マグナム弾特別仕様として銀弾）
特殊武器：手錠（銀&漆黒仕様）

能力：物質操作

能力内容：物体、物質の増殖、縮小、重さなどを操る。

対価能力：時間操作（物体のみ）対価：飴玉

容姿：黒髪に所々に銀色のメッシュが入っている。顔はまあまあかな（笑）

性格：テンション高い少年。語尾に♪がつく時が多々。戦闘になると口調が変わる。ただし武偵殺しのモノマネをする。自称、最強。

【現在パートナー】

紅坂 黒霧・刺々森 鋭時

【元パートナー】

なし

【チーム】

黒錠之無崩壁

特別科目：探偵科

元特別科目：超能力捜査研究科自由履修：強襲科

好きな物：飴玉（レモン味）

嫌いな物：茄子

好きな人：仲間

異性のタイプ：メガネっ子

【戦束装】

右太股のホルスターに44デザートイーグルを収めている。

武偵高のズボンに幾つもの手錠を装着している。元々手錠は一つだけ。能力で手錠を増やした。

【通常】

東京武偵高防弾制服

第十一弾 眞実は雨中の涙へ（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

新しく出会えた 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆
様。

どうも

阿良々木 雅です。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、第十一弾を楽しんでください

第十一弾 眞実は雨中の涙へ

あれからアリアとは会っていない。いや、会えない。あんな弱々しいアリアには…………… 会えなくなってしまった。

会えない…………… この選択肢でよかったんだろうか。

これは…………… この選択肢の結果は昔の俺だと御望み通りの結末だろう。

俺、遠山キンジはあのバスジャックで、何もできない“今の”何もできない自分を見せてしまった……………。はじめてアリアと出会ったあの時のように『ヒステリア・サヴァン・シンドローム』通称、いや自称『ヒステリア・モード』になっていればアリアの額に傷跡を残さずに任務を終えていたかもしれないのに……………。

こんな俺をアリアは失望しただろうか…………… 失望して欲しいという感情より失望しないで欲しいという感情が増している。

おかげで俺は強襲科を黒霧と行く毎日を過ごしていた。昔の…………… 兄さんが死んでからの俺だったら、探偵科でのんびり時間を潰し、来年から普通の高校に転校する。そして、武偵の世界から足を洗って、普通の大人になるはずだったんだよね……………。はあ…………… 何回今日という日に限って溜息ばかり出してしまふのだろうか。

…………… はあ。

現在は昼過ぎ。俺は学園島をウロウロとしていたら、偶然退院したであろうアリアを見つけたのは意外な場所だったのだ。学園島の片隅にある、美容院で、だ。

偶々美容院近くの信号待ちをしていたところにアリアを見つけた俺は、彼女のあまりの変貌っぷりについ視線がアリアの方ばかりに向いてしまった。

アリアは俺に見られていることに気づいていなかった。あ、また覗き見になってしまったな……………。

少し重い表情をしていたアリアは、長く綺麗に靡くピンク髪のス

イテールはそのままに、少し髪型を変えていた。

髪を……前髪を、作っていた。

その髪型は クラツとくるくらい可愛いものだけでも、あれは -
- 聞くまでもない。額の傷跡を隠すためのものだろう。 そう思
った俺の胸の奥に、また、 チクリと鋭い痛みが走った。

前髪を作った彼女は白いサクランボみたいなファアのついたミュ
ールを鳴らして、モノレールの駅へと歩き出す。

その服装は - - - 私服だ。 制服ぐらいしか見たことが無かつ
たので、こういう普通の女の子らしい姿は新鮮に感じた。 白地に
薄いピンクの柄が入った清楚なワンピースを着たアリアは、まるで
ファッション雑誌から飛び出てきたかのように見えるくらい今風
な格好だった。

だが……アリアは普段から身だしなみには気を遣う方ではあつた
が、ここまでしっかりおめかしした姿を見たことが無いのだ。
にしても……どこへ行くんだろうか。

(……デートか?)

か?……わからないな。

……カレシ?

いるのか?

いるとするなら、どんなヤツなんだろうか。

そう思った俺は、何故かは分からなかったが、ついアリアの後を
尾行し始めてしまっていた。 アリアはモノレールで新橋に出て、
そこからJRで神田を經由し……新宿で降りた。

少し後ろからついていくと、意外な方向に向かっているではない
か。

そう西口から高層ビル街の方へ向かっていたのだから。

……カレシは社会人か？

そんな事を考えながら尾行を続けていると……。

アリアは、ある意外過ぎる建物の前で足を止めた。

新宿警察署。である。

こんな所（新宿警察署）に、なぜそんなオシヤレな格好をして来るんだ？

「……キンジ。いるんでしょ。さつさと出てきなさい。下手な尾行過ぎてシツポがによるによる見えてるわよ」

振り返らずいきなり言ってきたアリアに、俺は棒を飲んだようになつてしまう。

- - - なんだ。

バレてたのか。

「……気づいてたのか」

「当たり前よ」

……なんか口調が以前と変わった？優しい口調になっているような……そんな気がした俺はアリアの横に立った。

「で、なんで警察署なんだよアリア」

「それは……」

「言えないのか？」

「違ッ！……言えないんじゃないのよ。正直迷っていたのよ。“これ”について教えるべきかどうか。キンジ、アンタも『武偵殺し』の被害者の1人だから」

「？」

「もう着いちゃったし。いいわ。ついて来てキンジ」

と言うアリアの口調は優しくだったが、いつもの覇気が感じられなかった。

署内に入っていくアリアに、俺の頭は少し困惑し、幾つもの疑問符を浮かべながらついていくのであった。

留置人面会室で2人の管理官に見張られながらアクリルの板越しに出てきた美人に、俺は見覚えがあった。普通なら見覚えがないはずなんだが……確かに見覚えがあった。

たしか……アリアの拳銃コルト社の名銃・ガバメントのグリップに、埋め込まれていたカメオ。そこに彫刻されていた、アリアはよく似た女性である。柔らかな曲線を描く長い髪。オニキスのような綺麗瞳。アリアと同じ白磁のような肌――。

「まあ……アリア。この方は彼氏さん？」

「ちっ、違っわよママ」

俺を見てちよつと驚いたような、しかしおっとりした心地よい声を上げたその女性は……。アリアの、母親。なのだろう……にしても若い。

母親というより、年の離れたお姉さんって感じがするよ。

「アリアもボーイフレンドを作るお年頃になったのねえ」

「違うの。コイツは遠山キンジ。武偵高の生徒で、そういう関係じゃないわ絶対に」

長い睫毛の目を優しくに細めた母親に、アリアはスパツと言い切る。

まあ、否定はしたが顔が真っ赤だぞアリア。そんなアリアの頭を軽くポンポンと叩く。

「……初めまして。わたし、アリアの母で、神崎かなえと申します。娘がお世話になってるみたいですね」

「あ、いえ……」

こんな薄暗くアクリル板がある部屋にもかかわらず、かなえさんはその場の空気をすべてを柔らかく包んでくれるような感じのする人だった。

俺はこういうタイプの人にはちょっと弱いんだ。

柄にもなくどぎまぎしてしまって、滑舌が悪くなってしまう。アリアはアクリル板越しにいる神崎かなえさんと向き合った。

「ママ。面会時間が3分しかないから、手短に話すけど……キンジも『武偵殺し』の被害者なのよ」

「……まあ……」

優しげに微笑んでいた、かなえさんの表情が固くなる。

「さらにもう一件、一昨日はバスジャック事件が起きてるの。最近、ヤツの活動が急激に活発になってきているのよ。だからあたし、狙い通りまずは『武偵殺し』を捕まえる。ヤツの件だけでも無実を証明すれば、ママの懲役864年が一気に742年まで減刑されるわ。

最高裁までの間に、他もぜったい、全部なんとかするから」

……アリアの言葉に、俺は目を丸くした。

「アリア。気持ちは嬉しいけど、イ・ウーに挑むのはまだ早いわ……それに『パートナー』は見つかったの？」

「それは……まだ。パートナーを見つけられなくて……あたしには、誰もついてこれなくて……」

「ダメよアリア。あなたの才能は、遺伝性のもの。曾お爺様にも、お祖母様にも、優秀なパートナーがいらっしゃったでしょう？」

「……それは、ロンドンで耳にタコができるぐらい聞かされたわよ。いつまでもパートナーを作れないから、欠陥品とまで言われて……でも」

「人生は、ゆっくりと歩みなさい。早く走る子は、転ぶものよ」

かなえさんはそう言つと、長い睫毛の目をゆっくりまばたかせた。

「神崎。時間だ」

壁際に立っていた管理官が腕時計を見ながら告げる。

「ママ!」

「焦ってはダメよアリア」

「やだ!あたしはすぐにでもママを助けたいの!」

「その気持ちは嬉しいわ。でも、まずはパートナーを見つけなさい。その額の傷は、1人で対応しきれないところまで踏み込んでいる証拠よ」

アリアが前髪で隠していた傷とテーピングにはとくに気付いていたらしく、かなえさんがアリアを叱る。その叱り方は優しさの中に棘があった……。

「やだやだ!」

「アリア……!」

「時間だ!」

興奮するアリアを宥めようとアクリル板に身を乗り出したかなえさんを……管理官が羽交い締めにするような形で引っ張った。

……あそこまで乱暴にするものなのか……。

「やめろッ！ ママに乱暴するな！」

アリアはまるで小さな猛獣のように犬歯を見せ、その赤紫色（カメラリア）の目を激昂させてアクリル板に飛びかかった。

だが板は透明でも、厚く固い。勿論少しも歪まず、アリアを受け付かせない。

かなえさんはアリアを心配そうな目で見ながら、管理官2人がかりで引きずられるようにして運ばれていった……。

面会室の奥の扉が……クリーム色の柔らかさとは裏腹に重い金属音を響かせて……閉ざされた。

曇り空の新宿駅へ戻るアリアに……。

俺は、声をかけられずにいた。

ただアリアの後についていく。

「……………」

かつん、かつん、かつん。

ミュールを鳴らしてアルタ前まで戻ってきたアリアは、急に……
かつ……………ん。立ち止まった。

俺も影法師のように立ち止まる。

背後から見れば、アリアは顔を伏せ、肩を怒らせ、ぴん　と伸ばした手を震えるほど強く握りしめていた。

……………ぼた。

…ぼた……………ぼたた。

その足元に、何粒かの水滴が落ちてはじけている。
それは……………聞くまでもない、アリアの涙だった。

「……………アリア」

「泣いてなんかない」

怒ったように言う彼女は、顔を伏せたまま震えていた。

「……………アリア」

俺はアリアの前に回り込み、少し背をかがめて顔を覗き込んだ。
ぼろ……………ぼろ。

前髪に隠れた目から、俯いた白い頬を伝って、真珠みたいな綺麗

な雫が道に落ちる。

「な…………泣いてなんか……………」

と言うアリアは齒を食いしぱり、きつく閉じた目から涙を溢れさせ続けていた。

そして――。

「ない…………わぁ…………うぁぁぁぁぁ！」

糸が切れたかのように、泣き始める。

俺から顔を逸らすように上を向き、ただ子供のように泣く。ア

リアの感情と共鳴するかのように曇天の空から通り雨が降り始めた。

……………やっぱり俺は。

無力だ…………。

人々の話声、車が走り抜ける音が。

喧騒の中でいつまでも泣き続けるアリアにどうしてやることもできなくて…………

ただ、無力な俺は、無言のまま、そのそばに立っていた……………。

第十二弾 情報の真相（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会えた 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆
様。

どうも

最多連続投稿中の

阿良々木 雅です。

武偵殺し編は原作似。

漆黒の魔弾の主人公、朱雀先輩登場

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、第十二弾を楽しんでください

第十二弾 情報の真相

あの日からの学校。

東京が強風に見舞われた週明け、一般科目の授業に出た俺の右隣は空席だった。

神崎……………アリアは学校を休んだらしい。

あの後……………アルタ前で泣き止んだアリアが「一人にして」と言ってきたので、俺たちは結局あそこで別れたままになっている。

あの日、かなえさんに会った日、俺は偶然見つけたアリアを尾けて、被害者の１人として神崎かなえさんの所についていて……………いろんなことを知って……………しまった。

……………アリアの母親は『武偵殺し』の容疑者として捕らえられている。

そして早くも二審まで、有罪判決を受けているのだ。

おそらく、下級裁隔意制度が適用されたのだろう。

下級裁隔意制度とは、証拠が十分に揃っている事件について、高裁までを迅速に執り行い、裁判が遅滞しないようにする新制度である。その高裁での量刑、懲役８６４年。事実上の終身刑だ。

また面会室での会話から考えて、アリアの母親の容疑は一連の『武偵殺し』による殺人事件以外にもあるようだ。アリアはその全てを冤罪と断じ、最高裁までに覆そうとしているのだ。武偵として真犯人を見つけないという、荒っぽいやり方で。

それと……………『パートナー』のこと。

アリアの実家こと『H』家は、リアル貴族の一門だ。どうやらそこは警察か何かの名門で、みんな優秀な相棒と組むことでその遺伝性の能力を飛躍的に伸ばし、功績を成してきたらしい。

そのためアリアにも相棒を作ることが求められているのだが……………

アリアはその『パートナー』を見つけられずにいる。

パートナーなんてすぐに見つけられるだろ……なんて思うかもしれないが、あんな天才児に合わせられる相棒なんて、そう簡単に見つかるワケがない。アリアと釣り合うヤツなんて『黒の疾風・紅い閃光』ぐらいだろう。アリアが『パートナー』を『奴隷（ドレイ）』と言い換えていたのも、相手に求める能力のハードルを言葉の上だけでも下げて、自分にかかる心理的な負担を軽くさせようとしていたのかもしれない。

そんなことをぼんやり考えながら、全然集中できなかった探偵科の授業を終えると……。携帯電話に、Eメールが来ていた。

誰だ？……と思い、メールを開く。

峰 理子からだ。

内容は……………。

『キーくん。授業が終わったら台場のクラブ・エステーラに来て。大事な話があるの』

普段の俺なら、こういったメールはスルー確定だったろう。そもそも女の子の誘いなんて鬼門だし、理子の『大事な』って言葉に大事だったためしがないからな。

だが、今回は……少しだけ状況が特殊だ。

理子は先週のバスジャックに関連した情報や『黒の疾風・紅い閃光』に関連した情報も引き続き調べていて、今日もそのためか探偵科の授業をサボっていた。それに今日、アリアが休んだこともなんとなく気になる。探偵科の授業が終わりを告げるチャイムが鳴った。

素早く教室をあとにしようとしたら銀錠に呼び止められる。

「遠山！待って」

「なんだよ銀錠」

携帯電話の液晶画面を見て時間を確認しながら足取りを止めた。

「いや、アリアについて俺なりに調べたからさ……ちなみにシークレットまで調べておいたぜ。きっと遠山は欲しいはずだからな」

俺に調べてくれたらしい資料を差し出してくれた銀錠 空牙。コイツは探偵科の中でもランクが高めのAランク武偵だ。そのため、秘密情報などを調べ上げるのもお茶の子さいさいなのだ。

「……これは！……銀錠ありがとう。助かる」

資料のP25で書いてあったことに一度は自身のは目を疑ったが、それは事実なのだろうと判断した。

今日アリアが休んでいる理由がわかった。

ANA600便・ボーイング735-350、ロンドン・ヒース

ロー空港に帰るために休んでいたことを――

俺は廊下を走りながら理解した。

現在時刻

夕方PM18時00分。

綺麗な夕焼け空は茜色に輝いていた。

ん？やけに風が強いな。これは東京に迫る台風の影響だろう。だから風が、強い。

少し迷いながらクラブ・エステーラとやらの扉をあけ入ると、奥から小走りにやってきた理子が、

「キーークーーンー！」

例のロリータ改造制服を着ていた。

今日のは…… 一段と進化していた。特にスカートがカーネーションの花びらみたいにひらひらと膨らんでいる。また、すごいのが完成したな理子よ。

「ったく。お前なあ。授業サボって、こんなトコで何やってんだよ」

「この勝負服のお着付けしてたんだよ。キークンなかなか来ないから、フられたらどうしようかなーって思ってたんだよー」

「フるとかフられるとかの関係じゃないだろ俺たちは」

「えー。でも、こっからは理子ルートなんですよーキークン」

「なんだよ、それ。意味が分からん」

笑う理子の上目遣いが妙に艶めかしくて、俺は舌打ちする。やっぱり、こんなところ（クラブ・エステーラ）に来るべきじゃなかったな。なんなんだ、コイツは。

理子は俺と腕を絡ませると、意気揚々と店の奥に進み出す。

理子に押し込まれるようにして入った個室は、アール・ヌーボ調に飾り付けられた2人部屋だった。理子は俺をフカフカしたソファに着かせると、その童話のお嬢様みたいなスカートで真隣に座り、テーブルに用意してあったモンブランと紅茶を示してウィンクしてくる。

「呼び出しちゃったから、理子がゼーんぶおごったげる」

そう言うとき理子は甘ったるそうなミルクティーを飲み、その大きな瞳でこちらを見つめ上げてきた。

「ぶはっ！　ねえキーくん、アリアとなんかあったでしょ」

「そんなこと……お前に関係ないだろ」

「関係あるよお。キーくんはアリアと仲良くしなきゃダメなんだから」

「なんでだよ」

「そうじゃないと理子が楽しくない!」

理子はモンブランをフォークで切り分け、にいと笑う。

「はいキーくん、あーんして」

切り分けたモンブランを乗せたフォークを、俺の方に突き出してくる。

「するかバカ」

「……『武偵殺し』」

何かのカードを切るようにそう告げてきた理子に、俺は目を見開いた。

「何か……分かったのか?」

「あーんしてくれたら教えてあげる」

……死ぬほど恥ずかしかったが、背に腹はかえられない。俺

は理子にモンブランを一口 あーん ともらうと、さあ教えろという目ですごんだ。

「くふ。あのね。警視庁の資料にあったんだけどね……過去、『武偵殺し』にやられた人って、バイクジャックとカージャックの2人だけじゃないかもしれないんだって」

「?……どういうことだ?」

「『可能性事件』っていうのがあるんだよ。事故ってことになってるけど、実際は『武偵殺し』の仕業で、隠蔽工作で分からなくなってるだけかもしれないってこと」

「そんなものがあるのか」

「そこにね、見つけちゃったんだ。たぶん、そうじゃないかなあって・名・前」

理子はポシエットから出してきた四つ折りのコピー紙を、手品でもするかのようにゆっくり、ゆっくりと広げ、俺に見せつけてくる。

「……………ッ!」

血が、凍る。

『2008年12月24日 浦賀海難事故 死亡者 遠山金
一武偵（19）』

「この名前、キンジのお兄さんでしょ？　ねえーこれ、シージャックだったんじゃない？」

理子の声が、やけに遠く聞こえる。

――『武偵殺し』

何なんだ、お前は。

一体何者なんだ、お前は。

誰なんだ、お前は。

何故兄サンヲ。

何故兄サンヲ、何故俺ヲ、狙ッタ――！

応えろ――！貴様は何者だ――！

「いい」

熱を含んだ理子の声に、はっ、と気を取り戻す。
俺と目が合うと、理子はスッと目を細めた。

「いいよキンジ。キンジのそういう眼。理子ゾクツてきちゃう」

まるで何かに快感を得ているような表情で、彼女は俺の上半身を寄せてくる。

「理子？」

「キンジっ」

理子は狭い個室の中でいきなり、しがみついてきたのだ。

突然のことに、俺は為すすべもなくソファーに押し倒されてしま
う。

「おい、理子!？」

「キンジって、ほんっとーにラブに鈍感。……ねえキンジ、分かってる？ これ、もうイベントシーンなんだよ？」

ツーサイドアップに結った理子の長い髪と左右のテールが、俺の頭を覆うようにして包み込んでいる。

目の前ほんの5センチほどに迫った、理子の童顔。

アリアとはまた違う、バニラのような、アーモンドのような、お菓子みたいに甘ったるい女の香り。

理子は口唇を触れるか触れないかの距離まで俺の頬に近づけると、

そのまま、耳元に口を寄せてきた。ペロ。何のつもりか、耳元を舐めてくる。く、くすぐりたい。

「ねえ、キンジい。せつかく高つかい個室とつたんだし……いいこと、してもいいんだよ……」

熱く切ない囁きと共に、理子は、俺に全身をすり寄せてきた。り、理子。理子って、こんな色っぽい子だったのか。

いつも少女趣味な格好で子供みたいな仕草をしてるクセに、カラダ凹凸はやたらとハッキリしてて、柔らかくって……

「キンジ。この部屋でのことは、だぁーれにもバレないよ？白雪はSSR（超能力捜査研究科）の合宿だし、アリアは羽田空港だからね。今夜7時のチャーター便で行く話だし、だから……理子といいことしょ？キンジい」

その誘惑が突然だったせいと、あまりにも意外で心構えができていなかったせいで。

俺は……。

気がついた時には、体の芯が熱くなり……。

ヒステリアモードに、なって、しまっていた。

「……………」

その瞬間、俺の頭の中に閃くものがあつた。

いま理子から聞いた話と過去の事件が、繋がっていく。

その繋がっていった線は……。

ある恐ろしい、取り返しのつかないエンディングにつながってい

る。

- - ヤバい。

ヤバすぎる。

今すぐ、動かなければ - -

「ゴメンな - - -」

ヒステリアモードの俺が、理子の目の前に手を滑り込ませ、パチンッ！

指を、弾いて鳴らした。

みゅっ　と理子がまばたきした刹那 - - -

「お子様は、そろそろお家でネンネの時間だろうっ？」

「あんっ！？キンジい？」

その小さな体を抱え上げ、くるっ。

俺は体を入り替え、理子をソファーに横たわらせる。

そして立ち上がると、前髪をかき上げつつ、部屋を飛び出していた。

ヒステリアモードの、頭で……………。

ヒステリアモードは長くても数十分しか続かない。まあ、どういう刺激を受けるかにもよるけどね。

そんな説明をしていると、ポケットに入れていた携帯電話が鳴り始めた。

ケータイの液晶画面には『鳳凰院先輩』という文字で表記されていた。俺は通話ボタンを押し、耳に携帯のスピーカーを当てた。

「遠山！アリアが殺されるかもしれないぞ！！」

「わかっています。今、羽田空港に向かっています。けど何故鳳凰院先輩が“それ”を知っているんですか？」

「…銀錠だよ。銀錠に教えてもらったんだよ。俺もアリアとは数回一緒に任務を受けてたからな」

走りながら電話をしていた俺は鳳凰院先輩に約束をした「アリアを救います」と……。

そうして、通話を切った……………。

第十三弾

A t t e n t i o n P l e a s e . (前書き)

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会えた 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆
様。

どうも

阿良々木 雅です。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、第十三弾を楽しんでください。

原作似

第十三弾

A t t e n t i o n P l e a s e .

羽田空港第2ターミナルに着いた頃の俺は……もう、通信モ―ドに戻っていた。俺の推理が正しければ。

アリアはもうすぐ会ってしまふ。

誰に？

『武偵殺し』に、だ。

空港のチェックインを武偵手帳についた徽章で通り抜け、金属探知機なんか勿論通らず、ゲートに飛び込む。神崎・H・アリア。帰りたいければ帰れ。

だが、もう『武偵殺し』と戦ってはいけない。

『武偵殺し』が俺の兄さんを殺したのだとしたら………アリア、お前1人では、『武偵殺し』には勝てない。絶対に！

兄さんは強かった。誰よりも強かった。偉かった。そして賢かった。ヒステリアモードの俺より遥かに、桁違いに。

(アリア……！)

次は、額の傷だけじゃ済まないぞ！

殺される。

死んでしまふんだ、お前は！アリア！！今すぐ助けに行ってるからなッ！

俺はボーディングブリッジを突っ切り、今まさにハッチを閉じつつあるANA600便・ボーイング737-350、ロンドン・ヒースロー空港行きに飛び込んだ。

バタンツ。機内に駆け込んだ俺の背後で、ハッチが閉ざされる。

「……武偵だ！ 離陸を中止しろっ！」

俺が機内に駆け込んだことに目を丸くしている小柄なフライトアテンダントに、武偵手帳についた武偵徽章を突きつける。

「お、お客様！？ 失礼ですが、ど、どういう……」

「説明しているヒマはない！ とにかく、この飛行機を止めるんだ！」

フライトアテンダントはビビりまくった顔でコクコクと頷き、2階へと駆けていった。

その後を追いかけたいが携帯電話に入ってきたメールの震動により、その場で携帯電話を懐から取り出し、Eメールを確認する。しかし、そこには知らないアドレスが表記されていた。誰だ？ 思っている内容を見ると……『メールアドレスを変更したぜ！ 武藤だ』

…武藤のヤツ、空気読めよな。

思ったよりも体力が残っていたのは奇跡だな。強襲科を辞めてから体力が落ちていたかと思ったが最近また強襲科に顔出すようになったからかな。意外と息が切れていなかった。一応、機内の壁に凭れかかる。

ふう……とりあえずはこれで、離陸を止めることはできただろう。
……そう思った矢先。
ぐらり。

ANA600便・ボーイング737-350、ロンドン・ヒースロー空港行きの機体が揺れた。
動いて……いるだと!?

「あ、あの……だ、ダメでした。離陸を止めることはできないって、機長が……」

2階から降りてきたフライトアテンダントが、俺の所まで駆け寄り話しの結果を言ってくれた。

「……ば、バツカヤロウ……」

「……落ち着いてください」

こ、このバカ……!
どうする。

拳銃で脅すか……。

いや、ダメだ。きっと機長は俺を信用していないはずだ。今脅したら余計に信用を失うだけだ。

窓の外を見ると、ANA600便はもう滑走路に入ってしまった。いた。

今ムリに止めると、滑走路上で他の飛行機と衝突するかもしれない。

落ち着け、遠山キンジ。考えるんだ。

後手に回ってしまったのなら、後手なりの戦法があるはずだ。

――作戦を変えるしかない。

台風の影響で現在の東京は強い風が吹いていた。
そんな中での東京武偵高校では。

「おいッ！ その話 本当なのか！」

ガラッと教室の扉を開ける車輛科の優等生 武藤武偵。

「ああ、本当だ。まあ他の連中でも わかっていた話なんだけどな」

武藤武偵の問いに応えた黒髪に所々銀色のメッシュが少年。探偵
科二年の銀錠 空牙。

銀錠武偵はパソコンの液晶画面を武藤武偵に見せる。

『ANA600便に“ある”一人の男子武偵が入った』という内
容だった。

そして、その頃のANA600便・ボーイング737-350、
ロンドン・ヒースロー空港行きの飛行機は……

アリアの個室に案内してもらう。

この飛行機のキャビン・デッキは、普通の旅客機とは明らかに異なる構造をしていた。

1階は広いバーになっていて、2階、中央通路の左右には扉が並んでいる。

これは……この間、ニュースで見たことがあるぞ。

『空飛ぶリゾート』とか言われてた、全席スイートクラスの超豪華旅客機。

通常の飛行機なら座席だが、このスイートクラスの旅客機は座席ではなく高級ホテルのような12の個室を機内に造り、それぞれの部屋にベッドやシャワー室までも完備した、セレブ御用達しの新型機だ。

「……キ、キンジ!？」

綺麗なスイートルームで、アリアが、紅い瞳をまん丸に見開いた。
ふう。よかった。まだ生きてた。

まずは合流できた。

「よう、さすがはリアル貴族様だな」

「どうして、キンジが来ているのよ!」

「どうしてって……それは、まだ内緒だ」

アリアは座席から立って驚きを隠せずにいたためか動けずにいた。

「……なんでついてきたのよバカキンジ」

「太陽はなんで昇る？月はずいぶん輝く？」

「うるさい！風穴あけられたいの！？」

言葉（セリフ）をパクられてカッとなったのか……ばっ。ア

リアは臙脂色のスカートの裾に手をやった。

俺は内心安堵する。

よかった。滞銃してるんだな。

「武偵憲章2条。依頼人との契約は絶対守れ」

「……？」

「俺はこう約束したよな。強襲科に戻ってから最初に起きた事件を、一件だけ、アリア、お前と一緒に解決してやるって……」『武偵殺し』の一件は、まだ解決してないだろ」

「なによ……何もできなかったくせに！」

小さいライオンが吼えるようにアリアは犬歯を見せた。

「……“あの時”の俺は役に立たなかったかもしれない。だけど、無力な俺でもお前の、『独唱曲』のBGMになってやれるかもしれない……」

「……………キンジ。でも、もう遅いわよ」

ANA600便は強風の中を飛んでいるためか機体が揺れている。

「……お客様に、お詫び申し上げます。当機は台風による乱気流を迂回するため、到着が30分ほど遅れることが予測されます」

機内放送が流れ、600便の揺れが強くなった。

揺れ自体は、強いが、これだけの旅客機なら大したことは無かった。そう無かったのだが……

ガガン！ ガガン！

比較的近くにあった雷雲から、雷の音が聞こえてくる。

ガガガ……ン!!

ひととき大きな雷鳴が轟くと……アリアは目を丸くして、きゅつ、と首を縮めた。

「怖いのか？アリア」

「こ、怖いわけない。バツカみたい雷なんか怖くないわ」

と言った矢先に、また、ガガン!

「きゃっ!」

短く悲鳴を上げたアリアを見て、俺は苦笑いをする。

……双剣双銃のアリア様にも、苦手なものがあったのか。それが雷とはな。

「怖いなら、ベッドに潜っているよアリア」

「うつ、うるさい」

「チビったりしたら一大事だぞ？」

「バ、バ、バカ！」

ガガガン！！

「……うぁー！」

激しく響いた雷の音に、アリアは今まで以上にビビクビビクしていた。

もしかして本当にチビったのか？

「アリアー。替えのパンツ持ってるか？」

「バカキンジ！あ、あとで絶対風穴あけてやるから！」

ガガガ……ン！！ガガガ……ン！！

この飛行機、すごく雷雲の近くを飛んでいるな。
運が悪いのか、ただ機長がヘタなのか。

アリアはベッドの毛布に潜り込んでしまった。

「~~~~き、キンジい~~~~」

毛布の中から涙声を上げている、アリアの側に行く。すると彼女は俺の袖をつかんできた。袖を握っているアリアはか弱くて……普通の女の子に見えた。

そんな彼女は今、普通のか弱い女の子なら。
この震えている手に、手を添えてやって……

「アリア」

軽く握ってあげることができる。

「き、キンジ……?」

そう。

普通のクラスメイトとして。友達として。パートナーとして。
震えを和らげてやることぐらいは、できる。

何秒かためらってから、アリアの指が、俺の手を握り返そうとした時……

パン！ パアン！

- - 音。が機内に響いた。

今度のそれは雷鳴ではなく、俺たち（武偵高の生徒）が聞き慣れた音 - - それは……

銃声だ。

そこに - - -

ポーンポポーン。ポポーン。ポーンポポーン……。機内放送が流れる前の音が鳴った。

現在、雷鳴の中を運転中でヤガリます。この便ハハイジャックしましたデヤガリます。乗客は大人しくしゃガレです。武偵は例外でヤガレです。勝負してほしケレバ一階ノバーにきやガレです。

「…っ！ この喋り方。『武偵殺し』！」

赤紫色の目が、まんまるに見開かれる。そして、最後の決戦の幕が始まる。

俺たちは慎重に1階へと向かった。

1階に向かう最中の通路で俺はヒステリアモードの時に閃いたあの推理を伝えることにした。

「『武偵殺し』はバイクジャック、カージャックで事件を始めて、最終的にシージャックで、ある武偵を仕留めた。そしてそれは、おそらく直接対決だった」

「どうして、そんなことを」

「そのシージャックだけ、『武偵殺し』は電波を出さなかった。そしてヤツ自身が、そこにいたから電波を出す必要がなかったんだ」

兄さんが逃げ遅れた、というのもしももおかしいとは思ってはいたからな。

「ところが、今回からはバイクに変わってチャリ、自動車に変わってバス、そして船に変わって飛行機だ」

「……！」

「そしてヤツは、かなえさんに罪を着せ、お前に宣戦布告をした。そして、このハイジャックで直接対決をしようとしている」

「初めから、あたしが狙いだっただのね」

揺れる機内の1階へと続く階段を降りると……

バーのシャンデリアの下。

カウンターに、足を運んで座っている男がいた。漆黒の格好でだ。
！？

まさか『黒の疾風・紅い閃光』！！

拳銃を向けながら、俺たちは眉を寄せる。

彼は、あのバスジャックの時のように真つ黒の格好をしていた。

「Attention Please. でやがります。今回も、キレイに引つかかってくれやがりましたねえ」

と言いながら……ベリベリッ。

『黒の疾風・紅い閃光』はその顔面に驚きを隠せなかった……そう、紅坂だった。その紅坂の顔面に被せていた、薄いマスクみたいな特殊メイクを自ら剥いだ。

中から出てきたのは……

「理子!?!」

「Bon soir キンジ……それとオルメス」

理子に言われた単語に、アリアは硬直した。
オルメス？

それに、なんで理子が！？

「あんた……一体……何者……！」

眉を寄せたアリアに、にやりと理子が笑う。
その顔を、窓から入った稲光が照らした。

「理子・峰・リュパン4世……それが理子の本当の名前」

第十四弾 正体と武偵殺し（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会えた 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆
様。

どうも

阿良々木 雅です。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、第十四弾を楽しんでください。

第十四弾 正体と武偵殺し

「理子の名前は、理子・峰・リュパン4世」

……………リュパン？

リュパンって、あれか。探偵科の教科書に載っていた、あのフランスの大怪盗。

アルセーヌ・リュパンの曾孫だっというのかよ。

「でも……………家の人間はみんな理子を『理子』とは呼んでくれなかった。お母様がつけてくれた、このかわいい名前を、4世。4世。4世。4世様あー。って、どいつもこいつも、使用人どもまで……………理子をそう呼んでたんだよ。ひっどいよねえ」

「そ、それがどうしたってのよ……………4世の何が悪いってのよ！」

何故かアリアがハッキリと言ったその言葉に、理子は、

「- 悪いに決まってるだろ！！ あたしは数字か！？ あたしはただの、DNAかよ！？ あたしは理子だ！ 数字じゃない！ そう 峰 理子なんだ！！」

突然、キレた理子は、まるでこの場にいる俺たちにはない、誰かに対して、叫んでいた。ここではない、どこかに対して怒鳴っ

ていた。

理子……お前は……。

「曾お爺様を超えなければ、あたしは一生あたしじゃない『リュパンの曾孫』として扱われる。だからイ・ウーに入って、この力を得た！！」「この力」で、あたしはもぎ取るんだ！！あたし自身をツ
「！！」

何を言っているのか微塵も分からない理子の話を、アリアは深刻そうな面持ちで聞いていた。

「待て、待てくれ。お前は何を言っているんだ！？ オルメスって何だ！ イ・ウーって何だ！ 『武偵殺し』は……理子……本当に、お前の仕業だったのかよ！？」

「……うーん、うん♪そだよキンジい。あたしが『武偵殺し』だよでも、あんなのプロローグを兼ねたお遊び。本命はオルメス4世……お前だ」

途中まで俺に対して、いつもの理子の瞳だったのに、今の理子は、そのいつもらしさの眼ではなかった。

まるで獲物を狙う、獣の瞳だ。

「100年前、曾お爺様同士の対決は引き分けに終わった。つまり、

オルメス4世を倒せば、あたしは曾お爺様を超えたことを証明できる。キンジ……お前もちゃんと、役割を果たせよ」

「役割だと……！？」

獣の瞳が、俺に向けられる。

「オルメスの一族にはパートナーが必要なんだ。曾お爺様と戦った初代オルメスには優秀なパートナーがいた。だから条件を合わせるために、お前をくつつけてやったんだよ」

「俺とアリアを、理子、お前が……？」

「そっ」

理子は再びいつもの軽い調子に戻って、くふと笑った。
理子のヤツ。

ずっとバカ理子を演じていたのか。今まで、ずっと。

「キンジのチャリに爆弾を仕掛けて、わっかりやすうーい電波を出してあげたの」

「お前が、俺のチャリに！爆弾を仕掛けたのか！」

「そだよー。理子が爆弾を仕掛けましたー」テヘ。……………それにオ
ルメス4世。お前は『武偵殺し』の電波を追っていたからね」

「……………あたしが『武偵殺し』の電波を追っていることに気付いてい
たのね……………！」

少し理子は、にこやかに笑う。

「そりや気付くよおー。あんなに堂々と探偵科の優等生、違うか」
元強襲科の優等生、空牙や通信科の中空知と接触していたらねえ！。
でも、キンジがあまり乗り気じゃないみたいだったから……………バスジ
ヤックで引っ付けようとしたんだよ」まあ、バスジャックなんて、
所詮ダメ出しでやったことだけだねえ」

「バスジャックも理子、お前が！？」

「キンジい。武偵はどんな理由があっても、人に腕時計を預けちゃ
ダメだよ？それに狂った時計の時間見たら、バスや学校に遅刻しち
やうぞー？」

腕時計……………理子が温室でアリアについて詳しく教えてもらった
時。俺の背中を叩こうとして手首を叩き腕時計を落として壊したの

は、わざとだったのか。さらに依頼人だということをいいことに利用して。

そしてコイツは修理を口実に腕時計を持ち帰り、細工を仕込んだ。そのせいで俺はあの日、あのバスジャックが発生した日の朝AM7時58分のバスに乗り遅れて……。

「何もかも……お前の計画通りだったってワケかよ……！理子！！」

「んー。そうでもなかったよ」予想外のこともあったもん」チャリジャックで出会わせて、バスジャックでチームも組ませたのに、キンジがアリアとくつつききらなかったのは、計算外だったの。それと『黒の疾風・紅い閃光』が、まさかバスジャックを感じてUZIたちを撃ち落とすのも計算外だったよ。まあ、『黒の疾風・紅い閃光』のパートナーが中空知じゃ、感づくのも当たり前だけどね」だって『黒の疾風・紅い閃光』は、あたしたちと同じ学年で同じクラスメイト。キンジはさっきの理子の変装で気付いているでしょ？そう『黒の疾風・紅い閃光』の正体は……」

薄々感じていた答えに唾を飲み込む。

「……紅坂 黒霧だよ」アリアが探していた、ロシア系凶悪犯罪集団・『スヴェントヴィト』の構成員の大半を捕まえた武偵。最強と謳われた『黒の疾風・紅い閃光』、それがクロムンだよ」

クロムン。この名前は理子が黒霧に命名した理子だけが呼ぶあだ

名だ。

……『黒の疾風・紅い閃光』その正体が、紅坂だったなんて。その上、空牙から貰った資料の中に記載されてあった、かなえさんに罪を着せた恐れがある中の一つの犯罪集団が『スヴェントヴィクト』だ。

やはりアリアも探していたみたいだ。『スヴェントヴィクト』を……。何故ならアリアは目を丸くして驚きを隠せずにいたためだ。

「まあ、理子的に一番の計算外だったのがキンジ。お前だよ」

俺だと!?

「理子が“殺った(やった)”お兄さんの話を出すまで動かなかったのは、意外だったな」

兄さん。

「……………兄さんを、理子、お前が……………お前が……………!？」

兄さん。

俺の憧れで、尊敬する兄で、一番、俺が目指していた対象だった人。

その兄さんを、コイツが……………分かる。

頭に、血が上ってきたのが分かる。

これは俺、遠山キンジの弱点だ。

兄さんのことになると、俺は冷静でいられなくなる……

「ほらオルメス。パートナーさんが怒ってるよおー。一緒に戦ってあげなよー！」

理子・峰・リュパン4世！！ さすがは、大怪盗リュパン家の4世だな。

この話の内容設定もまた、お前の筋書き通りってわけかよ……！

「キンジ。いいこと教えてあげる」あのね。あなたのお兄さんは……
…今、理子の恋人なの」

「いい加減にしろ峰理子！！」

何かの糸が切れたかのように、俺はマットシルバーのベレッタ・M92Fを抜いて、その銃の銃口を理子に向ける。

こんな状態の俺にアリアは、

「キンジ！ これは挑発よ！ 落ち着きなさい！」

「これが落ち着いていられるかよ！」

これ以上、死んだ兄さんを侮辱するようなマネだけは、絶対に許せねえ！

衝動的に、俺がベレッタM92Fの引き金を引こうとした右手に力を込めようとした瞬間。

飛行機が、ぐらりと揺れて。

「！」

「おーららっ」

気がついた時には、俺の手から――ベレッタが消えていた。

ガシャン、ガシャ……と、虚ろな音を立てて、銃は俺の真後ろの床に壊れて散らばっていく。見えたのは、こつちに小ぶりな拳銃――ワルサーP99を構えた理子の笑顔だった。

「ノン、ノン。ダメだよキンジ。今のお前じゃ、戦闘の役には立たない」

うつとりと高説をぶつた理子を見て――その隙に、アリアが動いた。

それは、まるで獅子のように。

ぱんっ！ と床を蹴ったかと思うと、二丁拳銃を構えて襲いかかる。

常に防弾制服を着用している武偵同士の近接戦では、銃弾は一撃必殺の刺突武器になりえない。打撃武器なのだ。となるとモノを言うのは、総弾数となる。

理子の、あの広いスカートの中に、銃弾が20発でも30発でも

入るUZIや44マグナム弾が撃てる44デザートイーグルを隠し持たれていたら不利だが、ワルサーP99には通常16発までしか入らない。

対するアリアの銃、コルト社の名銃・ガバメントは7発。チェンバーに予め入れておくか、エジェクションポートから手で1発入れておけば、8発まで入る。

これが二丁あるから、最大16発。互角になる。
だが――

「アリア。二丁拳銃が自分だけだと思っちゃダメだよ？」

理子はカクテルグラスを投げ捨てると、その手で……
もう一丁、ワルサーP99をスカートから取り出した。

「！」

だが、もう、アリアが止まるわけにはいかない。
バリバリバリッ！ という音を上げて、アリアは理子を至近距離から撃ち始めた。

「くッ……このっ！」

「あはっ、あはははっ！」

アリアはガバメントを理子はワルサーを至近距離から、お互いを

撃とつとせめぎ合う。

武偵法9条。

武偵は如何なる状況に於いても、その武偵活動中に人を殺害してはならない。

その法を破らないため、アリアは理子の頭部を狙えない。

そして理子も・・・合わせているつもりか、アリアの頭部を狙わない。

まるで格闘技のように、アリアと理子の手が交差する。

バツ！ ババツ！

放たれる銃弾は、お互いの小柄な体を捕らえず壁に、床に、天井に、撃ち込まれていく。

「・・・！」

弾切れを起こした次の瞬間へと行動を移すアリアは、その両脇で理子の両腕を抱えた。

2人は抱き合うような姿勢になり、理子の銃撃が止む。

「キンジ！」

アリアに呼ばれたが、俺の身体は最早理子に向かって走っていたのだ。

ジャキッ・・・

俺は兄さんの形見のバタフライ・ナイフを、手のひらの中で回転させて開く。

シャンドリアの灯（ともり）によって、バタフライ・ナイフの刀身が赤く光る。

「そこまでだ理子！」

理子の首元にバタフライ・ナイフの刃先を向けて、身動きをとれなくしたが、

「双剣双銃……奇遇よね、アリア」

理子が笑い出しながら言った。

「理子とお、アリアは色んなところが似てる。家系、キュートな姿、それと……2つ名」

「？」

「あたしも同じ名前を持つてるのよ『双剣双銃の理子』。でもねアリア、アリアの双剣双銃は本物じゃない！」

しゅら……しゅるるつ。

笑う理子の、ツーサイドアップのテールの両方が、神話に登場するメデューサの髪のように、動いて……
シャッ！

背後に隠していただろうと思われるナイフを握り、アリアに襲いかかった。

「！」

一撃目は、驚きながらも避けたアリアだったが――
バンッ！

弾切れになっていたワルサーP99をいつの間にか弾倉を再装填していたであろう理子の、その拳銃が、鮮血を飛び散らせた。

「うあっ！」

アリアが――真後ろに、仰け反る。

至近距離……いや0距離での発砲と先程まで戦った至近距離での銃撃戦により防弾制服の一部部分が薄くなっていたのだろう、そこを理子はワルサーで撃ち抜いた。血が、紅く、紅く、ほとばしる。
アリアは易々と理子の蹴りで吹っ飛ばされ――俺の後ろの方に転がっていった。

「アリア！アリア！」

なんとか急所は免れていたが心臓に近い肩辺りを撃ち抜かれていながらも、アリアはその小さな手で強く握っていたガバメントを放さずにいた。

俺はアリアをお姫様抱っこで抱え、この場から逃げ出した。

「しっかりしろ！アリア！……傷は浅い！」

さっきのスイートルームに逃げ込んだ俺はアリアをベッドに横たわらせた。

俺は冷静になるために深呼吸をする。よく兄さんに深呼吸して落ち着けって言われたっけな。

…ふう。

俺は、武偵手帳に視線を移動させる。………武偵手帳に挟んであるペンホルダーに指を突っ込んで、そこから『R a z z o』と書かれた小型の注射器を取り出した。

「これなら！」

ラッツォとは、アドレナリンとモルヒネを組み合わせで凝縮した薬だ。簡単に言えば、気付け薬と鎮痛剤を兼ねた復活薬だ。

ただし、ラッツォは心臓に直接打つ薬だ。

そのため、アリアの小さな身体を包み込んでいるセーラー服の胸元を開ける必要があった。……よしッ！

アリアのセーラー服に手をかけ、胸元を露わにする。

トランプ柄の可愛い下着が露わにもなった。

綺麗な肌。その綺麗な身体を薄布一枚で守られている、愛らしい、女の子の胸も。

……ドクン！ と俺の胸が跳ね上がる。
こんな時に不謹慎も甚だしい。
でも、なんでこんなに隅々まで可愛いんだ。アリアは。

「アリア……！」

アリアの綺麗な白い肌に、震える指を乗せる。
小柄な胸に指を這わせ、胸骨を探し当てる。
そこから指二本分、上……そこが心臓だ。

「き、キンジ……」

今、意識が……霞んだような意識が戻ったのかアリアは俺の名前を呼んでくれた。

「大丈夫だ。俺が助けてやるよアリア」

優しく彼女の頭を、髪を愛でながら、右手に持った『R a z z o』の注射器のキャップを口で外す。

「アリア！ 行くぞ！」

アリアは、答えない。

一瞬戻った意識が無くなかったのだ。

もしかすると心臓も動いていないかもしれない。

アリア！

「――戻ってこい！！」

ぐさッ！

殴るように、注射器を突き立てた。迷うと失敗する。だから――
思いに、ぎゅっ　と薬剤『R a z z o』をアリアの心臓にブチ込む。
びくん　とアリアが痙攣した。

良かった。生きてる。生き返った。

アリア。本当によかった。

アリアは大きく吸った息を大きく吐き出した。

次第に呼吸を強めていく。

そして……

「――っはあ！」

がばっ！

勢いよく上半身を起こしたアリアは俺を突き飛ばした。

「き……キンジ！む、胸を！？なんで、こんな胸を見たがるのよ！ーイヤミのつもりか！ー小さいからか！ーどうせ！ー身長だって！ー万年１４２センチよっ！ーって、注射器！ーぎゃー！ー！」

混乱状態のアリアは花の女子高生とは思えない悲鳴を上げ、注射器を豪快に引っっこ抜きベッドから飛んだ。

「落ちてけアリア！ お前は理子にやられて……」

「り……理子……ッ！！」

服を乱暴に整えるのと、アリアはベッドの横にある机の上に置いてあった左右の拳銃を手についた。

そして、鬼の形相のまま、バランスの悪い足取りで部屋を出ていくとする。

まずいな。

ラッツォは復活薬であると同時に、興奮剤でもある。

薬が効きやすい体質なのか、アリアは正気を失っているようだ。

自分と理子の、戦力の優劣が判断できてない！

「待てアリア！マトモにやっても、アイツには勝てないぞ！」

俺は扉（ドア）の前に立ちふさがり、アリアの左右の拳銃を手のひらごと鷲掴みにした。

「そんなの関係ない！理子なんて、あたし一人で十分よ！」

アリアは俺に両手を握られたまま、牙のような犬歯を見せつけながら喚く。

「し……静かにするんだアリア！これじゃあ、理子に、気付かれる！」

「かまわないわ！キンジ！あんた、あたしのことなんかキライなんでしょ！？絶対そうよ！！」

……アリア。君は、どうすれば黙ってくれるんだ。

アニメ声で叫ぶこの口を、塞がねば。でも、アリアの銃を押さえるこの両手は絶対離せない。

これを何とかする方法は――。

……無くは、ないな。

アリアの弱点を突く、“最後の手段”がある。

だがそれをやってしまうと、俺は――

間違いなく、“ヒステリアモード”に、なってしまっただろう。

あの、辛い思い出と共にある、兄さんを破滅させた、ヒステリアモード。

誰にも、特に女には見せたくない、自分からは絶対なりたくない、あの自分。

けど、俺は約束したんだ。鳳凰院先輩と「アリアを救う」と！
決意を決める遠山キンジ！

「あたしはどうせ『独唱曲』よ！ あんたは、あたしのことなんか『大っキライ』なんでしょ！ あたし、バスジャックの時に、あの時みたいな能力（ちから）を出してくれると思っていたのに！ あんたは、あたしのことがキライだから、能力（ちから）を見せてくれなかったでしょ！ だから、きっと、あんたは、あたしのこと……」

アリア……

ごめんな。俺もお前の力になりたかった。

今からでも遅くはないよなアリア。

だから――

許せ！

「だからもういいのよ！ あたしのことキライならキライでいいのよ！ あたしのこ……」

喚くアリアの口を、俺は。

塞いだ。

俺の“口で”

「――！！」

赤紫色の瞳を、飛び出さんばかりにして驚くアリア。
恋愛沙汰の苦手なアリアは、俺の決意のキスに――
思った通り、完全に、固まってくれた。

黙るところか、両手の先まで固まっていた。

――ドクン！

桜の花びらみたいなアリアの口唇は、小さくて、柔らかく……俺
のよりもいくらか熱いその口唇が種火になって、こっちの全身へと、
火炎を広げていくのが分かる。――ドクン！ドクン！

体の中心がむくむくと熱く強張り、ズキズキと疼くような、この
感覚。

灼けたように熱いそこから、堪えきれず、何かがほとばしりそう
な気さえする。

――凄い。

こんなに猛烈なヒステリアモード……生まれて初めて、だ。

ぷは！

2人は口を離し、同時に息を継いだ。
短いようで、長いキスだったな。

「アリア……許してくれ。こうするしか、なかった」

「……き、きんじ、か、か……ぎ、あにゃ……」

ふら、ふらら、へなへな。

アリアが……その場にへたり込んだ。

「バ、バ、バカキンジ……！こ、こんな時に……なんてこと、す
んのよ……！ あたし、あたし、あたし、ふぁ、ふぁ……ファース
トキス、だったのに……！」

「安心していい。俺もだよ」

「バカ……！せ、責任……！」

涙目で俺を見上げ、脱力しているのか少し身体が震えているアリ
アに――

ヒステリアモードの俺は、屈んで、目線の高さを合わせてやった。

「ああ、どんな責任でも取ってあげるよ」

「……キンジ……！あんだ、まさか」

俺の声がさつきより遙かに落ち着き、低くなっていることに気付いたらしい。

アリアは何かを――おそらくチャリジャックの時の事を――思い出したような表情で目を見開いた。

俺はアリアの、耳元に静かに口元を寄せ囁いた。

「武偵憲章1条。仲間を信じ、仲間を助けよ。俺は、アリアを信じる。だからアリアも俺を信じてくれ。2人で協力して――」『武偵殺し』を、逮捕するぞ」

こうして理子との最後の勝負の幕が上がろうとしていた。

第十五弾 武偵憲章1条〈仲間を信じ、仲間を助けよ（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会えた 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』タグを利用している皆様。作者の皆様。読者の皆
様。

どうも

最近『緋弾のアリア』しか執筆していない
阿良々木 雅です。

今回は、オリジナルが入っています。

武偵殺し編はキンジが主役

この作品は二人の主人公。黒霧とキンジが主役。

緋弾のアリア〜運命を射す漆黒の魔弾〜の主人公 朱雀先輩と彩
先輩登場。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、第十五弾を楽しんでください

第十五弾 武偵憲章1条 仲間を信じ、仲間を助けよ

タンタンタンッ

と軽やかに廊下を走る少年が二人。

一人は身長190センチ近いツンツン頭が目立つ少年、武藤剛気。もう一人は身長175、9センチという微妙な身長が特徴的でありながら黒髪に所々銀色のメッシュが染って（はいって）いる少年、銀錠 空牙。

【武藤視点】

ガラッ

という音を立てて、俺と空牙は空教室（あききようしつ）に入った。

そこには、探偵科の生徒や情報科の生徒、謀報科の生徒に不知火と刺々森がいた。

「おい！本当か！アリアが乗った飛行機ANA600便がハイジャックされたって！！」

この訊きに頷きながら不知火が応えた。

「ああ本当みたいなんだ。通信科の中空知さんが無線を防除した。現在当該機は南関東上空を旋回中、犯人の目的は不明。ただ機内で複数の武偵が犯人と戦っているみたいなんだ」

複数？

ちよつと待てよ。

空牙から教えてもらうたために見せてもらったパソコンの液晶画面には……確か『ある男子武偵が乗り込んだ』って書いてなかったか？

「フー……複数か」

刺々森は灰皿に先程まで吸っていたであろうクールを灰皿の上で燃やして煙草ごと消した。さすがは発火能力者だな。

おっと、関心している場合じゃねえんだったな。

「複数か。アリア以外にも武偵が乗っていたのか」

と呟いた。

その呟きに、応える生徒はバスジャック時に受けた傷を隠すように鼻のてっぺんに絆創膏を貼っていた顔だけをこちらに向けるように首を後ろに向けた。

「いや、乗客名簿には他の武偵らしき名前は無かったよ」

「じゃあ、一体誰だ」

俺は左手の親指と人差指とで顎を支えるかのように触っていると

……

「二年生諸君。お困りのようだな。そんな迷える君たちに新情報を知らせてくれと紅坂から言われて来たぜ。なあ朱雀」

と言った人は、今雑誌で流行っているであろう髪型で黒髪に前髪の所々が赤いメッシュが染っている武偵高の三年生。夜桜 彩先輩だ。

その横に立っているのは、黒さえも包み込んでしまつくらいの黒髪と漆黒に透き通っている瞳をしている先輩。三年生の鳳凰院 朱雀先輩。

「……武藤たちが知りたい情報なはずだ聞きたいか？」

「はい！聞きます先輩」

二つ返事で応える俺。

今現在、銀錠はパソコンをカタカタカタカといわせ防衛省にハッキングをしている。

「情報は……ANA600便の離陸間際に俺たちと同じ制服を着た男子生徒が乗り込んでいる。そう、遠山だよ」

「本当ですか!？」

窓の外は悪天候になっていた。

キンジ…………

無事でいろよ…………

【キンジ視点】

あれからスイートルームに來た理子を逮捕しようと、アリアと共に拳銃で身動きを止めたのだが…………

理子の髪が動いた時に、飛行機の機体が大きく傾いた。

それから理子はスイートルームを脱兎の如くスイートルームから飛び出していつてしまった。

そう先程言つたように“おかしい”部分があるとは思っていた。

この飛行機ANA600便は理子に都合良く揺れすぎている。

アイツは、理子は恐らくあの髪の中にコントローラーを隠し、遠隔操作しているはずだ。

ANA600便は、台風の雲の中を、恐るべき勢いで降下している。

こんなに高度を下げてどうするつもりだ。乗客たちの悲鳴を聞きながら廊下を走り、階段を降りると…………

理子はバーの片隅で、窓の近くの壁に背中をつけるようにして立っていた。

「どこへ行くっていうんだい、仔リスちゃん」

さっきアリアをお姫様抱っこして逃げ出した時に言われた理子のセリフを返してあげながら、俺はベレッタの銃口を向ける。

「キンジ。それ以上は近づかない方がいいよー？」

にこやかに笑う理子。

壁には理子を取り巻くようにして、丸く輪のように粘土状のもの……恐らく、爆薬が貼り付けられてあった。

「ご存じの通り『武偵殺し』は爆弾使いですから」

俺が歩みを止めたのを見て、理子はスカートをちょこんとつまんで少しだけ持ち上げ、慇懃無礼にお辞儀してきた。

「ねえ、キンジ。イ・ウーにこない？キンジ1人くらいなら大歓迎だよ。それにイ・ウーにはお兄さんも、いるよ」

また、兄さんのことを……

「理子。頼むから、これ以上……怒らせないでくれ。武偵法9条を

破りたくない」

武偵法9条。

武偵は如何なる状況に於いても、その武偵活動中に人を殺害してはならない。

それが武偵法9条だ。

「それはマズいなー。キンジには武偵のままでいてもらわなきゃ」

理子は自身の両腕で自身の体を包み込むように抱きしめるような姿勢を取り――

「じゃ、いつでも待ってるよ、あと、イ・ウーからのプレゼントがあるらしいよ」

ドウツッ！――！

いきなり、壁に仕掛けていた炸薬を爆発させた。

「――！！」

壁に、丸く穴が開く。

理子はその穴から機外に飛び出ていった。勿論、パラシュートも無しで……

強風によってバーにあった諸々の物が、窓の穴から吸い出されていく。

紙や布。グラスや酒のビン。そして――俺自身も 俺は強風に煽られながら手近な窓にしがみつこうようにして、外を見た。

僅かな月明かりの差す、そこには――

くるくるつ、と宙を踊るようにして遠ざかる理子が見えた。 ぱつ。 理子が着ていた改造制服のリボンを解くと、パラシュートになっっていくのが見える。

最後に見えたのは、下着姿になった理子がこっちに手を振りながら雲間に消えていく姿だった。……なるほど。そのためだったのか、機外に脱出するつもりだったから、高度を下げて脱出しやすかったのか。

「――！？」

その理子と入れ違いに――

この飛行機めがけて、雲間から物凄い速さで飛来する2つの閃光（ひかり）があった。

ヒステリアモードの瞳が、それを捉える。

バカな……。

そんな筈はない……。

……ミサイルだと。

ドドオオオオンッ！！

轟音と共に、今までで一番激しい振動がANA600便を襲った。突風や高度を急激に下げた揺れとは明らかに違う。機体を巨大なハンマーで2発殴られたような衝撃。悪夢を見たかのような振動を受けながらもANA600便は、何とか持ちこたえていた。

翼は2基ずつある左右のジェットエンジンのうち、内側を1基ずつ破壊されていたが、外側にある残りの2基は無事だ。

血のような煙の帯を引きながらも、辛うじて飛んでいる。

急ごう、アリアに任せている操縦室に！！

「――遅い！」

操縦室に遅れてやってきた俺に振り返りつつ犬歯をみせて叫んでくる。

アリアの足元辺りには、セグウェイの銃座やルノーの銃座にも似た機械が転がっていた。

恐らく、遠隔操作するために仕掛けていた機械なんだろう。それをアリアが銃か何かで外した残骸へと成り下がっていた。アリアはその小さな体を操縦席に収めると、ハンドル状の操縦桿を握る。

「アリア、飛行機の操縦経験はあるのか？」

「小型ジェット機ならね。こんな大きなジェット機なんて飛ばしたことないわ。でも上下左右に飛ばすくらいは、できるわ」

「それだけで充分だよアリア」

ゆつくりとアリアの頭を優しく撫でた。

「バ、バカキンジい」

照れながらアリアは大胆に操縦桿を引いた。

それに呼応して、ANA600便は目を覚ましたように機首を上げ、機体が水平になったのが分かる。

現在高度は、おそらく1000メートル以下ぐらいだろう。俺はもう片方の操縦席に入ると無線機を探し当て、インカムからスピーカーに切り替えた。俺は、計器盤に備え付けられたマイクをONにする。

「……羽田コントロール。応答してくれ。こちら600便」

『……こちら航空自衛隊関東方面司令部……600便か』

「自衛隊？」

俺の声が聞こえているようで、相槌をうつかのように『そうだと返答がきた。』

まあ、とりあえず通信は繋がったようだ。

『……そちらは現在、当司令部の監視下に入っている。600便状況を知らせよ』

「ハイジャック犯はパラシュートで逃走した。乗客は無事だ。パイロットが負傷しているため現在乗り合わせた武偵二名が操縦している。俺は遠山キンジ。もう一名は、神崎・H・アリアだ」

『……よくやった遠山武偵。次の指示を待て』

と、自衛隊の通信が切れた。俺は切れたのを確認して懷にしまっておいた物を取り出した。

「キンジ、それは？」

「衛星電話だ。さっき別の乗客から借りてきた」

俺は喋りながら乗客から借りてもらったといった衛星電話の番号を押していく。

衛星電話とは船舶通信などにも使われるもので、人工衛星を介し、

およそ地上のどこからでも、どんな速度で飛んでいようと、電話回線に接続できる便利物だ。

コールを始める。

誰に電話してるの？と聞いてきたアリアに、軽くウィンクをし、新たに繋がった声を確認する。

『……もしもし？』

「俺だよ武藤。ヘンな番号からすまない」

『キ、キンジ。キンジなのか！？』

「ああ、事情があつて現在は東京上空で飛行機を飛ばしている。ハイジャック犯には逃げられたが」

武藤剛気。車輛科の優等生。友達は役に立つ時が来ると兄さんが言っていたが、やっぱりその通りだな。

『そうか。キンジ、無事なんだな？』

「ああ、“俺とアリアはな”600便のエンジンを2基やられた以外は乗客も無事だ」

『エンジンを!?!』

この反応さすが乗り物オタクな武藤がしそうな反応だな。

『キンジ。お前、燃料計は読めるか? 燃料計の場所はEICAS
- 中央から少し上についている四角い画面で、二行四列に並んだ
丸いメーターの下に、Fuel書かれた三つのメモリがある。そ
の真ん中、Totalってヤツの数値だ』

……すごいな武藤。

こういうところは純粹に尊敬するぜ。

「- -今は、240だ。235……232、どんどん減ってる」

俺の応答に、武藤が舌打ちするのが聞こえた。

『くそつたれ……羽田コントロールは何してやがったんだ! チツ、
キンジよく聞け! やっぱ燃料が盛大に漏れてやがる』

「っ!」

アリアが目丸くして驚きを隠せずにいた。

「武藤、600便は後、どのくらい、もつ？今、230を切った」

『……言いたかないが……よくて……10分つてとこだ』

「フっ……言いにくいことをハッキリ言っぜ」

『それでキンジ………ザアア………』

突然、武藤からの連絡が切れた。いや、介入された？

『……こちら、航空自衛隊関東方面司令部。600便、応答せよ』

【武藤視点】

「チッ、こっちにも妨害が入ったか」

現在、東京武偵高校空教室。俺は、先程までキンジと連絡をとっていた黒と紺色の折りたたみ式携帯電話を舌打ちしながら閉じる。

「どうやら、政府は徹底的に600便を孤立させるつもりらしいな。未だにマスコミで報道されてないようだからな」

と人差し指と親指とで顎を支えるように触っている東京武偵高校最強の先輩。鳳凰院 朱雀先輩が告げた。よく見れば彩先輩とテレビに報道されているかの確認をしてくれていたみたいだ。

「けど、なんのために！民間機がハイジャックされてたんですよ！」

「……落ち着け武藤」

焦っていた俺の肩を軽くポンポンと叩いてくれた朱雀先輩。そんな中、東京武偵高校で使用される通信機から声が聞こえてきた。

『こちら、強襲科の紅坂。現在は通信科の中空知 美咲と一緒に自衛隊無線の防除に成功しました。――続きは中空知が報告いたします』

プツンと、通信が切り替わる。

『こちら、通信科の中空知。紅坂君の言っていた通り、自衛隊無線の防除に成功しました』

やっぱり綺麗な声だな。

中空知さんのオペレーションは、いつも完璧っていう噂がある。何よりも、言葉の発音がNHKのアナウンサーみたいに綺麗だとは聞いていたが、本当に綺麗だな。

『防除した結果――政府の見解は墜落、或いは着地の失敗によるリスクを考え、600便の羽田、成田への着陸は認めず――関東近海の太平洋上に不時着させる方針をとり、もし――600便が従わない場合は――洋上での撃墜もやむなしと――』

空教室がざわつき始めた。

クソッ！政府のヤロー！！

そんなことを思いながら、壁を殴っていると通信機から中空知さんではない、声が聞こえた。そう紅坂だ。

『――こちら強襲科の紅坂。みんな聞こえているか。ここは俺たちに任せてくれ――空牙！鋭時！お前たちは、防衛省の裏ルートをハッキングしてくれ――後は、こちらでなんとかする――』

そう言って通信は切れた。

カタカタカタッ

先程まで、のんびりと煙草を吸っていた刺々森と、飴を舐めていた銀錠が紅坂の指示通りに動き始めた。

『……こちら、航空自衛隊関東方面司令部、防衛省直属管理局だ』

自衛隊からのスピーカーから野太い声が聞こえてきて、俺とアリアは顔を見合わせた。

防衛省直属？

そんなものがあるのか？

『……繰り返す。羽田、成田滑走路は現在トラブルにより使用不能。現在地より右方向に旋回し、太平洋上に針路をとれ。自衛隊機が安全確実に不時着できる場所まで誘導する』

「キンジ……ここは従いましょう」

と言ったアリアはANA600便の操縦桿を右方向……海上に傾けようとしていた。

その小さな手を上から包み込むようにして俺は握って止めさせる。

「キンジ？」

ゆっくりと首を横に振り応える。

「海の上に安全確実に不時着できる場所なんかない」

『・・・その通りだ。よく知っていたなキンジ』

無線機のインカムからスピーカーへと切り替えた先から聞こえてきた声……この声は、まさか黒霧か！

『なんだ、どうやって割り込んだ！まさか貴様等、武偵ごときが、防衛省にハッキングしたとも言うのか！！』

……本音が出た航空自衛隊関東方面司令部の指示官は怒鳴っていた。

そこに、

『その、まさかでヤガりますよ。』。アンタらの考えなんて俺たちには見え見えでヤガりますよ。』

探偵科の優等生、銀錠 空牙の声が聞こえてきた。

『貴様等！ 武偵ごときが防衛省にハッキングしていいと思っているのか！』

『――政府どもは黙っている！キンジ！よく聞け！ 政府も自衛隊も、とつくに600便を見捨ててる！羽田、成田のトラブルつても嘘だ！お前等の命よりも着陸するリスクの方がデカいからな。従わなければ――撃墜もやむなしだってよ！』

……やはり嘘だったのか。

にしても武藤と銀錠。お前ら政府に喧嘩売ってどうするつもりだよ。

まったく。

にしても……

「撃墜！？」

『そつだ！撃墜だ』

隣で操縦桿を握っているアリアの顔色が驚愕に染まっていく。すると……スピーカーから、武藤の声が聞こえてきた。

『――聞け！政府ども！武偵は武偵を見捨てない！俺たち、武偵は

一般市民だけじゃなく、武偵のキンジたちも助けたいんだ！」

「武藤」

「……不穏な気配があった横の戦闘機が去っていくのが、わかった。」

先程まで、ANA600便のすぐ脇に、F-15Jイーグル。航空自衛隊の戦闘機が、ピッタリと、貼りついていたのだ。

「なあ、武藤。この飛行機なら何メートルあれば着陸できる？」

『風向きにもよるが……2000メートルちよつとは必要だな』

「……ギリギリだな」

低く呟いた俺に、アリアは視線をこちらに向けながら操縦桿を握っている。

「ギリギリって？」

「学園島の人工浮島は、南北2キロ、東西500メートル。対角線上に降りれば2061メートルまで取れる」

『お、おい、キンジ、お前、まさか……………』

「安心しろ。『学園島』に降りるわけじゃない。『空き地島』の方だ」

『だがキンジ。あそこ【空き地島】は何もない、ただのただっ広い空き地だぞ。それに、この天候だ。島の輪郭すら見えねーぞ。それに『空き地島』は雨で濡れてる！2061メートルじゃ停止できねえぞー！』

「……………なんとかするよ」

『……………お前……………くそつたれ！どうなっても知らねーからなッ！』

と叫ぶと、武藤はキレたのか、教室のみんなに何やらわーわと怒鳴り、通信を切ってしまった。

燃料計が124になった。

さあ、やっと東京湾が見えてきた。

人工浮島も、もう見えていいハズだ――
――が。

『空き地島』が、まるで見えないのだ。
武藤が言った通り、汐留を境に、東京湾は暗闇の世界に包み込まれている。

分かっていたことだが、まさか、ここまでとは。

でも、俺はアリアや乗客を救い出したい――！！

こんな状況じゃあ、たとえベテランのパイロットでも惨事は免れないだろう。

だが、これだけは伝えよう。

「アリア。俺はキミを死なせたくない。だが、最悪の場合も考えておいてくれ」

今度は操縦桿を握っていた俺の手を、その小さな手が置かれた。
言うまでもなくアリアの手だ。

「キンジ。あんたにならできる。あんたは、できなきゃいけないの。武偵をやめたいなら、武偵のまま死んだら負けでしょ。あたしだってまだ、ママを助けてない――！！」

アリアの言葉が、折れかかっていた心を支えてくれた。

「あたしたちはまだ死ねないのよ！　こんなところで、死ぬわけがないわ！」

アリアの言葉が終わると同時に、それは……まるで、魔法の
ように……

キラ……キラ、キラ、キラ……と。

ベイブリッジの手前にある『空き地島』の上に光が見え始めた……

『おい！キンジ！聞こえるか？お前が死ぬと、白ゆ……いや、泣く人がいるからよオ！オレ、車輛科のモーターボートも、装備科のデカイライトも、無許可で持ち出してきちまったんだからな！』

武藤の電話回線が復活し、ビシャビシャという大雨の音と強風の音と共に声が聞こえている。

そして武藤は言葉を紡ぐ……

『無許可で持ち出しきちまったんだから！絶対着陸しやがれ！そんなアリアと一緒に無事で帰って来い！お前らは、俺たちにとって最高の仲間なんだからな！』

武藤。

アリアが泣きそうになっているぞ。

まったく、いいことを言いやがるぜ。

武藤たちは空き地島に、誘導灯を作ってくれたのだ。
その気持ちに込めるぜ武藤！

――武偵憲章1条。

仲間を信じ、仲間を助けよ。

俺は高度を丁寧に下げていく。武藤たちが示してくれた、平面まで――

ザシャアアアア――！！

ANA600便は、雨の人工浮島に着陸を敢行した。武藤の言うとおりだった。雨の滑走路、つまり人工浮島では止まりきれない。だが、手はある。迫ってくる。

風力発電の……
風車の、柱が――！！

ガスンンンッ！！

翼に風車の柱をブチ当て、引っかけて、600便はグルリとその機体を回すように滑らせながら――

600便は『空き地島』の風車の、柱で停止した……

第十六弾

俺がパートナーに〜La bambina da I ARIA

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会えた 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆
様。

どうもですね

深夜ですね現在深夜1時40分です。

阿良々木 雅と申します。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、第十六弾を楽しんでください。

まずはとにかく病院で泥の中に嵌っていたかのように眠り、目が覚めたら何もかも夢のようだった。

……というオチになることを期待していたんだが現実世界様はそうさせなかったみたいだ。何故なら身体のおちこちが痛い。全身12カ所に打撲傷・擦過傷・捻挫とくればそりや痛いよな。これが夢じゃない、漫画や小説や映画のようにはいかない現実世界ってヤツなんだろうな。

今現在は――

静かな俺の部屋のベランダから、東京の景色が見えている。『空き地島』の風力発電機は一本ひん曲がり、その下では解体前のB737-350がぐつてりしている。

ちよつと気に入ってた景色を、自分で壊してしまうなんて……。

「ここつて、こんなにいい眺めなのね」

「ああ、俺のお気に入りの景色だ。特に夜景は綺麗だぞ」

と笑顔を見せた。

アリアと俺は程よく心地良い暖かさな太陽の下、ベランダで少し話し合っていた。

昨日は警察の事情聴取やらテレビの取材や教務科の蘭豹にまで訊かれるやらで大変だった。今はなんとかこの部屋でのんびりできている。

「キンジ。その、ママの……公判が、延びたわ」

空き地島に視線を向けながら、アリアが言う。

「今回の件で『武偵殺し』が冤罪だったって証明できたから……最高裁、年単位で延期になるって弁護士が言っていたわ」

「そうか。よかったなアリア」

さすがにおめでとう、という空気でもないので、俺は一応『よかったな』と、それだけ返す。

アリアは翼の折れたB737を見てから、くいと俺の方を向いた。

「ねえ。あんた、なんで……あの飛行機に、あたしを助けにきたの？」

……なんで、って。

そんなこと……

訊かれても……。

俺にも分からないことだぞ。……。

「『武偵殺し』には1人じゃ勝てないと思ったからだよ」

「あのくらい……あたし1人でもなんとかできたわよ」

「……そっか」

俺はベランダの柵に肘をついて、深あーい溜息をついた。

するとアリアはその大きな瞳を瞬かせて、少し言いよんどから

……

「キンジ……ゴメン、今のウソ」

「どれが？」

「1人でもなんとかできた、って言ったこと」

溜息混じりに言うと、アリアは珍しくモジモジとした喋り方になった。

「やっぱり、あたしには『パートナー』が必要なのか。自分1人じゃ解決できないこともあるってわかったわ。あんたがいなかったら、きつと、あたし………」

「……」

「……だから今日はね、お別れを言いに来たの」

「……お別れ？」

「やっぱり、パートナーを探しに行くわ。ホントは、キンジ……あんたか朱雀がよかったんだけどね……それに理子が言っていたことも真実かどうか、まだわかってないからでも、あの時した約束があるから」

「約束？」

「1回だけ、って約束したでしょ」

「ああ、あれか……」

そういえば、そうだったな。俺が強襲科に戻り、アリアと組むのは……1回だけ。

武偵殺しの件が、片付くまで。

「武偵憲章2条。依頼人との契約は絶対守れ。だから、もう追わな

いよ」

アリアは…… もじり、もじり、と。

言おうか言うまいか何度か迷ってから、また改めて、俺を真っ直ぐ見つめてきた。

「……キンジ。あんたは立派な武偵よ。だからあたし、今はあなたの意思を尊重するし、もう…… 奴隷なんて呼ばない。だから…… もし、気が変わったら…… その、もう一度、会いに来て。その時は今度こそ…… あたしの、パートナーに………」

まだ諦めきれないらしいアリアの申し出に、俺は……

「……………アリア、悪い」

と、つい目を逸らしながら言っていた。

俺は、武偵になる気はある。ただ勇気と度胸がないだけなんだ。兄さんのことも、あるからな。

「い、いいのよ。あんたにその気がないのなら。いま言ったこと、忘れて」

そう言つとアリアは俺に背を向け、玄関まで行き靴をはく。俺はアリアを玄関で見送るため、ベランダから室内へ戻った。

「そんな急いで、なんか約束でもあるのか？」

「……うん。お迎えが来るのよ。あんなこともあったし……ロンドン武偵局が、東京に置いてあるヘリで送ってくれるんだって」

ロンドン武偵局。

そこは、アリアが武偵として活躍していた場所だ。

「帰る……ロンドンに、か」

「うん。ヘリでイギリス海軍の空母まで行って、そこからジェット機で帰るのよ」

軍の空母か……。すげーな。やっぱりリアル貴族だな。

「……アリア。見つかるといいな。お前の、パートナー」

「ええ。きっと見つかるわ。あんたのおかげで『世界のどこにもいない』ってワケじゃないことが分かったし」

「そっか……。そうだな。頑張れよアリア」

「うん。バイバイ」

アリアはあっさりと扉（ドア）を開き……外に出て。
俺はそれを止めることもなく。
扉（ドア）は、再び閉まった。

【東京武偵高校男子寮前】

「……うう……」

ツインテールピンク髪の彼女の名は 神崎・H・アリア。
キンジの部屋から出て行った彼女は男子寮前の歩道で……

「ひつく……やだよ……イヤだよキンジ……いないよ……あんた
みたいなヤツ……絶対いない。もう、見つかりっこない……よ……」

ぼろぼろ 流れる涙を手の甲で必死に拭う彼女は、そんなことを
呟いていた。

俺は机の上の携帯電話についたレオポンが視界に入った。

アリア……

もう既に、二つに破っている転出申請の書類をゴミ箱に入れ、レオポンを掴む。

アリア……

アリア。アイツは台風みたいにいきなり現れて、俺の日常を滅茶苦茶にして、俺の性格を少し変えてくれた。けど、また風のように去っていったアリア。

勇猛果敢に戦うアリアは……小さな肉食動物かと思ったことがあった。

でも、あいつは肉食動物なんかじゃない。

迷子の 子猫なんだ。

家から飛び出してきて、どこへ行けばいいのかわからず、誰も味方してくれなくて、烏や野良犬と戦って、もうどうしていいかわからなくて、傷だらけになってさ迷っている……

子猫なんだ。

「アリア……」

俺は、レオポンをぎゅっと強く握りしめた。

アリアが自分の母親、かなえさんを助けたのなら『武偵殺し』だけじゃなく他の敵とも戦わなきゃいけないんだろう。

この小さな世界で、戦って、戦って、戦って、傷ついて……。それでいいのか？

俺も、あいつと同じ、遠山家の欠陥品。

ある日、白雪に言われた『正義の味方』……………。

俺は“正義の味方”になんか、なれない。

でも、な。

アイツの……アリアの味方ぐらいになら、なれるかもしれない。
俺は勢いよく部屋を飛び出していった。

武偵高の女子寮の屋上へと走った。

階段を駆け上がって、駆け上がって、駆け上がって、息が切れる。
汗が、流れる。息切れする俺の呼吸。

くそッ！

あと15段だ！

遠山キンジ！！動け！動かすんだ！その足を、身体を！！
止まるなッ！

アリアを、守ってやる。そんな男になるんだろ！

遠山キンジ！！

だから！もう少しの間だけ、動いてくれ！

もう少しだけ、走ってやることのできる体力を！

ばんッ！

と開け放った扉（ドア）の向こうでは……、一足遅く……

……ヘリがちょうど、轟音と共に10mほど屋上から飛び上がって
しまっていたところだった。

「アリア！！」

叫ぶ。

もう、何も考えずに。

叫ぶ！

「アリア！ アリア……っ！！」

息切れする咽で。

その咽が張り裂けそうなほどに、叫ぶ。

人生最大の大声で、叫ぶ！

「アリア………ッ！！」

ヘリの回転翼から吹き下ろしてくる突風に、髪が乱れる。

剥ぎ取られそうな勢いで、服が、ズボンが、バタバタと風に音を立てて震える。

ヘリの音で、俺の声は聞こえてなんかいないだろう。

でも！叫べ！

アリア！ アリア！ アリア！

がらん！

ヘリのスライド扉が、ビックリするほど勢いよく開いて。

「――バカキンジ！ 遅いわよ」

そこから顔を出したアリアが、なんと、そのまま――！
飛び降りてきた！

はぁ……

まったく、アリア。

お前は……

あの時と同じじゃないか。

――空から女の子が降ってくると思うか？――

俺が『武偵殺し』にチャリを乗っ取られた時。

アリア、キミは俺のために飛び降りてきて、くれたよね。

こうして

二回目の・・・

L a b a m b i n a d a I・A R I A

抱きしめたアリアを見ながら、俺は思う。

・・・なあ。アリア。

俺は、お人好しなのかな？

でも、一つだけ判ることがある。

俺は、アリア、キミのおかげで変わることができた。少しだけど
な。

こうして

俺とアリアの物語が始まる。

遅くてもいい……

ゆっくりと……

物語の歯車は……

動き出す………

- - 心で叫ぶ。

次の、物語のために - -

G
O
F
O
R
T
h
e
N
E
X
T
!!
!!

再装填弾 武装巫女とHの名（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会えた 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆様。
様。

最近、執筆絶好調の
阿良々木 雅です。

今回は新章に向けてのため、弾丸をつめるということで『再装填弾』
となっております。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では『再装填弾』を楽しんでください。

再装填弾 武装巫女とHの名

あれから、俺は部屋に戻ってきた。

勿論、アリアも一緒に。ふかふかなソファアの上でゆったりと座り、俺が買ってきたももまんを頬張っているアリア。

…可愛いな。まったく。

ただ、ちよつと頬張り過ぎだぞアリア。

そんな彼女を見ながら、俺は一つ気になることを質問してみた。

「なあ、アリア。お前の『H』って、どういう意味なんだ？理子はオルメスって言うてたけど」

はむはむ？……ひょっと……まっひて……と言って、ももまんを飲み込んだ。

「あ……悪い。ゆっくり食いたかったか……」

「いいわよ。キンジがこんなにももまんを買ってくれてたんだもん」

上機嫌なアリア。

なんか見ていて落ち着くな。あ……ははっ。

少し心の中で笑う。ももまんの餡がアリアの小さな口唇で喋り始める。

ちなみに、ももまんは安売りしていたので沢山買ってきたのだ。

「そうね。じゃあ、改めて自己紹介をするわ」

ソファアの上に立ち上がり、両手を腰にあて、その寄りも上がりもしない胸を張った。

「神崎・ホームズ・アリアよ」

「ほーむず？って、あのシャーロック・ホームズか？」

「さすが、キンジ。冴えてるわね。そうよ。あたしはシャーロック・ホームズ4世よ！もう逃がさないからねキンジ」

楽しく微笑んでいる彼女の名は神崎・H・アリア^{ホームズ}。お茶を啜っていたのは俺。遠山キンジ。

こうして、また彼女のことを知ることができた。

シャーロック・ホームズ。100年ほど前に活躍した、イギリスの名探偵。拳銃の名手で格闘技の達人らしい。

そしてシャーロック・ホームズの好敵手になっていたらしい。フランスの大怪盗リユパン4世。

初代ホームズと怪盗リユパンはフランスで戦っている。この戦いは有名だ。

そして、この勝負は引き分けに終わったまま、一族に遺恨を残し

た――と、探偵科の教科書に書いてあった。
まあ、『オルメス』ってのはフランス語らしい。そりゃわからん
わな。

俺の東京武偵高校の学園生活は新たな心境と共に始まり出す……
はずだったんだけど……最悪な展開になることを、まだ俺は知る由
もなかった。

アリアに謝ったり、笑い合ったりしていた、“とある夜”――
ん？なんかズボンから震動が……携帯か？
ポケットに入れていた俺の携帯電話から、Eメール着信音が上が
った。

この部屋は微妙に電波状況が悪く、たまにだがEメールが送られ
てから着信するまで少し時間がかかったり、後でまとめて来たりす
るねだが……俺はケータイの液晶画面を見て、俺はギョツと
する。現在の未読Eメール：300件。留守番電話サービス：録
音35件。

そこには――

『キンちゃん、女の子と同棲してるってホント？』

に始まり――

『さっき恐山から帰ってきたんだけどね、神崎・H・アリアって女の子が、キンちゃんをたぶらかしたって噂を聞いたの！』

『どうして返事くれないの？』

『すぐ助けに行くからねキンちゃん様』

と、この30分の間に白雪からのEメールがコワイものに進化していく様が見てとれる。

「ア、アリア、に、に、逃げろッ！も、もしくは隠れろッ！」

「？ど、どうしたの？ガクガク震えて。寒いの？キンジ」

「ち、ち、違うッ！ぶぶ、『武装巫女』が！ま、マズい！この殺気……………来た……………！」

トトトトトトトト……………！！

闘牛か何かが突進しているかのような足音が、マンションの廊下に響き渡っている。

来る！

きつと来る！

近づいて、い、る……！

しゃきん！！

金属音と共に、玄關の扉（ドア）が冗談のように斬り開けられた。

そこに仁王立ちするのは……

巫女装束に額金、たすき掛けという戦装束に身を固めた……

俺の幼馴染み。

名を、星伽 白雪。

ここまで猛突進してきたらしい白雪は息をゼーゼー切らせながら、ぱっつん前髪黒髪の下の眉毛をギギンツとつり上げている。

「やっぱり……いた！！神崎！！H！！アリア！！」

「ま、待て！ 落ち着け白雪！」

「キンちゃんは悪くない！ キンちゃんは騙されたに決まってる！」

・・・どこにスイッチがあるのか分からないヤツだよ。そう白雪はこうやって、ときどきなげか鬼神のようなバーサーカーになることがある。

そしてこういう時、なぜか俺の周囲にいる人間――大抵、女子が攻撃対象として攻撃を受けるのだ。

「この泥棒ネコ！ き、き、キンちゃんをたぶらかして汚した罪、死んで償え！！」

白雪は携えていた青光りする日本刀を　ぎららりと大上段に構える。

それは、まるで時代劇のように……

「やつ、やめろ白雪！　俺はどこも汚れてない！」

「キンちゃんどいて！　どいてくれないと、そいつ（（アリア））殺せない！」

「き、キンジい！　なんとかしなさいよ！」

なんとかしなさいよ、って……！ 俺には無理だ！
なんで、こんなことになったんだよ！

はあ……

……でも、いいよな。

こんな賑やかな日々でも。

こんなトチ狂った高校だけど。

もっと楽しもう。

この生活を……

さて、ひとまずは、アリアと白雪の戦いをやめさせるかな。

第零弾 一つの剣（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会えた 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』タグを利用している皆様。作者の皆様。読者の皆様。
様。

どうも本当に個人的、最多連続投稿中の阿良々木 雅です。
今回から新章に入ります。

新章はF a t eを引用しております。聖杯戦争ではなく宝王剣戦争
になっております。『令呪』はまんまです。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、新章第零弾を楽しんでくださいな。

第零弾 一つの剣

西暦1826年 - - -
から二年前 - - -

とある争いの話をしよう。

一つの剣が誕生した。誕生した故に争いが起きていた一つの剣の物語を。

その剣は美しいかった。

この世の誰もが美しいと思わせるほど、血で汚れていない伝説の剣。

だがその剣は汚れた。

そう……血で。

一度血で汚れた剣は血で血を洗うかのように……

その剣を一番初めに手をした者は、一人の魔術師を殺した。す

ると、その剣は血を求めていたのか……一人の願いを一つ叶えた。

この世の最強の者だけの願いを叶える力を持っていた。

それ以来、その剣を求めて争いが起きた。

剣の名を『宝王剣』。

争いの名を『宝王剣戦争』。

西暦1826年 - - -
から20年後 - - -
西暦1846年 - - -

『宝王剣』は神秘学の語るところの、現実世界の外側、つまり次元論の頂点にも立つ“力”があるという。

『宝王剣』は神なのだ。

あらゆる出来事、願事を叶えることができる。それは、すべての魔術師の悲願たる『不老不死』『暴王』など……または、世界の全てを創造できる神の座を手にしたい者もいた。

そんな“世界の王”のような願いを叶える最強へと到る試みを、およそ20年前から、『宝王剣』を認められるための争いを始め出した者たちがいた。西暦1846年に、一度、最強の印として『宝王剣』が、とある一人の男に認められた。

そして、彼は願った。

『聖霊召喚』を可能にすることを……これが『聖霊召喚』の始まりである。

以来、『聖霊』を召喚するマスター……つまり聖霊召喚者には『聖霊』と同じ刻印が刻まれる。刻印の名を『令呪』と呼ばれる聖痕。その刻印を得た者は、『宝王剣戦争』に参加する権利を得ると同時に自信の血と聖霊の遺品を媒介にすることにより英霊を召喚可能とする。

いずれにせよ『令呪』を宿した者には強力な魔力を得る。

魔力が必要なのだ……

『英霊』を実体化できるだけの魔力を供給しなければならない

めだ。

『英霊』に選ばれた者には刻印を、そして『宝王剣』を巡る戦いに参加できる……

たった一人の一つの願いを叶える争いが……

西暦1876年

あれから30年後――

12月24日のこと――

この年も『宝王剣戦争』は秘密裏に行われていた。

『宝王剣』が姿を現したのは、ヨーロッパだった。

その現れた場所は、どの魔法書にも記載されていない。

この年だけ……

西暦1876年12月24日PM22時38分に突如として現れ

た一人の英霊。

女騎士王。

名を『セイバー』

彼女は一夜にして『聖霊』と『聖霊召喚者』を倒し、最強になったが――彼女には実体化できるための魔力供給者がいなかった。

それにより、彼女は12月25日AM00時00分に姿を消した。

そう、伝説の聖霊として――

以来彼女と同じ刻印を持つ物は現れなかったという――

そんな昔の話が、現代2011年に、135年ぶりに『宝王剣戦
争』の幕が上がる。

第零弾 一つの剣（後書き）

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を一弾ずつ読んでくださった皆様には、いつもありがとうございます。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を二十二弾まとめて読んでくださった皆様には初めまして。

最近Fateに激ハマり中の阿良々木 雅です。

はい。アニメ化になったFate/Zeroと境界線上のホライゾンにハマっています。

いやー、だからですかね新章にFate引用しています。完全Fate引用ってわけじゃないですよ。刻印と騎士王の名くらいですかね。

では、これからも緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光をよろしく願います。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】のキャラクターたちが一人でも多くの読者の皆様と出会い、幸せな作品になってくれますように。

第一弾 真実（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会えた 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆
様。

どうも本日二回目投稿。

阿良々木 雅です。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では新章第一弾を楽しんでくださいな

第一弾 真実

【キンジ視点】

あの子のアリアと白雪がどうなったかというところ、俺の部屋で暴れるだけ暴れて、お互い眠ってしまった。

まあ、一つだけ、ちょっと問題発言をしたんだよね……“アリア”が……

『子供はできてなかったから』

と、とんでもない発言をしたんだよね俺の膝の上で眠っているコイツ（アリア）は……

にしても、かなえさん、アリアの父親……ホームズ家の皆さん。

可愛い娘の性教育ぐらい、しておいてください。

と叫びたい……

白雪はあの後起きると、部屋から、煙のように素早く消えていった。

程よい太陽が照っている道をアリアと並んで歩いている。

なんで歩いているかって？

それは、学校に行くためだ。といっても、もうすでに校門前なんだがな……

こうして今日という日は始まった。

12時35分

そんな時間の昼休み。とある場所に向かっていた。そう、紅坂 黒霧の席に。といっても、この2年A組なんだけど。

「いないじゃないキンジ」

「俺に言っなよアリア。で、本当に訊くつもりなのか？」

「当たり前よ。黒の疾風・紅い閃光の正た――」

俺は咄嗟にアリアの口を抑えた。

何故なら、教室の連中がアリアを見ていたからだ。そりやそうだろう『黒の疾風・紅い閃光』別名『青瞳の死神』と呼ばれているくらい犯罪者たちから恐れられている二つ名だ。この名を知らない武偵生徒はいないだろう。ましてや、その正体が紅坂だったなんて俺自身思いもしなかったからな。

それなら、あの日、バスジャックの時、何故現れた？パートナーが中空知だったからか？もしくは『武偵殺し』のことを調べていたからなのか……どちらにせよ、よくわからない。

正体不明の武偵なのだから……。

それが……俺の友達、紅坂 黒霧だったなんて。

……… 本当だったら、頼もしい味方になる。

それにロシア系凶悪犯罪集団・『スヴェントヴィト』の構成員の

大半を捕まえた武偵なんだ。きっとアリアは、自分の母親、かなえさんに罪を着せたボスの名を訊きたいのだろう……

ん？……… 何かが腕を叩いている……

よく見れば、口を抑えていたアリアの顔色が青ざめていた。 あ

……… 忘れていた。

抑えていた手を離してあげると、アリアはコルト社の名銃・ガバメントを構えた。

「……… はあはあ……… き、キンジ何か言っことあるわよね？」

言っこと？

……… あっ

そういつことが……

「……… すまん。 ちょっと抑えて過ぎたな」

と言いながら頭を下げる。

すると、アリアはガバメントを太股に収めた。

「キンジ、おなかすいた」

「ん？……… ああ、じゃあ学食に行くか」

と、言ってガヤガヤうるさい学食に向かうのだった。

「キンジ、ここ、座ってもいいデヤガリますか？」

ガヤガヤと、うるさい学食の中、俺、遠山キンジはハンバーグ定食を、アリア、神崎・H・アリアは自身で持ち込んだ。ももまんを食べていたら、ふざけた、あの『武偵殺し』の喋り方で、話しかけてきた。

ニコツ。

と、につこりスマイルをしたコイツは、俺と同じ探偵科の銀錠空牙。

武偵ランクはA。このAにも色々あるのだが、銀錠はバランスがいい。強襲科から探偵科に転科したのだが、本当にバランスがいいのだ。44デザートイーグルを片手撃ちをしてしまうほどの銃技・格闘・ナイフ・頭脳、どれも信頼がおける。さらに特殊武器の手錠を使用する。これほどバランスいい上に超偵だ。

そんな銀錠はカツ丼を乗せたトレイを机に置いた際に少しズレた俺のトレイをちゃんと元の位置に整えた。そうすると席に座らず俺たちとは反対方向に手を振り出した。

「おーい！ 黒霧！ 鋭時！ 早く来いよー」

と叫んだ。

見れば反対方向から黒霧と刺々森が来ている。

黒霧は自分で作ったであろう弁当を手にし、刺々森は煙草を吸い

ながら珈琲だけを手にしていた。

……反対から俺のトレイを少しズラしてから弁当を置いた黒霧は、ちゃんと すまない と会釈した。ほんと、いいヤツだよ。でも、やはり信じられん黒霧が『黒の疾風・紅い閃光』だなんてな。紅坂黒霧。武偵ランクはS。Sランクは何も言うところがないくらい完璧なヤツがつけられるランクだ。愛銃はSIGとベレッタPX4-stormを使っている。銃技・剣技・格闘・頭脳・身体能力など全てが完璧な武偵。黒霧も超偵らしいが、攻撃系ではないらしい。ちなみに黒霧は、かなりモテる。

そりゃそうだ。イケメンだし。武偵高には珍しい偏差値77だからな。

どこからか椅子だけを持ってきて座りだす刺々森 鋭時。

彼の武偵ランクはA。このAランクにも色々あるのだが、って銀錠のときと同じ説明になってないか？しかも、アリアは黒霧と楽しく話してるし、まったく……訊くんじゃなかったのかよ。で、武偵ランクはAなんだが、刺々森のランクAはランクSにはいかなかったが、通常Aランクにもいかない。いわば武偵ランクSとAの間にいるランクAなのだ。武器は腰に差している刀四本……鋭斬刀。鋭斬刀は極限までに研いだ刀で斬れ味が抜群。しかし鋭斬刀は重さがない。故に、鋭斬刀でのガードができないのだ。そう、もし鋭斬刀でガードした場合、鋭斬刀は真つ二つに折れてしまうのだ。と強襲科の教科書に書いてあったな。銃はデザートイーグルを使用している。煙草が大好きみたいで、いつも吸っている。蘭豹の前では吸っていないようだ。

まあ、けっこういい奴らだ。

「聞いたぞキンジ。ちよつと俺の事情聴取を受けてもらえるデヤガりますかな？」

「何だよ銀錠。事情聴取って」

「キンジお前、白雪さんと喧嘩したんだって？」

……さすがだな。

さすが探偵科の優等生。

まあ、武偵高自体がすごいんだよな。

情報、というか噂が広まるのが異常に早い。

というか銀錠お前、カツ丼食い終わるの早ッ！

「白雪さん沈んでたみたイデヤガりましたぞ？一体、どうしたんでヤガりますか？」

「白雪とはどうしたも何も……というか銀錠。お前、白雪を見かけたのか？」

「ん？ああ、今朝な。SUパツ。温室で花占いしてたのを鋭時が見たって言うからでヤガりますよ。あー飽きたな、この喋り方」

「なんだよ花占って」

「フー。ポピュラーじゃねえのか？」

刺々森が、自身の発火能力で煙草を灰にした。その灰を飲み終えた珈琲缶の中に入れて言う。

「知らないな。アリア聞いたことあるか？」

俺が訊くと、正面にいたアリアは「知らないわ」という感じに首を横に振った。

ちなみにアリアは今もまんを頬張るように食いながら、黒霧と話をしていた。そのため静かなのである。

「……フー、遠山も、知っているはずだ。花から花弁を一枚ずつ千切って、好き・嫌い・好き・嫌い……っていうやつだ」

おー。あれか。懐かしいな。小さい時はよくやったっけな。しかし、今時そんなことをやるヤツもいるんだな。ホントに天然記念物だな。あの大和撫子は。

「……まあ、涙ぐんでみたいだぞ……で、別れたのか？」

アリアがももまんを咽に詰まらせると黒霧が買ってきていたであろう烏龍茶を飲ませた。

……キヤップを開けたから、まだ飲んでなかったのか黒霧。って何考えてるんだ俺は。

「あのなあ……どこでどう話がこじれてそうなってるんだ。そもそも俺と白雪はそういう関係じゃない。ただの幼馴染みだ」

「フー、そういえばそうだったな」

煙草を吸いながら言った刺々森。

黒霧は弁当を食べながら首を押さえていた。

銀錠はアリアの前で堂々とエロ本を読んでやる。

すると、やつともまんを飲み込んだアリアに蹴りを入れられる

銀錠。

……まあ、ドンマイだ銀錠。

「……そういえば黒霧」

白雪の件でこれ以上イジられるのもイヤだったので、俺はアリアも訊きたがっていた話題に変えることにした。

「お前『黒の疾風・紅い閃光』らしいな」

「……誰から聞いたんだ？」

黒霧の表情が豹変する。少し眉を寄せていた。

まあ当たり前だよな。自分の秘密を知られたんだもんな。

すると黒霧の隣にいたアリアが、

「アンタが、ロシア系凶悪犯罪集団・『スヴェントヴィト』の構成員の大半を捕まえた『黒の疾風・紅い閃光』だって理子から聞いたのよ」

と言った。

蹴られた銀錠は立ち上がり、なんとかエロ本の無事を確認していた。

刺々森は煙草を吸うのを止めていた。

「……なるほど。だが、その情報は一つ欠落している部分があるぞ。俺一人ではなく『黒錠之無崩壁』……鋭時と、そこにいる巨乳好きな空牙とで『スヴェントヴィト』を捕まえただけさ」

……黒錠之無崩壁だと。

武偵には附属中学がある。その時、有名になったチームが『黒錠之無崩壁』なんだ。

そのチーム人数は三人。

一人目は『黒の疾風』と呼ばれ。

二人目は『銀箔の手錠』と呼ばれ。

三人目は『無崩の刀』と呼ばれた。

まさか……な。

銀錠の手錠は銀。鋭時の刀は四本。黒の疾風は言うまでもなく黒

霧だ。

あのチームが目の前にいるのか。最強のチームが……

「……悪かったな。キンジ。お前に隠し事してて……」

それだけ言つて黒霧は席から立ち上がったが……
突然、その場で倒れ込んだのだつた。

ヤバイ！

すぐに救護科に運ばないと！

第二弾 暗闇の廊下（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆様。
様。

どうも

阿良々木 雅です

ちよつと落書きです

<http://m.photouzou.jp/photo/show/2071553/103069083>

→ 黒霧です。

下手な絵です。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では新章第二弾を楽しんでくださいね

第二弾 暗闇の廊下

.....

.....

「.....」

唐突に意識が覚醒した。

「.....暗いな。.....ッ！」

だんだん完全回復していく視界。不意に痛みが走った。そう痛みが走ったのは首だった。

.....そういえば、キンジたちと飯食べていた時に倒れちゃったのか。あの時から首が痛かったんだよな。

「.....キンジたちが運んでくれたのか」

おそらく、ここは保健室だろう。

間違いない。あちらこちらから薬品の独特な匂いをするのがわかる。ここは救護科の保健室か？

とりあえず、起きるか。

意識がブツ飛んだ脳ミソでなんとか判断してから、俺は被っていた布団を剥ぎ取った。

- - - が。

突然、首に激痛が走る。

「……………ッ！」

熱が籠もったかのような、熱さ。首を銃弾で撃ち抜かれたほどの激しい痛み。不審に思って携帯電話のライトを照らし手鏡で確認する。

「……………なんだ、これは」

眩しく光る携帯ライトを自身の首に照らし、手鏡で見ると、そこには刺青ではいったかのような刻印があった。

血のような紅い刻印。

それは、まるで俺、紅坂 黒霧がつけているネックレスと似た形の刻印だった。

そう、刻印である。

驚くことに、綺麗に刺青（はい）っているのだ。

「……………」

これは【刻印】一体なんだ？ もしかしたら、俺はまだ夢を見ているのか。でも痛みは感じるぞ。痛みを感じる夢だとしたら相当タチの悪い夢だな。

どうにか、この夢から抜け出そうと、頬を抓るが……

「……痛い……」

抓ってみたが、痛かった。結果、これは夢ではなく、現実ということがわかった。

「考えてても仕方ないか……ふぁ」

俺は欠伸をしながら、ブレザーを羽織り保健室から退室した。
真っ暗な武偵高の廊下を歩く……

真っ暗になった廊下を歩く。

現在時刻：AM02時02分。

まったく、先生も起こしてくれてもいいのにな……。

そんなことを思いながら歩みを進める。

草木も眠る丑三つ時、何もかもが静かで不気味さを与える時間帯だ。

通常なら電気をつけなければならないのだが、つけるのがめんどくさく携帯電話に搭載されているライトを使って足元辺りを照らして歩いていく。

「……眠……ッ!?」

……殺意ッ！？

欠伸をしかけた口を閉じてから、背後に感じられる殺意の方へ視線を移したが、丑三つ時だから何も見えない。

……気のせいか。感じていた視線の方から、もとの進むべき方向に身体を向けた――

次の瞬間、電光石火のごとく飛んできた小さな物体が、俺の肩に当たっていた。

「……………くッ！？」

激痛が走った。小さな物体という、あまり痛みを感じないだろう一撃が予期すらないほどの痛みが走った俺は信じられない思いで、その場に落ちた小さな物体を手にとる。

小石？……………

拾い上げた物の正体は小さな石だった。それを投げた、投手の姿を捜す。

すると……………

捜すまでもなかった。

暗闇の廊下、俺の目の先に壮麗なる光輝く装束を纏った男の姿があった。この暗闇をも、照らしてしまうほどに、光輝く男。

小石をぶつけられた痛みすらも忘れさせるほどの圧倒的な威圧感があった。

「貴様が我より最強の刻印を……『令呪』を手に入れたというのか」

『れいじゅ』？この首に刺青っている刻印のことか？

光輝く男の周囲に、さらなる光輝くものが無数に出現する。出現したそれらは、剣、絢爛たる装飾を施された宝物のような剣だった。そしてその現れた全ての剣たちの切っ先を彼、紅坂 黒霧に向けていた。

……ッ！……突然のことで思考が思うように動かない。咄嗟に自身の手を噛んだ。

……パニックに陥りかけていた思考や意識を回復させたのも束の間……

稲妻のように光輝きながら、こちらへ電光石火のごとく飛来してくる剣。その剣を防ぐため刀を抜刀しながら鮮やかに、かわす。

「…………ッ！」

……ッ！痛み。頬を飛来した剣の刃に掠めたのだ。

……チッ。俺は内心で舌打ちをすると瞳を紅く染める。

（…………心内透見……！）

暗闇の廊下に一つの紅い光と神々しく輝く一つの明かりが激突する。

第三弾 奇跡の召喚劇（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会えた 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆
様。

どうも

阿良々木 雅です。

今回は殆ど戦いです。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、新章第三弾を楽しんでくださいね

第三弾 奇跡の召喚劇

現在時刻 A M O 2 時 1 2 分

草木も眠る丑三つ時の東京武偵高校 2 年 A 組前の廊下。

左目を紅く光らせている彼の名は紅坂 黒霧。

それに対して、神々しく輝く男がいた。

「貴様の聖霊を見せてみよ。最強の刻印を持つ者、貴様の聖霊を我に」

と、言った男は、自身の周囲に、無数の絢爛たる装飾を施された剣の切っ先を向けていた。

「……………」

無言の俺に対して、絢爛たる装飾を施された宝物のような剣を、風を切る音とともに、無数の輝く刃が俺に向かって降りそそぐ。

が、その全てを鮮やかにかわし抜刀していた刃、漆黒に塗られた『黒牙』を鞘に収めた。

「何の真似だ。そんなに……………」

「…………死にたいのか？ だろ。お前が言いたいことは」

「っ!？」

驚きを隠せない男。それはそうだろう。自身が考えていた言葉（セリフ）を言われたのだから。

これが俺の超能力。『心内透見（マインド・ホーク）』である。この能力は相手の心を全て見ることができる。

そして、俺は問う

「……聖霊ってなんだ」

「貴様は知らないのか。ならば教えてやろう、その首の刻印は『令呪』と呼ぶ。そして、令呪がある者は自身の血を媒介に聖霊を召喚できるのですよ」

「ッ!」

「その反応、貴様は知らないとみた」

「……」

「凶星か。見た目も魔力を持ってなさそうだ」

――ッ！！ 先程言っていた言葉の内容は、わからなかったが、こいつの右手には紅い刻印があった。

あの話が本当なら首の刻印、これが『令呪』なんだろうな。

「良いのではないか」

神々しく輝く男が笑いながら、

「どうせ、ここ（東京武偵高校2年A組廊下）で死ぬんだ。全て忘れる」

と、言う言葉（セリフ）と共に、光輝く宝物のような剣が放たれた。

それを目の当たりにした彼、紅坂 黒霧は――

眩い剣の一撃を、俺は交わさなかった。顔面に迫る一撃を、首を振って避ける。

そう避けながら、廊下の床に倒れ込むような格好で、一本の刀を抜刀――それはまるで、桜吹雪のように紅色に輝く刃の刀『桜紅梅』を手に取った。

俺は起き上がりざまに、桜紅梅を横に振るう。

「紅流！ 攻式一の型！ 桜華！」

俺は振るいながら叫んだ。散った花弁を全て斬り裂くように桜紅梅を振るったが、光輝く男は表情を一つも変化させずに交わした。その交わしたタイミングを“判っていた”俺はベルトに搭載された特殊改造したホルスターから紅色のベレッタPX4-stormを抜き、漆黒の弾丸9mパラベラム弾を放つ。

ズギュンツ！！ズガンツ！！

2発の弾丸をやつの額目掛けて狙い撃ったのだが……突然、背後から投擲されたであろう剣によって銃弾が撃ち落とされた。

背後を見ようとした瞬間――
神々しく輝くギロチンが視界に映り込んできた。
幅四メートルほどの巨大なギロチンに挟まれようとしていた。

「ッ！？」

俺は反応できなかった。

いや、正確に言えば目の前にいた男から目を離していたからだ。心内透見は常に相手を見ていないといけない。投擲された剣の跳んできた方向を見ていた瞬間を狙われた。

俺は、その攻撃を防ぐため咄嗟の判断で鞘に収め戻した『黒牙』

をもう一度抜刀し、ギロチンを制止させた。

「……そんなに驚くほどのことかよ!」

心内透見で透見（みた）相手の感情を口にする。

「フツ……驚きはしたが、死ぬのは貴様だ」

「…………ツ!？」

神々しく輝く男は紅坂の口を黙らせようとするように、ギロチンを消し、自身の周囲に絢爛たる装飾を施された宝物のような剣を彼の口に向けて放たれた。

その距離3メートル。

現在の能力モードの俺なら、この攻撃に対して予測はできていたはずなんだが――

現在のヤツの心内には雑念がなかった。無心。俺の能力の唯一の弱点が無心なのだ。

……こんなところで死ぬのか!？

いや、まだだ!

ベルトのバックルに搭載されているワイヤーを割れた窓ガラスの先にある中庭にある木に向かって投げ、そのまま廊下から脱出した。しかし、口に向かって投擲された剣がワイヤーの線に当たり、ワイヤーを切られた。そのまま中庭に落下していく。

「…………ッ！」

が――

紅坂は驚いていた。

いや、この場合は驚愕だろうか。

その顔色が驚愕に変貌させたものは落下地点に斬れ味が高いであろう3メートルのギロチンが構えてあったからだ。

「所詮、貴様は我を倒せなかった虫虻。虫虻は虫らしく、死ね」

(…………クソッ！)

ここで『黒牙』を投擲したとしても、空中で簡単に狙えない。仮に投擲して当たったとしても、この状態からヤツを狙って投擲するまでには、数秒の時間差が生じるのだ。咄嗟に『桜紅梅』の鞘と刀の二刀流でギロチンを防ごうとしたが、ヤツのギロチンは勢い良く俺の腹へと突き刺さった。

ズドッ！！

という凄まじい音が丑三つ時の武偵校舎内に鳴り響く。

赤い血が舞った。

くの字に折れ曲がった彼、紅坂 黒霧の口から、紅い紅いぬめった液体がボタボタと垂れた。鞘と刀で防ぐ事もできず、体を捻って避ける事もできず、一直線に腹へとギロチンが突き刺さったのだ。

だが、腹に突き刺さったギロチンによって紅坂の体は真つ二つになっっていなかった。そう、桜紅梅の鞘は研無刀を収める鞘だったため重症を防いだのだ。

「ぐっ……………」

ヤツは廊下の窓から身を乗り出しながら舌打ちをしギロチンを消してから、こちらを見下していたのを見た俺はベレッタPX4 - stormの銃弾を放った。

ズギューン！！

「何だ、このふざけた攻撃は…………死ねよ虫螻！！」

いとも簡単に銃弾を交わされた。未だに輝きを放つ男。その周囲に、今まで以上の輝きが無数に出現する。空中から忽然と顕れた剣は、いずれも絢爛たる装飾を施された宝物のような剣。そして、風を切る唸りとともに、無数に輝く刃が俺へと降りそそぐ。

(……ぐっ、身体が動かねー。ここまでなのか……)

そう思った最後の瞬間に――

カキッン――！

金属音が鳴り響いた。
その音に瞳を開ける。

そして――

深夜の武偵高に、闇に閉ざされ血まみれの芝生に、今美しく透き
通るほど綺麗な声が響き渡る。

「問おう。貴方が私のマスターか」

第四弾 十六夜（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会えた 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆
様。

どうも

3日ぶり？です

どうも阿良々木 雅です。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、新章第四弾を楽しんでください

第四弾 十六夜

「問おう。貴方が私のマスターか」

深夜の東京武偵高校の血だらけの芝生に、綺麗な翡翠色の瞳、芝生の上に立つ姿が凛々しく、結い上げていてもなお 軽さと柔らかさが見て取れる美しい金髪と、細い体躯を包む銀箔の装束の下は古風なドレス、それは、まさしく可憐な美少女だった。その彼女の雰囲気は居合わせているだけで気持ち落ち着かせるほどの爽やかな浄気を思わせ清々しい。

現在の血だらけの暗闇の丑三つ時の中庭には、そぐわない人物が顕れたのだった。

「……」

「……どうしたのですか。貴方が、私のマスターで間違いないのですね？」

「……マスター？……なんだ……よ……ッ！？あぶねえ！」

神々しく輝く男が投擲したであろう剣が彼女目掛けて放たれていたのを、紅坂は動かない身体を無理矢理動かし『黒牙』を抜刀した。だが抜刀した刀を槍で相手突きかのように構える。

そして――叫ぶ

「黒技！ 防式三の型！ 黒防牙！」

飛来してくる剣に刀を向かい撃つように刃と刃がぶつかり合った。見事に、真つ二つに折れた両方の剣。

だが、神々しく輝く男は更なる攻撃へと転じた。それに反応して刀を抜刀しようとしている紅坂の動きが止まる。いや、止まらずにいらなかった。彼の口からはボタバタと紅い紅い液体が垂れているのだ。先程の防式での剣と剣のぶつかり合うときに生じた反動が身体にダメージを与えているのであろう。

（……さっきの防式で身体に力が入らねークソッ！ “アレ”をやるか！？）

目の前に顕れたギロチン。幅3メートルほどの鋭利な刃が容赦なく襲いかかる。

そう、血だらけの『黒の疾風・紅い閃光』に向かって……

ドウッ！！

という轟音が炸裂した、が……横薙ぎに吹っ飛ぶはずの紅坂の姿はなかった。

ギロチンは空を斬ったのだ。 神々しく輝く男はギロチンを消し、辺りを見渡す……が時間帯が運を損じたのか何も見えない状態だ。見えているのは自身の足元だけだろう。

男は姿がないことを確認すると、その場を後にしようとしていた……が、その足を止めさせる1発の銃声が鳴り響いた。 それは男の腕に命中した。 男は奥歯を噛み締めたのか暗闇の廊下に齒軋が聞こえた。

横薙ぎに振るわれたギロチンを避けるために動いたねは俺じゃなかった。

現在、俺をお姫様抱っこをされている。 その人物は鎧を纏った金髪美少女。 ほのかに香るいい香り……駄目だ…落ち着け俺、禁忌を破るわけにはいかないだろ。

「マスター、ご無事ですか？」

「……………ああ大丈夫だ」

中庭の死角まで運んでもらうと俺は対価能力を使用した……。

「ッ！ 油断していたか。まさか、伝説の騎士までも出てくるとは……！？」

男は自身の背後にギロチンを出現させた。何故出現させたのか……それは……

「無技……十六夜！！」

神々しく輝く男は出現させた背後のギロチンで、その声のタイミングと同時にギロチンを横薙ぎに振るったが、それよりも先に紅坂の方が疾かった。男の懐に入り罅がはいってしまった『梅紅桜』を型に嵌らない動きをした。そう、無技とは、その名の通りで『無は型に嵌らない流派』なのだ。毎回、同じように剣を振るわないが故に、動きが読めない。これが無技の絶対的なメリットである。

「貴様ッ！ 我は、まだ聖霊を呼んでないのだぞ……ッ！？」

「……そんなもん、俺には知らねーことだ」

紅坂は左掌に握りしめている刀を、

「貴様ツ！ 傷口はどうした！ツ！？」

「……教えると、思うか？」

神々しく輝く男はギロチンを出現させようとするが、その前に紅坂が動いた。

驚愕に彩られた神々しく輝く男の腹へ、まっすぐ狙いを定めた、
が……

カキッン！！

という金属音が鳴り響く。 だが、当たったのは……一本の剣だった。

「残念だったな。だが、なかなか、面白かったぞ……」

神々しく輝く男の腹を護っていたのは一本の宝物のような剣があった。恐らく、この剣で十六夜を防いだのだろう。

「ぐっ……………」

紅坂はズキズキと痛みだした腹を押さえ、折れた『梅紅桜』を手離して、辛うじてその場に踏みとどまる。

対価能力で傷口を癒やした紅坂だがギロチンで斬られた腹の傷口がひらいてしまったようだ。

「貴様を生かしておいてやる。次会う時は殺してやる……………」

ゴッ！！

という莫大な轟音と共に。

神々しく輝く男の体からオレンジ色の閃光が現れたのだった。

その現れた時間約0、4秒。閃光が消え周囲を見渡すが……男の姿は、どこにもいなかった。

俺は動かない身体を動かして寮に戻っていく。

丑三つ時の武偵高での戦いは、こうして終わりを告げたのだった。

第五弾 騎士王の名（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会えた 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 & 『Fate』 タグを利用している皆様。 作者の
皆様。 読者の皆様。

どうも最近 Fate にマジにハマっています阿良々木 雅です。

アーサ・ペンドラゴンなどが文章に入ってきます。

伏線などもあるかもです。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、新章第五弾を楽しんでください。

第五弾 騎士王の名

現在時刻 03時52分

未だに暗闇が世界を支配する空間。血だらけの廊下の壁に横たわりながら眠っている少年がいた。

暗闇。

微かに見える見慣れない金髪美少女。

朧気な視界がそれを捉えた時、俺の意識と視界は覚醒（目覚めた）していた。

「……………ッ痛ッ」

軋むような激痛。身体の、特に腹辺りが痛い。

ポケットに入れてある伊達メガネ（値段：1500円）をかけようとするが、壊れていた。まあ、無理もないだろう。あんな戦いをしたら、な……………。

それに『牙鳳』以外の刀を全て折ってしまったしな……………。

「……………大丈夫ですか。マスター」

廊下の、俺の横に寄り添ってくれている優しげなボイス。

きつちりと整った髪のように見えるが、その髪は触れればきつと柔らかに撫でば……って、駄目だ駄目だ。無心になれ。“あのモード”には絶対にならないって決めただろ。

ふう……………。

心内で軽く溜息を吐き出す。

「どうですか？まだ身体は痛みますか？マスター」

「ああ、ちよつと痛むくらいだ……それよりマスターって、どういう意味なのか教えてもらえないか？」

「？ マスターは何も知らないのですか？」

「ああ。何も知らないんだ」

俺は隣にいる金髪美少女に顔を向けた。

「では、説明をする前に私の名を申します。私はセイバー。マスターのいうところの歴史でいうならアーサー・ペンドラゴンと申せばいいのですか」

アーサー・ペンドラゴン。一般科目で習ったことがある。歴史に
名を刻んだ偉人。

コーンウォールより出土した黄金の鞘の主、即ち、聖剣エクスカ
リバーの担い手として知られる人物だ、と習った覚えがあつたはず
なんだが、まさか、その正体が女の子だったなんて……誰が想像
し得ようだろうか。

「……マスターの名を訊かせていただいても、よろしいでしょうか
？」

「……ああ、俺の名前は紅坂 黒霧。黒霧でいいよ」

俺は彼女にそう言つと、ゆつくりと立ち上がり自身の部屋に戻る
うとした時……足に力が入らず ふらついてしまう。

「マスター。肩を お貸しします」

と言われた俺は必死に断つたが「マスターの身に何か、あつては
困ります」と説得され仕方なく肩を借りることにした。

こうして、彼女、アーサー・ペンドラゴンこと『セイバー』と紅

坂 黒霧の出会いであつた。

東京武偵高校第2男子寮の二階の俺の表札がある部屋の扉を開け長く伸びているフロアリングをセイバーの肩を借りながら歩く。そしてリビングに着いた俺は座卓に腰を下ろす。セイバーは俺の真っ正面に腰を下ろした。

「で、さ。えーつと、セイバーが女っていうのは、わかったけど、聖霊ってなんなんだ？」

その言葉にセイバーは、困り果てた顔で苦笑いした。

「聖霊を使い魔として使役する戦いが宝王剣戦争です。……宝王剣が私たち聖霊のマスターとして選ぶ七人にしか呼び出せないのが聖霊です。聖霊というのは歴史や伝承、空想などに名を残す人物のこゝとをいいます」

「……そんな不可能ことを」

（でも俺の目の前にはセイバーが居る訳だし、不可能を可能にするのが宝王剣ってヤツの力なのかも しれないな）

そう考えている自分自身が呆れ果てた俺は深く吐息をついて近くに置いてあった飲みかけのミネラルウォーターを飲んだ。

「……聖霊ってのは、年を老ない（とらない）のか？」

「容姿について、ですか。そうですね。私は岩から契約の剣を抜いた時に不老の魔法がかかり、私の外見年齢は止まってしまいました」

……それは。

どれほどに辛く苛烈な青春であったのだろうか。

“龍の化身”たる若き王。

その武勲にも拘わらず、最後には肉親の謀叛によつて王座を奪われ、ついに栄華のうちに終わることを許されなかった悲運の君主……。

そんな命運を、こんなにも華奢な女の子が背負ってきたのか……そのことに俺の心に重く痛く何かが突き刺さる。そして、俺は口唇を動かす……

「……そんな運命で良かったのか？俺は、そんな風にしたヤツらに腹が立つ。自分たちのためだけに他者を利用するヤツらを」

「……」

俺の問いにセイバーはしばし黙って俯いた。だがすぐに顔を上げた彼女は言葉を紡いだ。

「それは出過ぎた感傷です。私の時代の、私を含めた人間たちの判断について、そこまでとやかく言われる筋合いはマスターにもない」

「それでも俺はセイバー、お前に、もう二度と辛い想いはさせたくない」

ああ。きつと、これが決意なのかもしれないな。また一人増えたな“守りたい人”が……。その言葉にセイバーは俯いた。それから数分後彼女は顔を上げた。

「……アナタのようなマスターの下に召喚できたことを深く感謝しています」

「……そ、そうか。俺は何もしてないけどな。でも、まだ感謝するのは早いんじゃないのか？」

その問いにセイバーは頷いてくれた。どうやら彼女は俺に心を開いてくれたようだ。

不思議と俺の頬の力も緩む。

あ、ヤバイ……

気を緩め過ぎた……か。

対価能力……この力と今日の通常モードでの『無技』が崇つたのか、ついに俺の意識は深い闇へと落ちていく前に、セイバーが介抱してくれたのがわかったとき……俺は、深い闇へと落ちていった。

第五弾 騎士王の名（後書き）

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を一弾ずつ読んでくださった皆様には、いつもありがとうございます。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】を二十七弾？まとめて読んでくださった皆様には初めまして。

どうも最近『迷える執事と秘密の恋』を執筆し始めた作者、阿良々木 雅です。

いや、最近『緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光』ばかり執筆してまして、放置プレイ気味な感じだったんですよ。

では、後書きはこれくらいにて終了いたします。

【緋弾のアリア・黒の疾風・紅い閃光】のキャラクターたちが一人でも多くの読者の皆様と出会い、幸せな作品になってくれますように。

ではご感想などお待ちしております。

第六弾 意外性（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会えた 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 タグを利用している皆様。 作者の皆様。 読者の皆
様。

どうも

阿良々木 雅です。

誤字。脱字。変換ミス。文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。

では、第六弾を楽しんでください

第六弾 意外性

どんなに暗くて冷たい夜もいつかは明ける。どんなに明日という日が嫌でも明日という朝はやってくる。

そんな説明みたいなことをした俺は自身の部屋の時計を見た。…

…【現在時刻：AM 06時35分】。

(……全然眠れてないな)

「ふあゝゝ。ねむ…い」

カーテンをした窓から程良く心地よい日差しが差し込んできていた。

ちなみに普段の俺は起きてからランニングに行くのだが、あんなことがあったんじゃランニングに行く気にもなれない。目覚まし時計の変わりにしている携帯電話(b u b y K D D I)折り畳み式カラー黒を開き液晶画面を見る……と、周知メールが来ていた。そのEメールを開くと――――

【周知メール】

『日付が変わった深夜に何者かが学園内に侵入した模様。校舎破損状態である。まだ侵入者は近くを徘徊している可能性がある。気をつけるように』

.....

どうしよう。あの状態にした原因は俺にもある訳だし。うーん、まあ、とりあえず朝飯の準備するか。

俺は頬を叩き意識を シャキッとさせキッチンへ行き、手と顔を洗う。

冷蔵庫から卵、牛乳、バター、ウィンナー、レタスなどを取り出しながら、近く置いてある棚から食パン、砂糖、メープルシロップを取り出す。

俺は寝間着のYシャツ（昨晚の血だらけ武偵高校の制服）の袖を捲りながら、ボールを取り、そのボールに卵、牛乳、砂糖を入れる。そしてこの三つがよく混ざるようにしっかりと混ぜる。準備していたバットにさっき混ぜた卵液を移す。卵液の中に食パンの両面しっかりとつける。そのつけ浸している間フライパンにバターを大さじ1杯ぐらいを入れ、中火でゆっくりとフライパンを熱し、バターが溶けるのを確認したら、卵液に浸していた食パンを2枚づつ入れる。（もしフライパンが小さい場合は、バターの量を半分に減らして1枚づつ焼くといいかもしれないな）食パンの両面に程良い焼き色がついたら、フライパンから取り出し食べやすい大きさに包丁で切る。食器棚から彩った柄が塗ってある皿に完成したフレンチトーストをのせる。後は、メープルシロップかシナモンなどをお好みでかければいいだけだ。

さて、先程使用したフライパンを軽く洗い、もう一度ガスコンロにかける。フライパンが温まったのを確認してウィンナーを入れ、こんがりと焼き上げていく。焼き終えたウィンナーを少し細長い皿に盛り付け、その隣にレタスも盛り付ければ完成だ。あとは、ゆっくりと準備していた（裏で）紅茶をカップに淹れれる準備だけしておく。

「……ちよつとシャワー浴びてくるかな」

俺はバスタオルを持って浴室へと向かう。昨晚風呂に入っていないかったからな。セイバーや刻印のこともあるし、ここは心機一転して気持ちを引き締めるか。

今後、勃発する宝王剣戦争のために。

「……眠いな」

浴室に続く脱衣所の前に辿り着いた。

とりあえず携帯電話の液晶画面で現在時刻を確認しながら扉を開ける。

脱衣所で服を全て脱ぎ捨て全裸になりシャワールームに入った。

濡れた髪と肌をバスタオルで拭いていた。

拭き終えた俺は、下着を穿き、上半身裸のまま……鏡を見る。ちよつと深いな。

……そういえばセイバーはまだ寝てたな。

俺が目を覚ましたら（（覚醒））隣に寄り添うように寝ていたようだ。そのため寝顔が近くにあった。……綺麗で可愛い寝顔が……。そんなことを思い出していたら鼻に熱いものを感じる。……ふう。落ち着け……。

気持ち落ち着かせた俺は上半身裸で自分の部屋に行き、予備のYシャツを着、ズボンを穿いた。とりあえず学園に行く準備だけしておいた。それを終え、セイバーと寝ていたリビングに戻ると、

「……おはようセイバー。何を見ているんだ？」

背後から自身のマスター紅坂 黒霧に呼びかけられて、窓辺の金髪美少女……騎士王セイバーは振り向いた。

「……おはようございますマスター。いえ、現代の世界の景色を見ていただけです」

背後から声をかけられたのが驚いたのか、少し困惑したような表情をしていた。そんな表情をしていた彼女、セイバーに微笑んで「大丈夫だぞ」と俺は表情だけで伝える。その表情を見たセイバーの表情も落ち着いてきている。

この瑞々しい存在感と澄み切った声。精巧に創られた綺麗な顔。結い上げている金髪。その髪は柔らかさすら見てとれる。細い体躯を包む古風なドレスを纏っているセイバー。

そんな彼女という空間は優しく、どこことなく懐かしさすら感じるが故なのか、自然と微笑むことができている自分に正直驚いている。

勿論、笑えることは嬉しいことだ。もしかしたら彼女を護ること共にいることが俺の運命だったのかも、な。

「……そうか。あ、朝食食べるけどセイバーも一緒に食べないか？」

「私とで、いいのですか？」

勿論と言わんばかしに紅坂はセイバーに「勿論、いいに決まってるだろ」と頷きながら言った。

彼女は窓辺から離れて、食卓には紅坂が料理した皿が並んでいた。フレンチトーストにレタスとウィンナーをこんがり焼いたものに、程良い香りがする紅茶まで揃えられている。

俺の真っ正面に座るセイバー。今更なんだが聖霊って飯とか食うのかと思ったが……まあ、いいか。久しぶりに朝食に手を入れたんだ。恥ずかしながらセイバーのために……。

まあ、せつかく出会ったんだしな。

俺はセイバーが食べるまでは手をつけないでおこう。
するとセイバーが、

「マスターは食べないのですか？」

「ん？ああ、俺はセイバーが食べてから食べるよ」

その言葉を聞いた彼女は目の前に置いてあったフォークを手にとりフレンチトーストを一口……

「ど、どうかなセイバーの口に合うものを料理（つくった）んだけど……」

「……美味しいです」

と答えてくれたセイバーの言葉に ホツとする。そんな俺もフレンチトーストに手をつける。

うん。うまい……。

なんというか…… 同棲してるみたいになってるな……。

きつと宝王剣戦争に、こんな感情があつたら駄目なんだろうな。気を引き締めないと。それに俺自身の覚悟も決めないといけないからな。あの戦いで正直使いたくない対価能力を使うハメになったんだ。まだまだ力が足りない証拠だ。

そんなことを思いながら紅茶を飲む。

それから紅茶を飲み終えフレンチトーストやウィンナーなども食べ終えていった。

ぼんやりとしていた紅坂を心配したのか彼女は、

「……マスター？」

「……あ、ああ。悪い。ちょっと考え事をしていた。すまない」

「いえ、構いません。私がマスターを心配するのは聖霊として当たり前のことですから」

その言葉は、どことなく優しく暖かいものが感じられた。セイバーの翡翠色をした綺麗な瞳は、俺に冷静さを与えてくれる。

「……そうか。でも心配してくれて、ありがとう」

「感謝される覚えは ありませんよ」

さらりと言われて、紅坂は、ちょっと笑っていた。

「まあ、いいか。今から、学校に行ってくるんだが……ちょっとの間、留守番してもらえるかな？」

「マスターの頼みなら」

セイバーは快く頼みを聞いてくれた。恐らく、この宝王剣戦争では聖霊が鍵を握っている可能性が高い。更に言えば、この刻印『令呪』を持つ者も鍵を握っているんだろうな。

「……でも、心配だったら、そこにある電話で俺の携帯に 통화（ ）

かけて）きていいよ」

と、言った俺は指で指し示した家庭用電話機の場所を教え、紙に書いた俺の携帯電話番号を渡した。

「……あ、電話機の使い方、わかるか？」

「大丈夫です。マスター。私たち聖霊は、この世界に現界した時に現代の知識が与えられますから」

「なるほど、な。じゃあ、心配はないかな。早めには帰ってくるよセイバー」

こうして、俺の新たな学園生活の始まりとなる歯車が動き出した。

第七弾 新たな出来事（前書き）

朝に出会った 皆さんには
おはようございます。

昼に出会った 皆さんには
こんにちは。

夜に出会った 皆さんには
こんばんは。

はじめて出会えた 皆さんには
はじめまして。

『緋弾のアリア』 & 『Fate』 タグを利用している皆様。 作者の
皆様。 読者の皆様。
どうも

阿良々木 雅です。

誤字。 脱字。 変換ミス。 文脈おかしいなど あるかもしれませんが、
どうぞ ご覧ください。
では、第七弾を楽しんでください。

第七弾 新たな出来事

【現在時刻 AM 07時23分】

帯銃し終えた俺は第二男子寮の門をくぐり抜け、駐輪場に停めてある自転車で武偵高へ登校することにした。

寮の近くにあるコンビニとビデオ屋の脇を通り、台場に続くモノレールの駅をくぐる。

その向こうには、海の上に浮かぶような東京のビル群が見える。

現在、彼がいる此处、武偵高こと東京武偵高校は、レインボーブリッジの南に浮かぶ南北およそ2キロ・東西500メートルの長方形をした人工浮島【メガフロート】の上にある。

“学園島”というあだ名があるこの人工浮島は『武偵』を育成する総合教育機関なのだ。

武偵とは『武装探偵』と言われていたりもするが、なんといつても現代社会に蔓延る凶悪化する犯罪・事件などに対抗して新設された国際資格で、武偵免許を所持している者には武装を国や団体から許可された上に、犯人を逮捕できる逮捕権なども有するのだ。いわゆる警察と似た活動ができるということだ。ただし警察とは違う点がある。それは金だ。武偵は金で仕事をする。金さえもらえれば、武偵法の許す範囲内ならどんな仕事でもしなければならぬ。まあ簡単に言えば『便利屋』というわけだ。

――で、だ。

こんなことをキンジもしたはずなんだが……

この東京“武偵”高校では、通常の一般科目に加えて、専門科目を履修することができる。専門科目……これは、この高校の名の通り“武偵”の活動に関わる専門科目だ。

その専門科目にも様々なものがあって、例えば現在自転車で横を通り抜けたのが探偵科の専門棟。で、その先に見えるのが通信科。さらに、その向こうにあるのが鑑識科などがある。そして、もう少し先に自転車を走らせていくと犯罪者達に悪名高き、強襲科がある。そんなことを説明していた俺はiPodで音楽を聴きながらポケットで震えている携帯電話を取り出し開くと、Eメールだ。それも周知メール。そのメールの内容を見て、俺は溜息を吐き出した。

【周知メール】『今日は休校いたします』

…………俺は、とりあえず“アル物”を取りに武偵高校に向かった。

緊急休校となった東京武偵高の中へ侵入する。もちろん教務科に見つからないように……

俺はボロボロになっている2年A組に入った。

そう、俺が取りに来た物は2年A組（ここ）にあるのだ。

「…………確か、ここだったかな」

俺は『刺々森 鋭時』と表札がされてあるロッカーを開け放ち中を覗くと…………

驚くくらいの数の刀刀刀、銃銃銃だ。そんな夥しいほどの量の武器の中から俺は以前頼んでいた二本の刀と二丁の銃を手取る。柄から紅色に染まり、その刃は桜吹雪のような特殊加工された柄が入

っている大半紅一色で出来ている刀。名を『紅桜華』……もう一本の刀の柄は漆黒仕様になっていたが驚いたのは、この刀の刀身だ。刃と峰部分の色が見事に二色に分かれていた。紅と黒の刀。名を『黒焰』。その二本の刀を腰に差し加え、次は二丁の銃を拝見する。……特別仕様に改造されていたベレッタM8000。もう一つは44デザートイーグル。その二丁の銃を鞆に丁寧にしまい込んだ俺は、鋭時のロッカーから45ACP弾と44MAGNUM弾を拝借する。

その拝借した弾倉も鞆に丁寧にしまい込んでロッカーの扉を閉める。

「……さて帰るか……ッ!？」

と、呟いた俺は廊下へと出る……すると、入る時には気づかなかったモノが視界に映り込んできた。

空間が一部破られているかのような大きな隙間が存在していた。その隙間から向こう側の世界?らしきモノが見えた。しかし、何故こんなモノが“ここ”にあるんだ?……それに此处は2年A組の廊下……

「……ん?待てよ。……ッ!?まさか、あの戦いで出来た歪みだというのか?」

俺の生まれつきの一つ目の体質、『瞬間記憶能力』この力は見たモノ、出来事を鮮明に覚えることができる。そして、彼、紅坂はあ

る一つのことを思い出していた。

そう、昨晚の戦い。神々しく輝く謎の男との戦い。あの戦いの最中に放った全ての攻撃のぶつかり合いによって時空に歪みができた……なんて話は辻褃が合うのだろうか、と、紅坂は顎を親指と人差指とで支えるように考える。

（やはり、これしかないか………奴が言っていた『刻印』『聖霊』さらに『宝王剣』……これしか辻褃が合わねーから、な）

結論に達した紅坂は時空の歪みを背にして走り出した。そう、まだまだ知らないことを訊くために――

第八弾 準備帰宅

“紅坂 黒霧”と書かれてある表札の扉まで走ってきた一人の少年。その少年はこの部屋に住む紅坂本人だった。

部屋の前まで走ってきた俺はゆっくりと息を整える。息を整え終えると玄関の扉（ドア）を開け放ち丁寧に真つ黒の靴を脱いだ俺は長く続くフローリングを歩き自室に入りクローゼットを開（ひらき）、真つ黒のYシャツ（防弾防電性能付）に着替える。

その行為を済ませた俺は、周囲の人間（ひとびと）から『黒の疾風・紅い閃光』と呼ばれている漆黒の格好に白のネクタイを身につける。

特殊改造ベルトに装着されてあるホルスターに“アレ”を入れベレッタPX4-storm特別仕様Ver紅色、ベレッタM8000特別仕様Ver紅色も収める。愛銃SIG（対超能力者弾）は机の上に置き、44デザートイーグルは鞆に入れる。鞆には弾倉や包帯、その他もろもろなどを入れてからリビングに行く。

「……ただいま」

「ま、マスター？ 学校はどうしたのですか？」

予想だにしてなかった俺の早過ぎる帰宅にセイバーは頭上に『？』を浮かべていた。

「……いや、緊急休校になったんだ。それより、セイバーに訊きたいことがあるんだ」

「訊きたいことですか……」

「ああ、『宝王剣戦争』ってのは別時空で戦うモノなのか？」
この問いにセイバーは静かに口唇を動かす

「……私はこの宝王剣戦争に選ばれ現界したのは、二回目ですが……
別時空でという話は知りもしなかったです」

「そうか。と、なると今回は別時空での争いってことになりそうってことの確率は少なからずありそうだな……」

俺は軽く溜息を吐き出しながら携帯電話（b u b y K D D I）でw e dに繋ぎW i k i p e d i aで『宝王剣戦争』について調べてみるが、“何も出てこない”という結果に終わる。

「マスターは魔術師ではないのですか？」

セイバーからの質問に頷きながら、

「……ん？ああ常人が武器を持っている、ただの一般人だよ。なあセイバーまだまだ訊きたいことがあるんだ」

こうして俺は様々なことをセイバーに教えてもらうのであった。

第九弾 Fユニットの刺客

あれから何時間経過しただろうか、様々なことを話し合った。魔力、聖霊、宝王剣、セイバーのことも……。そして、俺が周囲から『黒の疾風・紅い閃光』と呼ばれていることなどを。

【現在時刻PM23時32分】

現在の空は茜色だった空の姿はもうすでに無い空。星が空一面に広がっている夜空に支配されている。

そんな夜空の支配下にあたる地上では一つの真っ黒の自転車が走っていた。

こんな夜中の学園島は人気がない。こんな時間帯だからってこともありそうだが、なんといつてもあちらこちらから視界に入り込んでくるのは警察と教務科の連中だ。目立たないように自転車で走っているが、警備の数が多い。その上、自衛隊までもがウロウロしている状況だ……。この状況下で、どう行動するかが問題になってくる。

様々なことを考えている彼、紅坂の後ろの二台に乗っていた金髪美少女が話し掛ける。

「マスター目の前を見てください」

「……………ん？前……ッ！」

その言葉に考え込んでいた俺の思考が外の景色へと移った。言われた通り目の前の視界へと意識を傾けると……

危険。

立入禁止【KEEP OUT】

そんな看板が乱立し、黄色いテープのようなものが辺り一面張り巡らされていた。だが、こんなものに囲まれているものの、隙間があるので、出入りは自由だな。おそらく警備隊や警察、自衛隊共が出入りするための隙間だろう。

だが、何故だ。何があつたんだ？武偵高以外に何か事件が起きたのか？そんなことを考えていると、背後から声をかけられた。

「そこから先は侵入禁止だ。帰ってもらおうか」

と、告げる男、その人物は自衛隊が着用している迷彩服のような服装をしていた

「……………」

男に余り興味を示しもしない紅坂は、自身が身に着けているベルトに搭載されたホルスターから特別仕様に改造してある紅色のベレッタM8000を抜き取り満面の星夜空に銃口を向けた。

「何の真似だ？ 貴様は俺たちの監視の元で行動してもらうように捕まえてやるよ！！『黒の疾風・紅い閃光』！！」

男は大声を発しながら走り込んで来る。その行動から先を何時もなら透見（よみとろう）とするはずの紅坂だったが、あることに気がつく。そうナイフで戦う武偵のことを、そして目の前に立ちはだかつている男の武器もナイフ……ある結論に至った俺は――

パチンッ

と、指パッチンをする。

彼、紅坂 黒霧こと『黒の疾風・紅い閃光』は相手の正体を解き明かしたのだ。ナイフ一本で迫り来る迷彩服男の正体を――

名を萩原 願。藍色気味の黒い瞳に少し藍色が入っているような黒髪。腰には刀が二本差してある。特殊部隊『Fユニット』を操る男。二つ名的なモノは『暗黒の刃』である。

ダダダッ

そんな説明をしている間に俺との間合いを更に近づいていた萩原。こんなヤツ（Vランク）相手に“BASS”を使いたくないと思っていた俺はベレッタM8000を持っている右手を星夜空へと向けていた。その銃口は夜空に向いて…………指パツチンを鳴らし終えた左手でベレッタM8000のスライドを引く。

ガチャン…

スライドが擦れる音が満面の星夜空に響き渡る。擦れる音を聞き終えた紅坂は“あるモード”へと視野を変更させながら、後ろにいる金髪美少女セイバーに優しく小声で、

「…………目を瞑ってくれるかい？セイバー」

と、告げた紅坂の言葉に頷きながらその綺麗な翡翠色の瞳を睨で隠す。目を瞑ったかを確認した彼、紅坂は変化させた視野の様子と目の前の男が射程圏内に迫ろうとした時…………

ベレッタM8000の引き金を引いた…………

カッ！！

と眩い閃光（（ひかり））が輝きが放たれた瞬間、乾いた破裂音が満面の星夜空の夜中に響き渡る。

その破裂音が響き渡っている間に自転車のペダルを踏み込みこの場、つまり萩原から逃げようとした時だった。

ドゥンッ！！

一発の銃声が鳴り響く。それは、まるで身体全身を揺さぶるかのような音。

その銃声によって放たれた銃弾を避けようと自転車ごと身体を動かすが――

「！？」

先程使用した閃光弾の眩い閃光（（ひかり））によって視界が暗闇に馴染んでいなくなっていたのだ。放たれた銃弾は俺の右肩に被弾した。

「くっ……」

「マスター!!」

俺の後ろに居るセイバーは被弾したことを心配してくれていた。
綺麗な翡翠色の瞳を悲しませないように俺は……

対価能力を発動させる。

その頃のアリアたちは――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2316w/>

緋弾のARIA - 黒の疾風・紅い閃光

2012年1月9日21時53分発行